
魔法少女リリカルなのは～伝説の戦士と魔導師達～

闇と光の翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜伝説の戦士と魔導師達〜

【Nコード】

N0749S

【作者名】

闇と光の翼

【あらすじ】

次元世界と平行世界をまたにかけて活躍する銀河戦士団の零番隊隊長、その名はシユウ。

彼は第98管理外世界、地球の海鳴市に訪れる。

彼がそこで出会う事件とは……

A・S・StrikerS間のストーリーで展開します。

なのはキャラの他にカービー、戦国BASARAなどのクロスオー

バー作品になりますwwwついでに、技の一部に東京魔人学園剣風帖の奴を入れたりしますwww

文が所々間違つてたり、ネタを不定期に放つたり、またA・Sは一回目を通したただけなので、どうぞ宜しくお願いします。

1st PHASE 宇宙最強の男

ギョラクシーナイツ
銀河戦士団……それは次元世界、平行世界をまたにかけて事件を解決していく戦士達の集団である。

その零番隊隊長を務める男は伝説の戦士と呼ばれ、たたえられている。

その男の名は、シュウ・ガールランドと言う。

シュウ「うーん……暇だなあ……」

シュウは自分の部屋のベッドに寝転んでいた。

メタナイト「シュウ、いるか？」

シュウ「いなかったら通信にでないだろうが」

シュウが足をバタバタしていると、メタナイトが通信をひらき、投げやりに答える。

メタナイト「ハハハハ……暇を持て余しているようだな、シュウ」

シュウ「まあな……」

メタナイト「すまないが第98管理外世界、地球へ向かってくれな
いか？」

シュウはメタナイトの言葉に反応して顔を上げる。

シュウ「分かった」

シュウは支度をして自分の部屋を出た。

くシュウSIDEく

俺はナルシ……もとい、メタナイトに言われて第98管理外世界、地球へ降り立った。

シュウ「よつと……ありや？誰か戦ってんな？」

俺はビルの上からその様子を見る。

赤いドレスみたいな服を着た女の子と同じく白い服を着た女の子が戦っていた。

白い子が桜色のビームを放つ。赤い子がそれを避けるが、帽子が飛んで行った。

シュウ「くっ」

俺はその砲撃を見て口笛を吹いた。

赤い子と視線が一瞬あい、ソイツは白い子の方を睨みつける。

すると、「ん？」と言うように俺の方を見る。白い子も同様だ。

俺は手をヒラヒラと振って「続ける」とジェスチャーをするが、赤い子がハンマーを俺に突き出して言う。

赤い子「なにもんだお前？コイツの仲間か？」

シュウ「はあ？」

赤い子の問い掛けに俺は片眉を上げて言う。

シュウ「知らねえし、俺たつた今ここに来たし」

赤い子「ふ〜ん……って、どうやって結界に入っただよ!？」

呟いた後、またハンマーでビシッと俺を指して怒鳴る。

シュウ「へ？ここ結界の中？そーなのかー」

俺はぼけーと言い放つ。

赤い子「てめえ！黙って聞いてりやあいい気になりやがっ……」

言い終わる前に、俺は急接近して彼女の首元に軽く手刀を当てる。
ちなみに、超能力で空を飛んでいるので落ちる心配は無い。

赤い子（コ……コイツ、速え！）

彼女はゴクリと喉を鳴らす。

俺は刹那で前にいたビルまで戻る。

赤い子「シグナム！」

シュウ（！）

俺はある気配を察知し、前転して身を交わすと、桃色の髪のポニテールの女性が剣を俺がいた場所に振り下ろしていた。

シグナム「ほう……なかなかいい筋をしているな」

シュウ「生憎、伊達に修羅場を潜ってないんでね」

シグナムがニヤリと笑いながら言うと、俺は鼻を鳴らして言い返す。
すると、いつの間にか金髪の少女と犬耳の女性が現れた。

少女「私は時空管理局嘱託魔道士、フェイト・テストロッサ。あなたは？出身世界と目的を教えて？」

シグナムと赤い子は黙っている。俺も同様だ。いや、話せないのだ。

シュウ「言う事は出来ないが、アンタの仲間だという事は確かだ」

俺はボソツと言う。

すると、今度は銀髪の犬耳の男性も出て来た。

シュウ「Hum……どうやら役者は揃ったようだな」

俺は辺りを見回して呟く。

四対三。数的にはコチラが有利だが、敵の力がわからない為、結局は五分五分といったところだろうか。

犬耳同士、赤白、金髪と桃色髪と俺。いざ！勝負！

シグナム「お前は何という名だ？」

シュウ「無駄だ。俺が名を教えれば混乱に成り兼ねんな」

俺はシグナムの促しを拒否する。

シグナム「まあいい。武器を取れ、二人同時に来るがいい」

シュウ「はあ……来たれ」

俺は溜め息をついて左手から両手剣、神剣ドラゴアーツを取り出して構える。

シグナム「レヴァンティン、カートリッジロード！」

レヴァンティン「エクスプローズイオン！」

シグナムはレヴァンティンという名の剣を構えると、薬莖が一発排出され、刀身が炎に包まれる。

シグナム「紫電一閃！」

フェイトが鎌でレヴァンティンを防ぐが、柄が真つ二つになるが俺がその隙にドラゴアーツを振りかぶる。

シュウ「だぁー！ー！」

シグナムがレヴァンティンでガードするが、凄まじい力がレヴァンティンとシグナムに襲い掛かる。

シグナム「くっ……！（一発一発が重い……一撃でも喰らえば命取りか……）」

シグナムが俺を弾き飛ばすがフェイトが再生させた鎌で切り掛かる。

しかし、シグナムが反撃してコアらしき部分にヒビが入った。

シュウ「オラオラオラオラオラオラオラ！」

俺は目にも留まらぬ速さで連撃を繰り出す。

シグナム（馬鹿な……！あんな剣を片手でこれ程の速さで……！）

シグナムは俺の剣技に目を見張っている。だが、直ぐに落ち着きを取り戻し、

シグナム「素晴らしい腕だ、今までこれ程の腕前の者と立ち会えるとは思わなかったぞ！」

シュウ「アンタも中々いいセンしてるぜえ！」

俺達はそう会話をしながら剣を交え続ける。

赤い子「シグナム！取り敢えずアレは取った。戻るぞ！」

シグナム「ちっ……今回はここまでにしておこつ」

シュウ「ああ、まだ本気じゃねえしな」

急にシグナムが舌打ちをしてレヴァンティンを鞘に収めながら言う
と、俺もドラゴアーツを封じながら話す。

シグナム「（まだ全力では無い！？奴は化け物か！？）また何処か
で刃を交えるだろうな」

シュウ「待てよ」

シグナムが立ち去ろうとする時、俺はシグナムを制すと彼女は振り
向く。

シュウ「シュウ。それが俺の名だ」

俺はニツと笑いながら名前を教えた。コイツ程の奴なら名前を教え
ても罰は当たらんだろう。

シグナム「シュウか。覚えておこう」

シグナムはそう言って立ち去った。

シュウ「……………」

フェイト「……………」

俺とフェイトは無言で向かい合う。

シュウ「えっと……………管理局の魔道士さん……………だっけ？」

俺がそう聞くと、フェイトはゆっくりと頷く。

シュウ「……じゃあ、取り敢えず話がしたいから案内してくれないかな？武器もそんな状態だしさ」

フェイト「貴方は……？」

フェイトは俺を怖がっているような視線で言ってきたので俺は再びニツと笑って言う。

シュウ「シュウ・ガーランド。宇宙最強と呼ばれる男さ」

1st PHASE 宇宙最強の男（後書き）

シュウ「なんだかんだで始まったなこの小説」

闇「うん。ホントは別のサイトに載せてた奴だけどさあ、そのサイトに無い展開もするつもりだからそのつもりで」

シュウ「はあ……」

オリ主設定1

名前

シユウ・ガーランド

外見年齢

18

性別

男

人種

スーパーコーディネイター+α

使用武器

ドラゴアーツ：女神の祝福を受けた神剣、柄は銀色刃は白。

デイル：赤黒い刃を持つ日本刀で、斬殺した者の魂を喰らう魔刀だが、その性質を知ってからか、彼と関連深い人物が死後デイルに宿る事もある。喰らった魂は攻撃、回復、蘇生等に使われる。

備考

困っている人を放って置けない性格で、見た目はクールだが実は活発で明るい青年。ある事情の為、寿命が長い。閃光の如く素早く華麗な剣技で敵を圧倒するが、無駄な血は流さないタイプ

2nd PHASE 伝説の戦士の事情（前書き）

謎の女騎士、シグナムと刃を交えたシュウ。はたして彼女の目的は
何なのか？

魔法少女リリカルなのは〜伝説の戦士と魔導士達〜始まります。

2nd PHASE 伝説の戦士の事情

俺は時空管理局本局を散策中である。

あの白い子はリンカーコアとか言う物が縮小しているが、命に別状はないらしい。フェイトも腕の負傷ぐらいですんだ。

……にしてもさっきから視線が気になる。まあ、俺は管理局の人間じゃねえし、仕方ないことか。

相変わらずぶくぶらしていると、三人に会った。

シュウ「あ、もう大丈夫なのか？」

フェイト「はい」

俺が声をかけると、三人が振り向いてフェイトが口を開く。

シュウ「まあ、あれくらいじゃ俺は怯まないね。俺なんか腕がポローンとすっ飛んでったから」

俺がこう言つと、三人は顔を蒼白にし、

女の子「そんな自転車のカギみたいに……」

と女の子が言つと、俺は笑い飛ばして言った。

シュウ「気にすんなって！再生出来るから心配しなさんな」

それから俺達は自己紹介しつつある部屋へ向かった。

少年「なのは！」

犬耳「なのは！フェイト！」

なのは「ユーノ君、アルフさん！」

俺達が部屋に入ると二人が出迎え、なのはがその二人の名を呼ぶ。

シュウ（あれ？何か厄介な事になりそうな気が……）

俺の勘は殆ど当たる。

アルフ「それにしても、アイツらの魔法……」シュウ「ありゃあベル力式だな。風の噂で聞いたんだけど」

ベル力式とは、以前ミッド式と魔法文化を二分化した形式、ミッド式が広域型なら、ベル力式は対人型。高い力を持つ者は騎士と呼ばれたと言う。

アルフ「それに、その騎士と対等に渡り合うアンタは何者だい？」

シュウ「あんなの準備運動にもならんよ。俺は伝説と言われているからさ」

アルフがこんな事言ってきたので俺は事実を話すと、周りが騒然となる。

クロノ「ま、まさか貴方は……シュウ・ガールランド？」

シュウ「そうだけど？」

俺がこう言つと、なのは以外の全員が目を丸くする。

なのは「え？え？どうしたの？」

ユーノ「この人はある世界の大戦で、防衛軍側を勝利に導いた伝説の戦士と呼ばれていて、その名前を知らない人はいない程有名なんだよ」

なのは「ふえええええ！？」

ユーノが説明すると、なのはが妙な叫び声をあげる。

クロノがなのはとフェイトを面会があるからと促すと、二人を連れて行った。

俺は再び散策を始めた。

俺達は今後の事についてアースラ艦長にしてクロノの母親、リンディ・ハラオウンが話をしている。

アースラスタッフはロストログア「闇の書」の搜索と魔道士襲撃事件の捜査になるという。

しかし、アースラは整備中のため動けず、なのはの保護を兼ねて、彼女の家の近所に本部を構えるという。

解散した後、俺はリンディを呼ばれた。

リンディ「貴方はどうするの？私としては、協力してくれれば嬉しいんだけど？」

シュウ「助かります。実の所、来たのはいいけど、何処に身を寄せようか考えてなくて途方にくれてたもんで。じゃあ、お言葉に甘えさせていただきます」

俺は出来る限りの丁寧語で答えを述べた。

-

俺はなのはとフェイトがベランダではしゃいでいるのを横目に荷物の整理をする。

ちなみに、俺は別の部屋で、俺色に染めている。

T・M・のポスターに武器と甲冑のレプリカ、魚拓、ギター、銀河戦士団旗その他諸々だ。俺は瞬間移動出来るので会議に問題は無い。

シュウ「そうだ。取り敢えず報告、報告と」

俺は報告書を書き始める。まあ、報告書と言っても箇条書だな。

謎の女騎士、シグナムと戦闘。相手は撤退。

アースラに身を寄せる。ロストロギアと魔道士襲撃事件を追うこととなる。今後進展の度に報告書する所存。

シュウ「まあ、こんなところだろう」

俺は伸びをして、ベランダに出て外を見た。

2nd PHASE 伝説の戦士の事情（後書き）

シュウ「なんかグダグダな内容だな」

闇「しょーがないって。俺にはこれぐらいしか出来ないし（汗）」

シュウ「次は俺の愛機が登場するぜ！」

3rd PHASE インフェルノ出撃

なのはとフェイトは小学校に行っていて留守だ。

シュウ「ん？何だメタナイト？」

唐突にメタナイトが通信を開く。

メタナイト「また被害が出た。魔道士が十数人、野生生物が約四体」

シュウ「リンカーコアさえありゃあ、なんでもいい訳か……なりふり構わず……か」

メタナイト「だな」

被害報告し、俺が苦笑いしながら言うとメタナイトも同意する。

シュウ「暇だなあ……」

通信が終わると、俺はこう呟き素振りを始める。

-

シュウ「ふう……今日の訓練はこれぐらいにしておくか」

筋練と素振り、精神統一の後夕暮れになっているのを見て俺はなのはにメールする。

シュウ「リンディから聞いたんだが、今日はフェイトが初登校した

らしいな。みんなの反応はどうだった？」

なのは「みんなとすぐ仲良くなれそうだったよ。シュウさんは何してたの？」

シュウ「筋練に、集中力を高めたり、素振りしたり、色々やったよ」

なのは「大変そうですね……そうだ！最近友達が出来たんだよ！はやてちゃんっていの！」

シュウ「へえ、機会があれば会ってみたいな」

こんな具合の内容だ。

メールを打ち終った後、俺は空を見た。

風が無く、静かだが嵐の前の静けというような感じで気になる。

シュウ「何事も起きなければならぬが……」

俺はふう……と溜め息をつきながら呟いた。翌日、なのは、バルデ
イッシュ、レイジングハートは無事に完治したようだが、エイミイ
が例の二人が現れた事を知らせる。

しかも、上空に所属不明の人型兵器が現れたという。俺は仕方なく
後者を選んだ。

俺は空間転移である場所へ向かう。

メタナイト「シュウ！？お前何故戻ってk……」シュウ「んな事は

どうだっていいからアイツは出せるか！」

俺はメタナイトの声を遮ってデツキへ向かう。

メタナイト「全機能異常無し！行け！」

俺はメタナイトの言葉を聞いて、叫んだ。

シュウ「シュウ・ガランド、インフェルノ！出るぞ！」

-

シュウ「ヴァ……ヴァラトブルク！？馬鹿な！？」

俺は驚きの声をあげる。だが、叩き潰すだけだ！

シュパールラケルタで敵MSを次々と両断していく。

シュウ「ちつ……しつこいんだよ！」

俺はビームライフルで腹や腕を撃ち抜いていく。

シュウ「消える消える消える消える消える……！」

俺はロングライフルを放つが、貫通して結界を破ってしまい、その中に次々とMSが入っていく。

シュウ「しまった……！しくじった……！」

俺は叫びながら追った。

「結界組SIDE」

なのは達は守護騎士三人と対峙している。

なのは達は話をしようとしているが、三人は聞く耳持たず。

シグナムはシュウがいないので少々テンションが下がっているのだが。

すると結界が破れ、中に巨大な機動兵器が次々と中に入って来る。

ヴィータ「な……何だコイツら!？」

他の人物達も空を見上げる。

シュウ「こちらシュウ、ソコにいる奴等聞こえるか？」

新たに入って来た青い翼の兵器が通信を開く。

シグナム（シュウだと!？）

シュウ「爆風に巻き込まれたく無かったら、どっか端っこでやれ！観戦したけりゃ勝手に見てろ!」

そう言っ注意を促すが、皆は呆気にとられていた。

「シュウSIDE」

俺はインフェルノを駆り、奴らに注意を促すがその場から動かない。
何故だ？

俺はドラグーンを射出して、マルチロックオンを展開する。

インフェルノはドラグーンフルバーストを放って半分近くを撃墜し、
大きな爆発音が響く。

すると、他は我に返り、再び戦闘を開始する。だが、以前よりかは
鎮静化している。

俺は回転斬りでMSを真つ二つにする。なんかもうガン。ム無双み
たいな感じだ。

何とかMSを全滅させて、状況を確認するとクロノがもう一人の騎
士を追い詰めたが、謎の仮面男が現れて隙を着き穴から逃げ出した
と言う。

シュウ「俺の……ミスだ……」

俺は何かにとり憑かれた様に呟いた。

4th PHASE 覚醒（前書き）

闇「この小説のイメージOPとED、並びにテーマ曲が決まりました」

A・S 篇

OP

resonance（アニメ、ソウルイーター主題歌）

T・M・Revolution

ED

ひとりじゃない（ドラゴンボールGT第一期ED）

DEEN

Strikers 篇

OP

Beyourwings（テイルズ オブ バースス主題歌）

GIRL NEXT DOOR

ED

Reset（ゲーム大神主題歌）

平原綾香

全般テーマ曲

SKILL（第二次スーパーロボット大戦αOP）

JAM project

闇「作品やキャラクターに対するイメージで自分の好きな曲で選んだけなので自己満足になっているような気がする……因みに斬ZANは主人公のテーマ曲を兼ねています」

4 t h P H A S E 覚醒

俺は自分の部屋でぶっ倒れていた。ロングライフルで結界を破ってしまった事に後悔しているのだ。

シュウ「あゝあ……なんかもう、傷心した……」

俺は力無く呟くと、マイナスな考えを捨て、前に見つけた水色の寶石を取り出してある事を願い、ドラゴアーツを取った。

-

シュウ「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ」

俺はこんな笑い方をして唸る。部屋が激戦でボロボロになっているからだ。

シュウ「やつべ……取り敢えず部屋を片付けないと」

俺はあゝやだやだと言いながら片付けに取り掛かる。

シュウ「こんなぐちゃぐちゃになっちゃって……床に出来た焦げ目は諦めるとして、まさかアレを倒す俺ってやっぱり化け物？いや、化け物通り越して神だしな」

俺は自問自答しながら急ピッチで片付ける。

今日はなのはとフェイトが俺の部屋に来ることになっている。

なのは「シュウさん!」

シュウ「おお、来たか!入れ入れ!」

二人がやって来て俺は笑顔で出迎える。二人が顔を赤くしてるのは何故だ?

なのは「ほえ……シュウさんの部屋すごい……」

フェイト「何かのポスターもあるね」

なのはが俺の部屋を見て率直な感想を述べると、フェイトがT・Mのロゴが描かれた自作ポスターを見て言う。

シュウ「ハハハ、なんかゴチャゴチャしてっけど、取り敢えず好きなどここに座っていいよ」

俺はさつきと違う笑いで二人を促す。

フェイトとアドレスを交換した後、なのはとフェイトと話をした。

なのは「あの、前にロボットに乗ってましたよね?あのロボットって何なんですか?」

俺はインフェルノについて話し始める。

インフェルノガンダムは俺の親父がフリーダムをベースにした機体であり、殆どは後継機の武装や外観なのだがシュペールラケルタビームサーベルをノーマル、シザース、アックス、ランス、最大出力のロングソードに変えられる事が最大の特徴だ。

二人がほえ〜と感心していると俺は空気が変わるのを察知する。

フェイト「どうしたの？」

シュウ「風が止んだ……来る！」

俺が目を見開いて言うと、サイレンが鳴り響く。

俺はアレからぶん取った銃を取り出す。

-

マンションの一室にある司令部にいる俺達は目の前にあるモニターを見ている。人っ子一人いな……いや、訂正する。シグナムと犬耳の男性が砂漠にいた。

こりゃ、出るしか無いな。先読みをしてこの答えが出る。

エイミー「シュウ君？どうしたの？」

シュウ「フェイトに着いていく。俺の勘がそう告げている」

キョトンとしているエイミーを余所に俺はフェイトと共にその世界へ向かった。

俺達はその世界へ降り立った。

シュウ「同じような景色ばっかだからな。迷わないようにな」

フェイト「うん」

俺がフェイトに注意してシグナムの波動をキャッチする。

シグナムはデカイ虫みたいなのと戦っている。

シュウ「奴の魂を貪り喰らうか……」

そう言いながら俺は右手から日本刀を呼び出し、鞘から引き抜いた。その刀身は血がベッタリとついたような赤黒い刃だった。

俺はシグナムが苦戦していると見ると、フェイトと共に虫をぶっ倒す。

シュウ「ディールよ、彼の魂を喰らえ。我が許す」

俺が呟くと、ディールが輝きだし、死んだ虫の魂を封印、もとい喰らっていく。

エイミイが何やら言っているが、俺はスルー。

シグナム「久しぶりだな、シュウ」

シュウ「ああ、ソッチは相変わらずリンカーコア盗みまくってんのか？」

シグナムが俺を見てニヤリと笑いながら言っと、俺はさほど興味無しといった感じで無視する。

シグナム「まあいい。テストロッサの技術も中々だが、実のところ、

同じ剣を取る者としてお前との再戦を望んでいたのだがな」

シュウ「嬉しい事言ってくれるやん。そんじゃあ、来たれ」

俺はたまにでる関西弁を放って、ドラゴアーツを取り出し構える。

シグナム「フッフツ……そうだ、ソレを待っていた！」

俺とシグナムは同時に動き、それぞれの相棒を構えて突進する。

シュウ「せいやあ！」

俺はドラゴアーツを横に薙ぎ払うが、シグナムはバックステップで回避し、レヴァンティンを奮うが、俺は素手で受け止める。

シグナム「なっ……！」

俺はシグナムが驚いている隙にミドルキックを繰り出して、シグナムを吹き飛ばす。しかし、障壁を張っていたのでさほどダメージは無いようだ。

俺は刹那でシグナムの懷に飛び込むが、レヴァンティンで防がれる。

シュウ「いいじゃねえかシグナム！」

シグナム「お前も中々だ」

俺とシグナムはニヤリと笑うと、構えに入る。

シグナムは竹中。兵衛が扱う連結刃を奮い、連結刃が伸びながら俺

に迫るが、

シュウ「ソードビーム！」

宇宙最強と名高い剣技（使えるのは俺を含め四人だけ）であるソードビームを放ち、光の刃が連結刃を弾いて、通った砂漠に巨大な溝を作り出し、その溝に青色の電気が発生する。

シグナム「ば……馬鹿……な……！」

シグナムは動揺を隠しきれない。

シュウ「コイツこそが世界で四人しか扱えないと言われる技、名はソードビーム」

シグナム「ソード……ビーム」

俺はドラゴアーツを奮って堂々と言うと、シグナムが呆けた様子で言う。アレ？アニメの再現じゃねこれ？

気を取り直して再び連結刃を奮うが、俺は”刀狼流し”で連結刃の間を縫ってドラゴアーツを振り下ろす。

だが、何処からか謎の仮面の男が現れ、間に割り込む。

シグナム「何者だ！？」

仮面の男「貴様の思うようにはさせん」

シグナムの問いかけを無視し、俺に言い放つと俺はバインドで拘束

される。

シュウ「っ！」

すると仮面の男はフェイトの胸に腕を突き刺した。

シュウ「きiiiiiiiiいさああああああああああああああああああああああ！」

俺は怒りを爆発させ、バインドを力付くで破壊した。

「シグナムSIDE」

私は呆気にとられてしまった。

突如として現れた仮面の男がシュウを拘束し、テストロツサのリンカーコアを奪ったのだ。すると、

シュウ「きiiiiiiiiいさああああああああああああああああああああああ！」

シュウが突然怒号をあげ、バインドを力付くで破壊し、仮面の男に剣を奮った。その速さは私と戦った時とは段違いに速かった。

仮面の男「ぐおおおおおお！？」

仮面の男が障壁を張るが、呆気なく破壊され、刃が奴の体に食い込む。

仮面の男は命からがら逃げたようだが、シュウが私の方を見た時、ハッとした。

シュウの瞳は中心だけが黒く、その周りが藍色に変わっていた。

シュウ「……………」

シュウは無言のままテストロッサを抱き抱えると、姿を消した。

シグナム「なんなのだ……………あの力は……………」

私は呆然とシュウがいた場所を見つめていた。

4 t h P H A S E 覚醒（後書き）

作者の独り言

ああゝエアライド絡みの話やりたいなゝ

あつ、でも何を出そう？ドラグーンは固定だし……ウイングか？いやいやジェットも捨て難いぞ……

ってこんな事で頭使っただけ無駄か。書いてる内に決まるだろうし、気長に行こう……

5th PHASE 謎の笑み

俺達は会議室に集まっている。

いつものメンバーに加え、フェイトとなのはが以前面会したギア・グレアムの使い魔、リーゼ・ロットとリーゼ・アリアの二人だ。

因みに、ユーノは無限書庫と呼ばれる場所に行ったらしい。

そこは次元世界の情報をリアルタイムで保存していく施設だという。だが、整理が出来ておらず、検索魔法やサポートが得意なユーノが抜擢されたようだ。

フェイトはリンカーコアに大きなダメージを受けていたようだが、命に別状はないらしい。

シュウ「俺が空間転移しなかったらどうなってたんだろうな……」

俺は想像して顔をしかめる。

エイミィ「三人が出動してからしばらくしたら駐屯所の管理システムがクラッキングされて、指揮や連絡がとれなくて……」

シュウ「気にするなエイミィ、失敗やミスは誰にでもあるさ。俺も初陣で幾らか失敗したもんさ」

俺がエイミィを慰めると、ちょっと立ち直ったようだ。

リンディ「それにしても、向こうの機材は管理局で使っている物と同じシステムなのに……それを外部からクラッキングできる人間なんているのかしら？」

リンディが自分の顎をさすりながら思考をするが、進展が無い。馬鹿か？コイツら？

シュウ「あんたら馬鹿ですかい？何故誰も内部犯行と読まねえんだあ？」

俺は沖田。悟の口調で罵ると、皆は驚愕する。

シュウ「あくまで推測だが、闇の書をどうにかしちまおうと踏んだんだろうなあ。仮面男は？」

俺はアリアとロッテに威圧感を与えながら言う。俺の目はごまかせねえぞ？

シュウ「つまり単刀直入に言えば、あの仮面男、もしくはソイツの主が闇の書に怨みを持っている可能性がある……以上が俺の推測だ」

無理矢理結論を述べて席に座るが、リンディが問い掛けて来た。

リンディ「ちょっと待って！あの時に見せた能力について説明して貰えるかしら？」

リンディがそう言つと、モニターに瞳の形が変わっている俺が映る。やっべ！忘れてた。

シュウ「アレはS・E・E・Dと呼ばれる概念、能力なんだ。以上」

俺がズバツと言うと、辺りがシーンとなる。

エイミィ「な、なにそれ!？」

クロノ「何故そんな簡単に!？」

シュウ「敵に聞かれてる可能性があるからな」

エイミィとクロノが反論するが、俺は無視して再びアリアとロツテ……リーゼをニヤリと笑いながら睨む。二人も若干睨み返して来ている。バレバレだな。確定的だな。

俺は右手で銃の形を作り、腕を外側に振って（去り際にやる俺の癖である）会議室を後にした。

-

俺は部屋に戻った後、ユーノから闇の書に関する情報が入って来たのでそれに目を通す。

闇の書……正式には夜天の魔導書という名らしい。

夜天の魔導書とは、偉大な魔導士達の技術を集め、研究するための魔導書。

破壊の力を振るうようになったのは以前の主がプログラムを改変したため。そのため機能が暴走し、それが転生と無限再生の原因となったようだ。

更に一定期間集められないで放置されていると、主自身の魔力を吸い取り、完成すれば魔力が底を尽きるまで破壊活動に使わせる。主といい、闇の書といい、何とも難儀な話だ。

俺はメタナイトに報告書を書いて送った後、眠りについた。

-

翌日、俺は気晴らしに公園でのんびりしていた。

すると、見たくない顔を見てしまいそっぽを向く。

ピンク髪のポニーテール、シグナムだ。

シグナム「？シュウか？」

シュウ「何だお前、散歩か？」

シグナム「まあ、そんなところだ」

シグナムが偶然といった様子で声をかけるが、俺は棒読みでスルー

……はせずに問いかけると、苦笑しながら同意する。

シグナムが俺の隣に座ると、変な空気になる。

シュウ「（やつべ）……この空気どうにかせんと……」そういやあ、どうだ？順調か？」

俺が何とか話題を作ろうと口を開くが、シグナムがじっと俺の方を

見る。

シュウ「何だよ？」

シグナム「いや、何故友人があゝの状態になっても冷静だったのか、何故、私達が手を下しても動じず、あの男の場合に激高したのか、気になつてな……」

俺が眉間にシワを寄せながら言うと、シグナムが呟く。

シュウ「ああ、あれな。お前ら守護騎士には、悪意が感じられねえんだよ」

シグナム「え？」

俺がベンチにもたれ掛かりながら言うと、シグナムは驚く。

シュウ「守護騎士（お前ら）には悪意が感じられない。寧ろ誰かを助けようというのが伝わった。だから守護騎士は例外だったのさ」

俺がそう言つて微笑むと、シグナムは顔を赤くしてそっぽを向く。
へえ、可愛いトコあんじゃん。

シュウ「何があつた？話してみ？」

シグナムは少々戸惑いながらも話始めた。

闇の書はなのと同じ年で、足が悪い事―恐らくはやてのことだろ
う―、そしてソレが闇の書に影響が関係している事、はやては魔力
を集めている事を知らない事。主の病の為に悪行を承知でやってい

る……随分と健気じゃねえかよ、泣けるぜ；

シグナム「シュウ、この事はd」シュウ「案ずるな、俺はお前らみたいな奴は嫌いじゃねえ。黙っておいてやるよ」

シグナム「すまないな」

シュウ「なんの」

シグナムが忠告しようとするが、俺が言葉を遮って言うとシグナムがホッとした様子で言ってきたので、一言で笑って応える。だから顔赤くすんなってwwww

シグナム（何だ？この感じは？まるで……胸を締め付けられるようなこの感覚は……？）

俺はよっこいと立ち上がって、あの動作をしながら立ち去った。

シグナム（シュウ……か、フフッ……）

5 t h P H A S E 謎の笑み（後書き）

作者の独り言

すべらない話はマジで面白いよなあ〜。

そくだ。俺も面白い（馬鹿な奴の）話があるから、やってみるかな
（

6th PHASE クリスマス・イブ

俺はバイト先から戻り、ソファに寝転びながら携帯を眺めている。

今日は十二月二十三日、クリスマスイブの前日なのだが、俺にはそんなもん関係ない。色々忙しいのだ。部下に指示出したり、訓練したり、メタナイトの奴を罵ったりな。

因みに何時からバイトしているのかというと、ざっと二、三日週間前からだ。建設系統のバイトで、俺の目茶苦茶な働きぶりに職場の人達苦笑いだっただけな。

それで、なのはとフェイトはなのはの実家、翠屋でクリスマスパーティーを開いている。実際は俺も誘いたかったようだが、俺はその時携帯を置いてきていた。バイト中にぶっ壊れる可能性があるからな。

それで、明日はやてにサプライズプレゼントをするつもりのようなのだが、しゃーないから俺も行くことにした。

-

どうしてなの!?

アリサとすずかが盛り上がっている時、その二人以外は変な空気になっている。

シュウ（なんかめんどくせえ事になったな……）

シグナム（そうだな……何故こうなったんだ？）

俺とシグナムはアイコンタクトで会話し、揃って溜め息を着く。

シュウ「ちっ……あの馬鹿野郎が……」

俺はボソツと守護騎士共を横目で見ながら、毒づく。

はやて「？なのはちゃん、そこにいる人誰？」

シュウ「俺はシュウ・ガールランド。はじめまして、はやて。君の事はなのはから聞いているよ」
はやてが俺の事が気になっていたようなので取り敢えず名乗る。

シュウ「……………」

俺は病室の窓の方へ歩み寄り、空を見る。ぱつと見、「コイツ宇宙人と交信してんじゃないね？」ってぐらいの目で。

シュウ「ちっ……厄介な事になってきやがった……」

俺は奴らの波動を感じ取り、舌打ちをしながら齒軋りをする。

シュウ「コイツは……盛大なPartyになりそうだ」

俺はニヤリと笑いながら呟くと、コートをかけ直し、空間転移で空へ躍り上がる。

あるビルの上に着地すると、人々が混乱しているのが見て取れる。巨大な生命体が空を埋め尽くしているからだ。軽く千は超える。

空色の一つ目の奴と魚みたいな姿で中心に目玉がある奴、更に目が着いたトウモロコシみたいな黄色い体に白い棒みたいなのがついた奴が大量に浮かんでいる。

シュウ「ヤレヤレ……」

俺は時を止めて片っ端から斬りまくる。

指を鳴らすと、生命体全てが煙をあげながら爆発した。

シュウ「邪魔物は消えた、心も晴れ晴れよ。さて、戻るか」

俺はなのは達の所へ戻った。

-

なのは「シュウさん、何処行つてたんですか!？」

シュウ「ああ、すまぬな。諸事情により別の場所に向かっていた」

なのはがニャーニャー喚いているが事情を説明してスルーする。

シュウ「一応あの事は話したんだな？」

俺がフェイトに聞くと、頷く。

シュウ「そうかい。なら話がええ、実は俺ならば何とかなるかも知れん。ま、少タリスクが高いがな……何時まで隠れてるつもりだ？」

俺ならばはやてが助かるかも知れないと言った後、後方を睨みつける。

「凄いな、完全に気配を消していたというのに」

すると、何処からか仮面の男が現れる。

シュウ「っ！？何じゃこりゃあ！？」

いつの間にか拘束されている俺達、外そうとするが硬くてめんどく
さい。

すると、もう一人の仮面の男が現れ、最初の仮面の男が闇の書を取り出し、シグナムと金髪の女性……シャマルのリンカーコアを吸収する。

完成させる為なら何でもあり……か……

「シュウ……てめえええええええええ！」

俺は覇気を解放してバインドを破壊し、仮面の男達を睨みつける。

「シュウ、正体を見せやがれええええええええええ！」

俺は完全にブチ切れて覇気をぶつけると、仮面の男達が消え、気を失ったリーゼが倒れていた。

俺は唐突に聞こえた咆哮を聞き前を見ると、銀髪で紅の瞳を持った女性が立っていた。

シュウ「おもしれえ」

俺は右手に漆黒の光球を構えている女性を見て、ニヤリと笑いながら呟いた。

6th PHASE クリスマス・イブ（後書き）

シュウ「闇の書戦は呆気なく終わらせるつもりらしいな？」

闇「まあね。アレ使うのはそこぐらいしか無いだろうしさ」

シュウ「でもアレって一種のチートだよな？」

闇「……チートだな」

7th PHASE リンフォース

黒衣の女性が作り出した巨大な闇の球体、俺はそれを睨みつける。

闇の書「デアボリック・エミッション……」

女性……闇の書がそう呟くと、黒い球体が収縮していく。

なのは「っ……！」

フェイト「空間攻撃……！？」

空間攻撃……つまり広範囲を攻撃出来る技か……だが、俺にはそんなもん効かねえ！

闇の書「闇に染まれ……」

シュウ「あゝらよつと」

収縮した球体が弾けたように飛んで来るが、俺はなのはとフェイトの手を握って緊張感の無い口調で空間転移……次元連結システムを使用して完全回避する。

ついでにビル陰に隠れて待機する。

シュウ「ヤレヤレ、俺は空間転移で何とかなるが、二人にはちとばっかしきちいだろうなあ……」

俺は独り言を呟いて舌打ちをする。

シュウ「しゃーねえ、WAR DANCE!」

俺は何処からか六爪を取り出し、ソレを展開する。

シュウ「うおらあ!」

俺は六爪で闇の書に切り掛かるが、防がれる。かつて……だが!

シュウ「冥王よ!」

俺は冥王の力を解放し、身体能力を爆発的に向上させる。勿論、一撃の重さも突破力も……だ。

六爪はバリアを破壊し、一閃を放つが交わされる。

シュウ「ちっ……」

俺は左手からミッド式でも、ベル力式でも無い普通の魔法陣を発生させ、魔導砲を放つが、呆気なく砲撃で掻き消される。

闇の書「咎人達に、滅びの光を……」

闇の書がこう言って右手を前に翳すと、何故かミッド式の魔法陣が展開され、桜色の魔力が収束していく。

ユーノ「アレは……まさか!？」

闇の書「星よ、集いて……全てを打ち砕く光となれ……」

闇の書はスターライトブレイカーを放とうとしており、四人が避難しようとしているが、俺は動かない。

♪ 最終鬼畜妹フランドール・S

アルフ「シュウ！？アンタ何してるんだい！？」

フェイト「シュウ早く！」

シュウ「撃ちたけりや撃つてみるや！このこんこんちき！」

俺がアルフとフェイトの促しを無視して闇の書を挑発すると、ムツとした表情になる。

闇の書「スターライトブレイカー」

闇の書はスターライトブレイカーを放つ。実際次元連結システム使った方が早いんだが、それでは呆気なくなさ過ぎる。だから……

シュウ「来たれ、ドラゴアーツ！」

俺はドラゴアーツを構えて力を溜めると、刃が輝き始める。

シュウ「ソードビーム！」

当たる寸前にソードビームを放つと、スターライトブレイカーが海の如く裂け、斬りながら闇の書に迫る。

闇の書は交わしきれずに直撃し、更に好機と俺は時を止めてめった打ちにする。

ニールキック、ローキック、アッパーカット、バルカンジャブ、天道突き、機神猛撃拳その他諸々。

最後に頭を左手でアイアンクロー、更に右手を後ろに引いて構え、時を動かす。

闇の書「!!?」

シュウ「Y a ! h a !」

呆気にとられる闇の書をニヤリと笑いながら腹に強烈な右ストレートを喰らわせ、闇の書は数メートル程吹っ飛んだ。

二人「鬼畜だー!」

ユーノとアルフの悲鳴に近い叫び声が俺の耳に飛び込んで来た。

闇の書は俺の鬼畜フルボッコでボロボロに……かと思いきや傷が癒えていく。だが、俺に投げる視線がちょっと怯えているような視線になっているが、仕方ないだろうな。

闇の書「我が主は……この世界が、自分の愛する者達を奪った世界が、悪い夢であって欲しいと願った。我はただ、それを叶えるのみ」
なのはとフェイトが投降と停止を呼び掛けるが、聞く耳もたず。ならば……

シュウ「闇の書よ……いや、夜天の剣よ」

俺が低い声で呟くと、一斉に俺に視線が集まる。

聞かないのならば……

シユウ「シユウ・ガールランドが命じる！攻撃を停止せよ！」

……無理矢理従わせるのみ！

俺はリスク無しの絶対遵守じゅつしゅのギアスを使用すると、闇の書の動きが止まった。

シユウ「そんな願いを叶えて、お前の主は……はやては喜ぶと思つてんのか！？」

なのは「心を閉ざして、何も考えずに主の願いを叶える為の道具でいて、あなたはそれでいいの！？」

闇の書「我は魔導書。ただの道具だ」

俺となのはが突っ掛かるように言うと、闇の書は無言で、いや涙を流しながら否定する。

シユウ「お前よお、俺がこんこんちき言つた時ムツとした顔になったよなあ？」

俺は根拠を着けて闇の書を説得する。

シユウ「確かにお前は道具かも知れねえ。だが！道具にも意志があるだろう？二人の持つてるデバイスにも意志がある」

俺がこう言つと、なのはとフェイトが頷き、レイジングハートとバルディツシュも点滅しながら同意する。

シュウ「ならば、聞いて来いよ？お前の主にさ」

俺はニツと笑うと、闇の書は拒む。

しゃーないんでその顔のまま右手を握って覇気を出すと、「ひいっ！」とモロに聞こえた。バツチリトラウマになってやんの……

しばらくして、はやてから念話が来たらしい。俺はこちらがわの魔法は使えんからなのはから話を聞く。

どうやら魔導書本体からコントロールを切り離れたのはいいが、俺の目の前にいるのは自動行動のプログラムだという。ならば、強い一撃を当てる事が出来れば、管理者権限が効くようになる。よし、

シュウ「なのは！スターライトブレイカーを使い！魔力ダメージでぶっ飛ばしやいい！加減無しの全力全開でな！」

俺がニツと笑うと、なのはも頷く。

なのははスターライトブレイカーの発射態勢に入り、俺はサイコキネシスで動きを封じる。

スターライトブレイカーが発射され、闇の書はなすすべなく桜色の光線に飲み込まれた。

シュウ「ふう、六魔^{りくま}を使うまでもなかったな」

俺はドラゴアーツを振り回して、爆心地を睨みつけると、地面が震動し始める。

爆心地には漆黒のドームのような物と、その側に白い光がある。

その光が破裂すると、ベルカ式の魔法陣の上にヴォンケンリッターが四方を囲むように待機している。

シグナム「我ら、夜天の下に集いし騎士……」

シャマル「主ある限り、我らの魂……尽きる事無し……」

犬耳「この身に命ある限り、我らは御身の下にあり……」

ヴィータ「我らが主、夜天の王……八神はやての名の下に！」

ヴォンケンリッターがこう言うと、中心の球体が弾け、バリアジャケットを展開し、十字架を模した杖を持ったはやてが現れる。

シュウ「……」

なのは「はやてちゃん！」

その光景になのはが嬉しそうに反応し、俺は口笛を吹く。

はやてが詠唱すると黒い柱が発生し、バリアジャケットが追加され、髪は白く、目は青くなり、帽子をかぶる。

四人がはやてに謝っているが、はやては笑顔で受け流し、ヴィータがはやてに抱き着く。泣かせるねえ、畜生。

はやて「なのはちゃんもフェイトちゃんもシュウさんもゴメンな？
ウチの子達が色々迷惑かけてもって」

なのは「ううん」

フェイト「平気」

シュウ「Don't Worry」

なのはとフェイトが応え、俺は片目を粒り、左手を腰に当て、右の人差し指を立てて左右に振る。

クロノ「すまないな」

そこへクロノが現れ、状況を説明する。

あの黒い淀み、闇の書の防衛プログラムが暴走すると言う。あんま時間無いのね……

暴走を泊めるには二つの方法がある。

先ず一つ、物凄く強烈な氷結魔法を使って凍らせる。だが、凍らせてもコアが有る限り再生機能は止められない為、駄目。

二つ、アルカンシエルで吹っ飛ばす。コイツは周囲まで被害が及ぶ為、問題外。

すると、俺は目を光らせて叫ぶ。

シュウ「おっ!?!」

すると、視線が俺に集中する。

シュウ「ならよお、吸い込んじまえばいいんじゃない？ブラックホールで？」

全員「ブ、ブラックホール!？」

俺の提案に皆は声を揃えて驚愕する。

ブラックホールは極めて密度、質量が大きく、重力が強いため光も脱出できない天体である。

クロノ「確かに、質量、大きさ問わず飲み込む事の出来るブラックホールならば何とかなるかも知れないが、一体どうやって？」

シュウ「俺が前に行った世界でな、必ず何らかの能力を持つ機動兵器、オーバーマンっちゅー種類があつてな、伝説と呼ばれるオーバーマンの一体に重力のオーバースキルを持った奴がいる。俺はソイツの腕を持っているから、そのオーバーマン、ブリュンヒルデを召喚してコアごとぶっ壊すって魂胆だ」

俺がこう言つと、「おおー」と声があがる。

クロノ「実に個人の能力頼みで、ギャンブル性の高い作戦だが、やる価値はある」

はやて「防衛プログラムのバリアは魔力と物理の複合四層方式、先ずはソレを破る」

フェイト「バリアを抜いたら、私達の一斉砲撃でコアを露出」

シュウ「そんで、ブリュンヒルデを召喚してコアを素粒子よりも細かく破壊……と」

コレが俺達が考えた計画だ。

シュウ「さて……この戦いで、お前は何を見る……？」

俺は黒い淀みを睨みつけて呟く。

はやて「夜天の魔導書を呪われた闇の書と呼ばせたプログラム……闇の書の……闇」

はやてがそう言つと、スキュラのような生物が現れる。

シュウ「さて……来い！ブリュンヒルデの腕よ！」

俺はそう唱えると、ブリュンヒルデの腕を封じた腕輪が左手に着く。

まず、なのはとヴィータが叩く。

ヴィータはカートリッジを一発ロードし、超巨大なハンマーを振りかざす。

なのはは毎度お馴染みスターライトブレイカーを放ち、バリアを破壊した。

第二陣、シグナムとフェイト。

シグナムはカートリッジをロードし、レヴァンティンが弓に変わる。

シグナム「駆けよ、隼！」

レヴァンティン「シュツルムファルゲン！」

魔力で出来た弓が放たれるとバリアに当たり、爆発して二枚目を破壊する。

フェイトは自分よりも巨大な大剣に姿を変えたバルディッシュを振るうと、衝撃波が発生し、バリアに当たる。

更に、バルディッシュを天に掲げると雷を帯びる。

フェイト「撃ち抜け、雷神！」

バルディッシュ「ジェットザンバー」

フェイトは「神は裁き」を彷彿とさせる斬撃を放つと、バリアを通り越して足を切断する。

シュウ「♪ It's crazy」

俺は再生する様を見て眩く。

シュウ「さて、俺の番だな」

俺はニヤリと笑って吠え、両手を広げる。

シュウ「刮目せよ！サタンアックス！」

俺がそう言つと、右手に漆黒の巨大な戦斧が現れる。

シュウ「ロンギヌス！」

今度は左手に白銀の槍が姿を現し、俺は腕をクロスさせて投げる。

二つの武器は俺と一定の感覚を取り、サタンアックスは青に、ロンギヌスは緑色に輝く。

シュウ「ドラゴーツ！」

俺はそう言つて左手から出た柄を掴んで引き抜き、その力のままドラゴーツを上へ放り投げる。

ドラゴーツは二つの武器と同じ間隔で静止し、赤く輝きだす。

シュウ「三種の神器よ。我が刃となり、闇を切り裂き、闇を照らす剣となれ！我、汝らが主、シュウ・ガールランド！その力、我が剣となれ！」

俺が詠唱すると、三つの光から二本の光の筒が現れ、中間で交わり、巨大な正三角形を作り出した。

シュウ「来たれ！」

俺がそう叫ぶと、三角形は回転しながら小さくなっていき、俺の目の前で一つの白い光となった。

俺はその光を両手で潰し、手を遠ざけると、白い剣の形へと変わり、ソレを掴む。

シュウ「吠えろ！ファントムセイバー！！」

そう叫びながら振り回し、構えるとファントムセイバーはその姿を現した。

金色の刃に龍の装飾品が着いた柄、更にうつすらオーラのようなモノを纏っている。

シュウ「森羅万象の力……今、ここに解放っ！」

俺は力を溜めると、あちこちで落雷や、地震、アスファルトから火柱があがったりと凄い事になっている。

シュウ「森羅一閃！ディラギヤスター！！」

俺はソードビームを放つが、只のソードビームとはわけが違う。空を切り裂き、地を割り、海を轟かす威力を誇る技、ディラギヤスターを放つ。だが、コレも全力のほんの一部に過ぎない。全力ならば、水星を両断出来る。

ディラギヤスターは紙のようにバリアを破壊し、闇の書の闇を真っ二つにする。

ヴィータ「す……すっげえ……」

ヴィータが呆然と呟く。さて、そんなじゃあ、後は任せたぜ……お前等……！

三人はそれぞれ攻撃態勢に入る。

なのは「全力全開！スターライト……」

フェイト「雷光一閃！プラズマザンバー……」

フェイトは島津。弘のように雷をバルディッシュに帯電させて構える。

はやて「ごめんな。おやすみな……」

はやては悲しそうな表情で呟き、砲撃の構えを取る。

はやて「響け、終焉の笛！ラグナロク……」

すると、はやての前にベルカ式の魔法陣が現れ、その角に三つの魔力光が収束していき、

三人「ブレイカー……」

同時に放つ。俺はそれを見届けると、左腕を掲げる。すると腕が茶色の機械的な姿へと変貌する。

シュウ「ブリュンヒルデの腕よ！」

俺は腕を掲げたまま叫ぶと、掌に黒い物体が発生し、

シュウ「その力を見せてみる！」

遠方へ投げつける。

ユーノがセットしておいた魔法陣に着地すると、黒い物体から茶色い体に黄色い髭、赤い目をした怪獣のような生物……ブリュンヒルデが現れ、咆哮をあげる。黒い物体……ブラックホールは、ブリュンヒルデの腹でうごめいている。

シュウ「後は任せたぞ！ブリュンヒルデ！行ってこい！」

俺はファントムセイバーを回転させ、指揮官のように闇の書の闇を指すと、咆哮をあげながら飛び込む。

ブリュンヒルデと闇の書の闇は数多の黒い物体に包み込まれ、消滅した。

闇の書の闇がいた場所には、ブラックホールの破片がちらほらと落ちている。

三人は嬉しそうにハイタッチをしている。

シュウ「……Mission……Complete……」

俺はファントムセイバーを戻しながら呟いた。

闇の書の闇との激戦の後、重大な話をしている。というのも……

フェイト「夜天の書の破壊！？」

なのは「どうして！？防御プログラムはもう破壊した筈じゃ！？」

……という訳だ。

なんでも、夜天の書の管制プログラム……つまり闇の書の意志の進言で、夜天の書本体は直ぐにプログラムを再生してしまうのだという。それで、次ははやてが浸蝕される可能性が高いため、自分が消えるというのだ。

シュウ（馬鹿馬鹿しい、やってられっか）

俺は足を組んで話を聞いている。

シュウ「あ……馬鹿馬鹿しいったらありやしねえ」

俺はヨッコイと立ち上がり、腕を振り回す。

なのは「ええ！？」

アルフ「シュウ！あんた何処に行くんだい！？」

シュウ「何、次の仕事場に向かうだけさ」

俺は空間転移を使用してこの場を去った。

-

儀式が始まるであろう時間帯に、俺はそれに立ち会う。なんだかなだで世話になったからな。

闇の書の意志……リインフォースの両サイドになのはとフェイトがデバイスを構えている。

俺は話を切り出す為に、待機している。

すると、はやてが車椅子を必死にこいでやって来る。

ありゃ？マズイかなこれ？

はやて「リインフォース！」

リインフォース「主はやて……」

俺達はこの成り行きを見守る事にする。

はやて「リインフォース！自分を破壊せんでええ！ウチが何とか制御するから……そんなんでええ！」

リインフォース「良いですよ、主はやて」

はやて「良い事ない！良い事なんか……なんもあらへん！」

あれ？なにやってんだアルセウス？

俺は唐突に現れたアルセウスを眺める。

リインフォース「随分と長い時を生きてきましたが、最後の最後で、私はあなたに綺麗な名前と心を頂きました。騎士達もあなたの傍にいます。何も心配有りません」

はやて「心配なんかそんな……」

アルセウスはグルグルと上空を動き回っている。俺だけしか見えな
いのだろう、他はアルセウスに気づいていない。

リインフォース「だから、私は笑って逝けます」

はやて「話聞かん子は嫌いや！マスターは私や！話聞いて！私がきつと何とかする！暴走なんかさせへんて約束したやんかあ！」

すると、アルセウスが上を向いた。成る程、今話せつてか！

シュウ「あゝハイハイハイハイ！注目！」

俺は手をあげて注意を引き付ける。

シュウ「実はだな、あの時に闇の書の闇の残骸を俺が吸収しておいたんだよ。それでな、そのプログラムを使って改変して元通りにした」

俺がニヤリと笑って言うと、一斉に詰め寄ってくるが、華麗にスルーする。

俺達は場所を変えて、話し合いをする。

消えずに済んだとしても、管理局ではそれ相応の処置が下るだろうし、副隊長も不在だから銀河戦士団零番隊副隊長として共に戦う事に纏まった。

はやて「リインフォースの事、宜しく頼みます」

シュウ「任せろ、じゃあ、また十年後に」

はやてが笑って言うと、俺は笑い返して転移で移動した。

-

なのはとフェイトとはやてはそのまま管理局に入り、事件を解決しているとの事。

俺は自分が所有する戦艦で、十年後の世界へ飛んだ。ある気配を察して……

7th PHASE リンフォース（後書き）

シュウ・闇「第一部完結〜！」

シュウ「いや〜なんだかんだでA・S篇終わったな！」

闇「ああ。次はいよいよ本編、StrikerS篇に突入！オリジナルキャラ二人目にオリジナルデバイスも登場するからお楽しみに〜！」

8th PHASE 空への翼(前書き)

闇の書事件から十年後……舞台は魔法都市、ミッドチルダへ移る。

そこで起こる事件とは!?

魔法少女リリカルなのは〜伝説の戦士と魔導士達〜第二部、始まります。

8th PHASE 空への翼

俺はナルシ……じゃなくてメタナイトの命により、魔法都市ミッドチルダにいる。どうやらこの街で大規模な空港火災が発生したという。

俺はその現場の上空にいる。一体何をやってたらこんなデカイ火災が起きるんだ？

調査部隊によると、中に女の子が閉じ込められているらしい。

俺は弾丸の如く女の子がいるであろう建物の天井を突き破り、その目に飛び込んで来た状況を瞬時に判断し、今まさに女の子の方へと倒れようとしている像を強烈な回し蹴りで粉碎した。

シュウ「ふう……大丈夫か？」

俺は髪に着いた破片を払い落としながら問い掛けると、女の子はゆっくりと頷く。

無事を確認した俺は再び天井を突き破り、海上にカイオーガを呼び出し、とくせいで雨が降り出したのを確認すると、救助へ向かった。

-

「はやてSIDE」

ある危険な輸送物が引き起こした空港火災。あっという間に被害が広がり、私達本局の魔導士も事態を鎮めるために、頑張ってる。

私が氷結魔法で辺りを凍らせた後、何かの雄叫びが聞こえた。

はやて「!？雨？」

雄叫びが聞こえた後、急に雨が降り出した。何で雨なんか……

私はハッとしてある男の子を思い出す。

シュウ・ガールランド……六年程前に出会った、森羅万象を司る伝説と称される男の子……彼なら出来ない事じゃないと思う。

はやて（会いたいな……シュウ君……）

私は彼の事を思いながら、空を仰いだ。

-

（シュウSIDE）

シュウ「あゝ、寿命3秒ほど縮んだかも……」

メタナイト「中途半端な数字だな……」

俺が戻って来るなりこんなことを言ったのでメタナイトは半ば呆れ気味に反応する。

メタナイト「それより、よかったのか？」

シュウ「何が？」

俺はローブを脱ぎながら言う。

メタナイト「彼女達と再開しないで……だ」

シュウ「別に良いだろう？ 何時会いに行くとか俺の勝手だろ？」

俺がこう断言すると、メタナイトは完全に呆れた様子で部屋から出て行った。つーか、人の部屋に勝手に入ってんじゃねえよ。

俺は頭を掻きむしりながら外の景色に目を向けた。眼下に建ち並ぶ高層ビル。その奥にデーンとそびえる本部らしき建物。

俺は自分自身が強大な力を持つが故に焦土と化すかも知れぬ街を前にし、溜め息を着いた。

-

くなのはSIDE」

私はフェイトちゃんとはやてちゃんと三人で四年前の空港火災の時の事を話し合っている。

はやて「ホントに何やったんやろうなあ……急に雨が降って来るし……」

フェイト「それに、逃げ遅れた人達も殆ど頑丈な障壁に守られていたり、避難をしていたし……」

二人がかい摘まんで自分が見た光景を思い出しながら話している。二人はシュウ君がやったと予想しているけど、ハッキリとした根拠がないみたい。でも、私はその根拠がある。

なのは「二人とも、ちょっといい？」

私が口を二人がハッとして顔を向ける。

なのは「スバルを助けた時に……」

私はそう言いながらポケットから一枚の紙を取り出す。その紙には三つの剣が交わっている絵を背景に、「Shu・Garland」とスクリプトで書かれている。つまり、シュウ君の名刺だった。

はやて「コレって……やっぱり！」

私達は確信した、シュウ君が……ミッドにいる！

8 t h P H A S E 空への翼（後書き）

第二部スタート！

魔法都市、ミッドチルダへと降り立ったシュウ。彼は以前共闘した戦友^{とも}と再開する。

そして、あるロストログアを巡る三つ巴（？）の戦いが始まる！

オリ主設定2（前書き）

StrikerS篇の設定。

シュウの詳しい詳細や扱うデバイス、もう一人のオリキャラ設定を載せてます。

ネタバレ注意！

オリ主設定2

名

シュウ・ガールランド（本名マルス・セラ・アスハ）イメージキャス

ト：日野聡

人種

スーパーコーディネイターと神の混血

出身世界

第38管理外世界C・E・

魔導士ランク

総合SS+

階級

三等空佐

魔力光

藍色

誕生日

十月十七日

扱う流派

流派東方不敗

機神拳

備考

赤ん坊の頃から両親を亡くし、従姉兼婚約者の元へ引き取られるが、十五歳の誕生日に天涯孤独になる。

ツッコミ担当。十年経っても剣の腕は健在。

ヴァルセリオン

CT：木内秀信

シュウの扱う二丁ライフル型のインテリジェントデバイス。

待機状態

龍の紋様がついた黒いブレスレット
見た目

ストフリのビームライフル（二本セット）
ライフルフォーム

通常形態。

ブレードフォーム

銃身が横に開き、二刀流の剣に変わる形態。

ロングブラスターフォーム

ヴァルセリオンに縦に連結させた形態。

ツインブラスターフォーム

ヴァルセリオンを横に連結させた形態。

セーレ・ヴェルナンド イメージキャスト：関俊彦

誕生日

八月十一日

人種

戦闘機人

出身世界

不明

血液型

A 型

所属

銀河戦士団零番隊三席

魔力ランク

A +

魔力光

黒

階級

三尉に相当

備考

恐らく初となる、男性型戦闘機人。

ある理由で実験施設から逃げ出し、シュウに拾われ、名前を授けられてその恩を返す為に銀河戦士団に入団する。

大雑把だが、情に厚く、またシュウ同様絶対遵守のギアスが扱える。

9th PHASE 機動六課

空港火災から四年が経った。俺は暇な時にゲームをする事がある。今はモン。ン3rdをプレイしている。

シュウ「さて……そろそろ奴らに顔出さないと……」

俺は重い腰を上げ、ある場所へと向かった。

-

シュウ「懐かしいな、あの時以来会うことは無かったが、元気かな？」

俺は久しぶりの再開に胸を弾ませながらエントランスへ入る。

シュウ「あの、すいません。八神二佐に様があるのですか？」

俺がそう言った後、相手は少々ニヤついた様子で手続きをし、俺は部屋へと案内された。去り際に「ごゆっくり」と言われた時には張っ倒してやろうかと思った。

俺がドアをノックすると、「どうぞ」と懐かしい声が聞こえる。

俺は吹き出しそうになるのを堪えながら、部屋に入った。

シュウ「久しぶりだな、はやて」

はやて「シュウ君！」

俺が手を挙げながら挨拶すると、はやては喜びを最大限に表す様な顔をして駆け寄って来て、俺は、

シュウ「ほいつ」

はやての顔面に軽くはりてを喰らわせた。

はやて「痛っ……何すんのやシュウ君！」

シュウ「なにどさくさに紛れて抱き着こうとしてんだよ」

はやて「ちっ……ばれたか……」

はやてが口を尖らせて文句を言うと、俺が先読みで言い放つとはやては軽く舌打ちする。聞こえてっぞ？

はやて「それにしても、何で急に……？」

シュウ「お前さ、新しく部隊を立ち上げるつもりらしいな。だから俺も手伝おうかと思ってさ」

俺がニツと笑いながら言うと、再びはやてが抱き着こうとする。今度は受け止めた。

はやて「ありがとうなシュウ君！シュウ君がいれば百人力や！」

シュウ「へへへ……任せとけ。損はさせねえぜ」

俺ははやての髪を撫でながら言う。はやては俺に撫でられて「はう

「なんて言ってる。変わってねえなあ、やっぱり。」

「はやてSIDE」

私は業務を済ませて自分の部屋である人を待っている。何でも話がしたいらしいねんけど、一体誰やる？

そんな事を考えていると、ドアをノックする音が聞こえて、私は我に帰った。

はやて「どうぞ」

私がそう言うと同時にドアが開い……ええ！？ちよつ、待つ……ええ！？

シュウ「久しぶりだな、はやて」

部屋に入って来たのはシュウ君だった。六年以来会えなかったシュウ君が、目の前にいる！

はやて「シュウ君！」

私はシュウ君に駆け寄って抱き着こうと……

シュウ「ほいつ」

はやて「痛つ……何すんのやシュウ君！」

いきなり顔にはりてを喰らわせてきおつた……よかった、いつも

のシュウ君や。

シュウ「なにどさくさに紛れて抱き着こうとしてんだよ」

はやて「ちっ……ばれたか……」

シュウ君さすがに鋭いなあ。まっ、それが私の知ってるシュウ君やし。

はやて「それにしても、何で急に……？」

シュウ「お前さ、新しく部隊を立ち上げるつもりらしいな。だから、俺も手伝おうかと思ってさ」

シュウ君はニツと笑って言う。流石は銀河戦士団や。情報が速……へ？協力する……？またシュウ君と一緒に戦えるんや！

はやて「ありがとうなシュウ君！シュウ君がいれば百人力や！」

私は嬉しくてシュウ君に抱き着く。今度はしっかり受け止めてくれた。

シュウ「へへへ……任せとけ。損はさせねえぜ」

シュウ君は佐。のセリフを言いながら私の髪を撫でる。これ、なのはちゃん達に話したら怨まれるやろうなあ……えへへ……

-

（シュウSIDE）

さて、あの二人にははやてに話してもらうとして、俺はメタナイト

の所へと向かう。

シュウ「メタナイト、俺のデバイスはどんな感じだ？」

メタナイト「ああ、今のところ順調だ。だが……」

シュウ「だが……何だよ？」

ぱつと見、仮面で分らないが、深刻な顔をしているので何か問題があると悟る。

メタナイト「先程調べたのだが、お前の魔力ランクはオーバーSランクだとわかった」

シュウ「それで、最大砲撃だとデバイスが耐えられない可能性がある……と……まっ、衝撃を俺の方にコントロールすりゃあいだけの話だろうがよ」

メタナイト「お前のその楽観的な思考を分けて欲しいよ……」

メタナイトはそう言って溜め息を着く。

俺は何も言わずにそのデバイスを身につけて呼び掛ける。

シュウ「宜しく頼むぜ、ヴァルセリオン」

ヴァルセリオン「宜しくお願いします」

さて、行くか！

10th PHASE 集結

機動六課結成当日、俺達はロビーに整列している。俺は隊長陣の列にいたので結構な人数がいる事が一目でわかる。

銀河戦士団の面々は、少し離れた列に白い団員服を着て並んでいる。

確か、あのオレンジのツインテールがティアナ、赤髪がエリオ、桃色の髪のお静かそうな女の子がキャロで、確かあのショートカットはスバルって言うてたっけ？

そんな事を考えていると、はやてが指揮台程の高さの台に立ち、口を開いた。

はやて「機動六課課長、そしてこの本部隊舎の総部隊長、八神はやてです」

そう自己紹介すると隊員達が拍手をする。実際、俺はこういう堅苦しいのは嫌いだ。

はやて「平和と法の守護者、時空管理局の部隊として、事件に立ち向かい、人々を守っていく事が私達の使命であり、成すべき事です」

はやてはいつもの関西弁を潜めて話す。

はやて「実績と実力に溢れた指揮官陣。若く可能性に溢れたフォワード陣。それぞれ専門技術の持ち主のメカニックやバックヤードスタッフ。そして……私達のサポートを勤めてくれる銀河戦士団の皆さん。全員が一丸となって、事件に立ち向かって行けると信じてい

ます」

途中、明らかに俺達の事を言っていたので片眉を動かして反応する。セーレも同様だ。

はやて「ま、長い話は嫌われるんで、以上ここまで。機動六課課長、及び部隊長の八神はやてでした！」

最後に明らかに柔らかな口調で言いながら右腕をあげた。隊員達も拍手でそれに応える。

-

シュウ「ふう……いよいよだな……」

セーレ「へへへ……燃えてきたぜ！」

はやての挨拶の後、俺とセーレはこんなことを話ながらフォワード陣の四人に挨拶に向かった。

シュウ「お、いたいた。銀河戦士団零番隊長、シュウ・ガーランド」

セーレ「同じく、零番隊第三席、セーレ・ヴェルナンドだ。宜しく頼むぜ！」

四人「はっ……はい！宜しくお願いします！」

俺が声を掛けると、四人が一齐に振り向き、俺とセーレが名乗ると、少々戸惑いながらも、揃って挨拶した。

スバル「あ、あの！あの時はありがとうございました」

シュウ「え？……ああ！気にする事はないさ。俺が好きでやったことだからさ」

スバルが唐突にこう言ってきたので、俺は笑って言い返す。

セーレ「助けたって、前に話していた空港火災の？ふーん、こんな可愛い娘を手中に入れるとは……それでハー……ウゴッ！」

セーレがこんなことを吐かして来たんでセーレの顔面に無表情で裏拳を喰らわせてやった。

セーレ「冗談だって。何も疚しい事考えてないって」

シュウ「どうだか。鼻血なんか出して」

セーレ「すげえやこの人。もう数秒前の事忘れてるよ」

セーレが鼻を押さえながら言い、俺は冷ややかな目で毒づく。四人苦笑いしてるし。

シュウ「まあ、いいや。此处で会ったのも何かの縁、互いに頑張ろうぜ」

四人「はい！」

俺がそう言っと、四人は少し顔を緩めながら応える。

俺は時を止め、なのは達の所へ向かった。四人の驚く顔が目に見え、
ぶなあ……くつくつくつ……

「セーレSIDE」

リーダーが時間を動かすと、リーダーが消えた事にフォワードのガキ達が驚いていた。

セーレ「ハハハハッ！リーダーは時を操る事が出来るんだぜ！」

俺はドヤ顔で言っていると、ガキ達……いや、四人は驚愕の声をあげる。俺が自慢するような事じゃねえんだけどな。

キャラ「セーレさんってシュウさんの事が大好きなんですね」

セーレ「なーに言ってるんだいキャラちゃん！行き場も無かった俺を拾ってくれて、更に名前もくれた人に尽くそうと思わねえ奴なんていないっつーの！」

キャラが微笑みながら言うと、俺は再び朗々と発言する。

セーレ「よし、そろそろ訓練所に行った方がいいんじゃないか？案内するわ。はやて嬢から場所を聞いてるからよ」

四人（嬢……？）

俺がニツと笑いながら言うと、四人はキョトンとした顔をしている。何だ？俺なんか変な事言ったか？

「シュウスIDE」

ヤレヤレ……アイツらとゆっくり話すのは久しぶりだなあ……

俺が部屋に入って来るなり、三人が主の帰りを待っていた犬の如く駆け寄って来た。

シュウ「おうわ！」

俺は勢いで壁に叩き付けられた。

なのは「シュウ君久しぶり〜！」

なのはがにゃーにゃー言いながら俺に抱き着いて来て、フェイトが、「あつ！なのはズルイ！」と言って腕を組んで来た。

俺ははやて達に目を向けると、ヴィータはニヤニヤしながら、シャルは微笑ましいといった様子で、シグナムは複雑な顔、はやてなんかわなわなしながら俺にくっついて二人を睨み付けている。怖っ……

シュウ「ちょっ……なのは……苦し……」

俺が消え入りそうな声で呟いたら、なのはは棒読みで離れた。

シュウ「あのなあ……喜ぶのはいいけど……加減ってもんが……あるだろ……」

俺は呼吸を整えながら言う。

フェイト「なのは、やり過ぎ」

シュウ「オメーもいい加減離れる！」

フェイト「いだだだだだだだ！」

フェイトがくつついたまんまでうつとうしいんで、アイアンクローで無理矢理引きはがした。俺のアイアンクローは拷問級だ（リインフォース談）。

シュウ「つーか行かなくていいのかよ。お前の事だから、初っ端から訓練するつもりなんだろ？」

俺がそう言つと、二呼吸程の沈黙が流れ、なのはが「あっ」というような顔をする。凶星だった。

なのは「シュウ君！頑張ろうね！」

シュウ「Ha！当たり前的事を言っんじゃないやねえよ！」

なのはが振り向き座間に笑いながら言ってきたから、筆。口調で言い返してやった。

-

なのは達と別れた後、俺はオフィスで書類処理をする。分身合わせて四人でやっている訳だが。

俺が分身した時のバックヤード達の驚きようといったらまあ笑えた。元々得意だから30分程度で終わらせた。ついでに他の奴らの書類

も出来る限り引き受けて負担を減らす。

それも終わり、フォワード陣が少し、本当に少し気になり、訓練場に向かった。

前までには何も無かった海上の部隊にビル郡が出来ていた。

シュウ「ほう……」

俺は感心するように声をあげた。まあ、ドルダーザにも同じくような施設作っただし、別に変じゃないな。

……おっと、ドルダーザっていうのは、俺が所有する機動戦艦の事で、簡単に言えば俺流に改造したアニメ版ハル。ード。といったところだ。

ビル郡に着くと、手頃な高さのビルを見つけてひとつ飛びで屋上に踊り出る。そして、なのはと茶髪で眼鏡をかけた少女……シャリオ、通称シャリーがいる屋上にビル三つ分もある距離を飛んで華麗に着地する。

シュウ「よっと……どうだ？あの四人は？俺的には中々いいセンいっていると思うんだが？」

なのは「あ、シュウ君。皆、確かにいい動きしてるよ」

ポケットに手をつ込んだまま歩きながら言うと、なのはが笑いながら言う。

モニターに目を向けると、ティアナが魔力弾を二重にしてバリアを

貫通させて破壊する様が見て取れた。

シュウ「Hum……ティアナは結構素質があるな。あれは確かAAクラスの技術だよな？」

なのは「さっすがシュウ君！伊達に修羅場を渡り歩いて無いねえ」

再び感嘆するように言うと、なのはが微笑みながら冗談を言ってきた。俺も笑って返す。

訓練が終わった後、四人は心底くたびれた様子だった。

なのは「はい、今日はここまで！」

四人「ありがとうございます！」

四人は少々覇気のない声で言う。

シュウ「こりゃあ、ど偉い事になりそうだ……」

俺は独り言を呟いて頭を掻いた。

10th PHASE 集結（後書き）

フェイト「そういえば……」

闇「何？」

フェイト「何でセーレを出そうと思ったの？」

闇「ああ、本編見てて、『あれ？そういえば戦闘機人って女ばつかな？』って思ったのがきっかけかな？モデルは電王のアイツ」

フェイト（漫才みたいな組み合わせ……セーレがボケで、シュウがツッコミ？）

セーレ「まあ、そんな所」

フェイト「心読まれたΣ（。□。；）」

11th PHASE First Mission

あゝ、なんか久しぶりにゆっくり寝れたなあ。ここ最近ずっと30分ぐらいいしか寝れなかったから、結構疲れも残ってないな。

今朝は訓練がないんで、久々にアレをやりたいもんだ。

俺はちょい早めに食堂に向かった。

当たり前だろうが昨日よりいる人が少ない。大体5、6人ぐらいだろう。

朝飯を済ませ、部隊員にアレをやる事を告げると、電話越しに歓声があがるのが分かる。そんなにアレが気に入ったのか？

俺は集合場所だけを知らせて食堂を出た。

その向かい際になのはに会った。

なのは「あれ？ シュウ君今日は早いね？」

シュウ「ああ、今日は訓練が無いから、久しぶりにアレをやると思うてさ」

そう言うと、なのはが「ああ、アレね」と相槌を打つ。

え？何故なのはが知っているのかって？それは、数年前になのは達からビデオメールが来た時、アレをしている動画を送った為、アレの事を知っているのだ。

俺が訓練場のあの場所に行くと、既に全員集まっていた。

俺が指を鳴らすと、JAPが流れ出す。

恐らくお分かりの人もいるだろうが、一応触れておく。アレとは足軽ダ。スである。

以前、囚人達がスリ。ーを踊っているのを見て、こういうのやったら団結力が高まるかもしれないと踏んで取り入れたのである。実際、効果覲面だった。

その後軽い集会をして、俺は愛車で隊舎に戻った。

-

まだ昼と言うには早い時刻に俺は愛車をガレージに止めようかと思っていたら、黒いスポーツカーとそれを取り巻くフォワード陣が見えた。

俺は邪魔にならない場所に止めて愛車から出る。

なのは「あれ？ シュウ君フェ。ーリなんて持ってたっけ？」

シュウ「二、三年前にな」

なのはがさりげなくツツコンで来たんで、軽くスルーする。

シュウ「高かったからなあ〜コイツ。なんせ三千万したから」

フォワード陣「さ……三千万!？」

俺が衝撃の数値をカミングアウトすると、四人が口を揃えて驚愕する。フェイトなんか生気が抜けた顔してるしwwww

はやて「フェイトちゃん?おゝい……」

助手席に座っているはやてがフェイトの顔に手を振るが、反応無し。まるで屍のようだ。

俺がねこだましを使うと、ハッと我に帰った。

スバルとエリオは俺のフェ。ーリを見て目を輝かせている。まあ、高級車だから仕方ないかも知れんが。

シュウ「お互い変な奴がパートナーで大変だなあ……俺のは一頭身のナルシストだもん……」

ティアナ「はあ……頑張りましょう。お互いに」

シュウ「おう……」

俺はティアナに念話を送るとティアナも同意し、反応を返した後二人揃って溜め息をついた。

-

俺は自分の愛車をガレージに置いた後、フォワードの四人と話をする為に食堂へ向かった。

シュウ「相席失礼」

俺はそういつてフォワード陣がいる席に座った。

エリオ「あつ、シュウさん。どうぞ」

俺は以前行つた世界の事の話をし始める。

突如謎の力に目覚めた高校生達と共闘した事、人型機動兵器（恐らくロストロギア扱いになるかも知れない）を駆り戦場を飛び回った事、色んな意味で破天荒な奴らに会った事とか、出来る限りそこまでグロい奴を控えて話を進めていった。

四人は俺が人型機動兵器のパイロットだった事が印象的だったようだ。

昼食を済ませた後、皆で技術室へと向かった。

カービーよりちょい高いぐらいのラインフォース・ツヴァイ、通称ラインが説明をしている。

俺がラインの存在を知ったのは以前はやてに挨拶に行った後、食事ついでに紹介されたのだった。ラインが生まれた理由は、はやて曰く、「家族は多い方がええやろ？」だそうだ。はやてらしいっちゃあらしいがな。

因みに、俺のデバイスのヴァルセリオンは中距離主体のぱつと見ストフリのビームライフル、いやそれそのものだった。一応双剣にもなるらしい。

すると、いつの間にか能力制限の話になっている。

能力制限というのは所謂リミッターの様な物であり、一つの部隊に高魔力の魔導士を多数入れるための技……というか反則技である。

何気に驚いたのが、はやてが俺の0.5下だという事だ。つまり、この部隊では俺が一番魔力ランクが高いSS+という事になる。

それに、俺は5ランクダウンでB+になっているとなのはが言っているが、実際能力制限は掛かっていない。自力でコントロール出来るし、いざとなればB+とAの境目で暴れてやりゃあいい。伊達に森羅を操る者と呼ばれていないのさ。

その刹那、俺は空気が変わるのを感じた。

シュウ「……………来る！」

すると、部屋にある全てのモニターにミッド語でALERTの文字が現れ、警報が鳴り響く。

スバル「このアラートって……」

エリオ「一級警戒態勢!？」

スバルとエリオが声をあげる。恐らく、あれだ。レリック的な奴でも見つけたのだろう。

俺の予想通り、レリックを見つけたという。だが移動中と来るか…… 上等だ。

はやて「シュウ君、しつかり頼むよ」

シュウ「言われるまでも無いな。任せておけ」

はやてが皆に語りかけて来たので俺も応える。

はやて「それじゃ、機動六課、出動！」

-

リニアレールは一定の速度を保ちながら現在も走行中らしい。実際俺がサイコネシスで止めちまえば早いんだが、それでは呆気なさ過ぎる。

なのは「ヴァイス君、私も出撃^でするよ。シュウ君とフェイト隊長と三人で空を抑える」

シュウ（初っ端かい……ま、構わんさ）

俺は意識を集中しつつ立ち上がる。

ヘリのハッチが開き、中に強烈な風圧が入って来る。

なのは「じゃあ、ちょっと出撃で来るけど、皆も頑張ってズバツとやっつけちゃおう」

シュウ「そうそう、気楽にいきゃあいい。焦らずにしっかりと力を発揮するんだ。いいな」

フォワード陣「はい！」

なのは俺の言葉に四人は頷いて返事をする。

シュウ「……キャラ」

俺はなのはが行ったのを確認し、キャラの方を向いて声をかける。

シュウ「力は使う者がいるからこそ存在するんだ。道を踏み外さなければ、必ずやその力はお前の助けとなるはずだ。それを忘れるな」

キャラ「シュウさん……はい！」

俺はキャラに、同時に他の三人にも語りかける。キャラは向日葵の様な笑顔を見せ、俺は頷き、ヘリから飛び降りた。

俺のバリアジャケットは何処ぞの蒼炎の勇者の服装を身軽にしたものであり、メタナイト同様マントを翼に変形させて飛行する。

シュウ「銀河戦士団001（ダブルオーワン）、シュウ・ガーランド。行くぜ！」

俺は直ぐになのはに追い付き、並んで飛行する。

シュウ「ふふっ……再びお前と肩を並べて飛ぶことになるとはな」

なのは「うん……懐かしいよね……六年前以来だよね……」

俺がそう言つと、なのはは懐かしそうに呟く。

シュウ「よし、派手に暴れるぞ！なのは！」

なのは「うん！」

ヴァルセリオン「派手に行きましょう」

レイジングハート「勿論です」

嬉しそうに頷くなのは。相方同士も意気投合したようだし、行くぜえ！

-

シュウ「おーいるわいるわ。鉄屑のハエ共が飛んでいるな」

俺はヴァルセリオンを肩に担ぎ、飛行している機械兵器……ガジェット？型の群れに見てニヤリとしながら呟く。

しばらくしてフェイトが追い付き、役者は揃った。

なのは「じゃあ行くよ！シュウ君！フェイトちゃん！」

フェイト「了解！」

シュウ「あの鉄屑に！俺の腕を見せてやらあ！」

なのはの号令に、俺とフェイトはそれぞれ反応し、各個撃破を開始する。

なのはは多彩な砲撃で、フェイトは素早い斬撃で次々と破壊していく。

俺はヴァルセリオンを360度全包围に乱射し、次々と爆煙を作り出す。

シュウ「吹っ飛べよ！」

ヴァルセリオン「アクセルシューター」

ヴァルセリオンを横に振るうと多数の藍色の魔力弾が装甲を貫き、破壊する。

あの四人は無事に降下した筈だ。よし……後は一気に……

俺がそう考えていると、ロングアーチから通信が入る。

一体何があったん……何！？ガジェットの新機だ！？

シュウ「ちいっ！なのは！フェイト！後はお前等に任せる！」

なのは「わかった！」

フェイト「お願い！」

俺はソニックムーブでリニアールへと急ぐ。

シュウ「やらせるかってんだよ！」

-

くエリオSIDEく

僕の前に立ち塞がっているのは、今までに見たことがない大型のガ

ジェット。それはケーブルのような物を手のように動かして来る。

僕はそれを避け、ストラダを構えて切り掛かようとするけど、傷一つ付かない。

エリオ「か……堅っ」

僕が驚いていると、魔力刃が掻き消される。

エリオ「AMF……!？」

ガジェットのAMFはブーストを掛けようとしたキャロの所まで届いたようだ。

ガジェットに押されながら僕は必死で堪える。

もう駄目だ……

そう思った時、一筋の閃光がガジェットのケーブルの一つを切り裂いた。

僕は驚いて前を見ると、シュウさんがヴァルセリオンを構えて僕の前に立ち塞がっていた。

エリオ「シュウさん！」

シュウ「ふう……間に合ったな」

シュウさんはガジェットに目を向けたまま言う。

シュウ「行くぞエリオ！」

エリオ「はい！」

僕はシュウさんの言葉にしっかりと答えた。

〔シュウSIDE〕

俺は直ぐにリニアレールに追い付いた。エリオとキャロが新型らしきガジェットと交戦しているようだ。

エリオが飛び掛かるが、それはAMFで防がれる。キャロの足元にある魔法陣が消えた事から、AMFと判断したのだ。

シュウ「仕方がねえ……」

俺は天井に出来た巨大な穴に向かって真っ直ぐに飛び、ブレードフォームに変形させたヴァルセリオンでコードらしき物を両断した。

シュウ「ふう……間に合ったな」

エリオ「シュウさん！」

突然の俺の登場に、エリオは半分驚き、半分喜んでいる。

シュウ「行くぞエリオ！」

エリオ「はい！」

俺がそう言つと、エリオはそう言いながら構える。

俺とエリオは別方向から仕掛ける。俺が切り掛かると、レーザーを放って来る。俺がそのレーザーを切り払うと、その隙にエリオがコードでアッパークットを食らわされた。

シュウ「エリオ!!」

俺は天井に踊り出てエリオを見つける。

エリオはリニアールから突き放され、断崖に放り出された。

俺が救出しようと構えるが、キャラが俺より先に飛び降りる。

……よし、エリオはキャラに任せて、俺は……

ガジェットは俺をも掴みあげようとするが、身を躲かわしてコードを力一杯腕で潰してホールドし、動きに封じる。

奴は振り払おうとしたり、レーザーを撃つたりするが、余裕で耐える。

しばらくして、覚醒したフリードに乗った二人が現れ、エリオが切り掛かり、キャラがブーストをかけて刀身が巨大化する。

シュウ「行けええええ! エリオオオオオ!」

エリオ「ハアアアアアア!」

俺がそう叫ぶと、エリオが応えるように叫び、ガジェットに突き刺し、切り上げる。

叩き切られたガジェットは大爆発を起こした。

俺はコードを投げ捨てて二人に目をやってサムズアップをすると、二人も同じジェスチャーをした。

結局、レリックはスターズの二人が回収し、初任務は大成功に終わった。

俺はへりに戻ろうとすると、視線を感じた。

振り向くと、『奴』の後ろ姿が見えた。

11th PHASE First Mission(後書き)

闇「あのさあ、物凄く勝手何だけどな？俺、平行してもう一つ小説書こうかと思うのよ？」

スバル「確か、前から考えてた奴だよね？」

闇「そう、それ。時間軸はA・s篇とStrikerS篇の間、それで東方の小説をね。もう終章突入したけど」

えらいグダグダな感じですが、感想等ありましたら宜しくお願いします。

初任務を終え、俺達はそれぞれの反省を活かして訓練に勤しんでいる。

因みに俺は精神修行だ。剣の腕なんざ一回実戦しただけで直ぐに勘を取り戻す。自分で言うのも何だが、俺は基本何でもありだしな。

取り敢えず、午前中の訓練を終わらせた後、皆で昼食を取りながら話をしている。

まあ、エリオとスバルが食べるわ食べるわ。アイツといい勝負だわ、うん。

それにしても何故奴らが……奴らもレリックを狙っているというのか……？

俺がこんな事を考えていると、いつの間にか出身世界の話になっている。

スバルの先祖は日本人だったらしい。予想は出来たがな。一口にナカジマつつつても色々あるからな。

スバル「シュウの出身世界って何処なの？」

シュウ「俺の出身は第38管理外世界、C・E・（コズミックイラ）だ」

スバルが俺に振ってきたから腕組みしながら言うと、シャーリーが

口を開く。

シャーリー「確かC・E・って兵器型ロストロギアが多数存在していた世界って聞いた事があるけど？」

シュウ「ロストロギア？ああ、MSの事か」

全員「モビルスーツ？」

五人の反応に俺は軽く頷き、そのMSを使った戦争が起こった事、そして前に話した人型機動兵器がMSである事を話した。

シャーリー「それに、遺伝子操作の技術も発達していて、その人種を良しとしなかった人達が核攻撃を行って数十万人の人達が亡くなったんだよね……」

シャーリーが深刻な顔をして「血のバレンタイン」について語る。

というかエリオとキャロには刺激が強すぎやしないか？

俺はそんな事を心配しつつ前にあるナポリタンを口に運んだ。すっかり冷めていた。

-

午後の訓練が始まり、俺は古武術の型を確認している。最近アイツとやってないから鈍ってるんだよねあ……

なのは「シュウ君、フォワードの皆と模擬戦やってみない？」

シュウ「模擬戦か？別に構わんが」

なのはが突然こう言ったので俺は何の躊躇いもなく引き受ける。プロの戦いを直に感じるいい機会だからな。

なのは「じゃあ、次はシュウ君とフォワード四人で模擬戦やってみようか」

なのはが放った言葉に四人は驚愕を隠せない。

因みに、俺は四人全員を撃墜、四人は俺に一撃でも当てる事が出来れば勝ちというルール。殆ど変わらないが相手が相手だ。取り敢えず六割程度の力で行くとするか。

スバル「まさかシュウと模擬戦なんて……大丈夫かな？」

ティアナ「なに弱気になってんの！一撃でも当てられれば良いんだから気合いと根性で勝ちに行くわよ！」

流星はティアナだ。気が強い性格で他の三人の士気をあげている。だが、上には上がいるのだよ……

なのはの合図で四人は一斉に散って行った。

さて、誰から攻めて来るか……

シュウ「ヴァルセリオン、リリース」

ヴァルセリオン「イエス、ボス」

俺はヴァルセリオンを待機状態に戻し、腕を組む。

その刹那、俺はサイドステップでスバルの蹴りを交わすと同時に掌底の構えを取る。

スバル「っ！」

シュウ「円空破！」

俺は遠心力を懸けて放つ発勁。円空破をぶつけてスバルを吹き飛ばす。

次にコチラを狙っているティアナを発見し、気孔弾を放つ。

気孔弾はティアナに直撃するが、ティアナが消滅した。

シュウ（幻術か……）

俺はニヤリと笑い、バック宙をする。エリオが上空から切り掛かるのを察知したからだ。

エリオ（あの態勢から交わした！？）

シュウ「がら空きだ！」

俺が交わした事で動揺しているエリオの背中に蹴りを入れる。

続いてティアナが放った弾丸を素手で破壊する。

シュウ「見えた！そこだ！」

俺は咄嗟にヴァルセリオンを構えてアクセルシューターを放つ。

ドガンと派手な音がして俺は波動を使ってティアナの撃墜を確認する。

シュウ「……先ずは一人」

そう呟き、時速200kmの俊足でキャロに狙いを定める。

シュウ「アリーヴェデルチ」

キャロにしか聞こえないような声でそう呟き、デイバインバスターを放つ。

シュウ「……そして二人」

俺は表情を変えずに、ウィングロードを使って俺に迫るスバルを睨みつける。

スバル「ウオオオオオオオ！」

俺はスバルの右ストレートをプロテクションで防御する。更に反対方向からエリオが切り掛かる。

シュウ「計画通り……」

俺はどこぞの新世界の王のモノマネをすると、空いている手でスバルの左手を掴み、遠心力を使ってスバルと位置を入れ替える。

スバル「へ？」

エリオ「うわわわわわわ！」

二人は無常にも激突し、俺は「まあ、こんなもんか」と呟きつつヴアルセリオンを戻す。

模擬戦は俺の完全勝利に終わった。

-

スバル「あゝ、悔し〜！」

ティアナ「私達の動きを完全に読まれてた……」

エリオ「う〜ん……まさかあそこであんな動きをしてくるなんて……」

キャラ「やっぱりシュウさんは凄いです！」

フリード「きゅ〜！」

模擬戦を終え、四人はそれぞれの感想を漏らしている。なんか繋がっているように聞こえるんだが？

シュウ「ハハハッ……でもお前等も最初の時と比べて大分動きが良くなってきた。数十年前の俺なら冷や汗をかいてただろうな。ハッハッハッハッハッハ！」

俺はそんな四人をフォローする。

なのは「でもこんなのはまだまだ全力全開じゃないもんね？」

シュウ「まあな」

俺となのはのやり取りを聞いていた四人は驚愕する。

スバル「あれでまだ本気じゃない!？」

ティアナ「どんだけ化け物なのシュウ!？」

とにもかくにも、この日はフォワード四人にとって、貴重な時間になった。

13th PHASE 影 (前編) (前書き)

今回はギャグメインです
WWW
WWW
WWW

13th PHASE 影（前編）

シュウ「はあ！？出張任務！？」

はやての話を聞いた第一声がこれだった。

はやて「そうや、管理外世界にロストログアの反応があったんや。ソレがレリックの可能性もあるしな」

シュウ「成る程、分かった。じゃあ、ちゃっちやと仕事終わらせて準備しておくわ」

俺はそう言いながら部隊長室から立ち去った。

-

シュウ「よつと……ありや？まだなのは達は来てないのか？」

俺が空間転移でヘリポートに着くと、フォワード四人が先に来ていた。すると、

はやて「ああ、皆お揃いやね」

隊長二人とザフィーラを除く八神家の連中がヘリポートに入っていた。

スバル「あれ？八神部隊長に、ヴィータ副隊長？」

キャロ「シグナム副隊長に、シャマル先生も？」

シュウ「おいおいリンまでいるぞ？一体何処に行くんだこんな大勢で？」

スバルとキャラが驚き、俺が付け足す。

エリオ「まさか……この全員で出動ですか？」

はやて「うん。部隊はグリフィス君が指揮をとって、ザフィーラがしっかり留守を守ってる」

エリオが推測を語ると、はやてが同意する。

なのは「詳細不明とはいえ、ロストロギア相手だし、主要メンバーは全員出撃って事で」

フェイト「後は、行き先もちよつとね」

なのはが説明し、フェイトが意味深な発言をする。

シュウ「ま、まさか……行き先って……」

はやて「第98管理外世界、現地惑星名称地球」

フォワード「ええ！？」

シュウ「そーなのかー」

はやての発言にフォワード四人は驚き、俺はポケーツと呟いた。そーなのかー万能過ぎるwww

はやて「その星の小さな島国の小さな町、日本、海鳴市。ロストロギアはそこに出現したそうや」

懐かしいなあ……コイツらに会ったのもそこだったしなあ……

シュウ「なのはとはやてはその生まれで、俺も数ヶ月任務で滞在していた事がある」

シグナム「私達は六年程過ごしたな」

俺は頷きながら言うと、シグナムが懐かしむように続ける。

シュウ「ある程度の広域調査になるから、司令部も必要になる訳か……にしても……」

俺はある不安を抱きつつへりに乗り込んだ。

-

シュウ「てな訳で、地球に行くことになったんで宜しく」

俺はメタナイトにそう連絡した後、リインがエリオとキャロぐらいのサイズになっているのを見る。俺はこれぐらいじゃあ驚かない。

ヴィータ「向こうの世界には、リインサイズの人間もフワフワ浮いている人間もいねーからな」

シュウ「青ジャージ着てノリノリでブランコに揺られてる大の大人はいるがな」

ヴィータの言葉に苦笑いしながら言う俺。

ヴィータ「いるのか？そんな奴？」

シュウ「いるいる。しかも変な歌歌いながらだぞ？初見だと変人に見えないって」

シグナム「別の意味で見てみたいな、どれ程変人なのか」

妙な空気のまま俺達は現地入りした。

-

そして現地、何処かの湖畔のコテージみたいだな。リイン曰く、此処は現地の人が持っている別荘らしく、司令部として使ってもいいと言ってくれたそうだ。

シュウ（なのはの知り合いでお金持ちつつつたらアイツしかいねえ……）

そう目星をつけると一台の車が入って来た。

スバル「自動車？こっちの世界にもあるんだ？」

シュウ「当たり前えーだろーが！」

スバル「エンハンスド！」

スバルの呟きに俺は空手チョップでツッコむ。だが、何故エンハン

スド？お前ストライクノワール知ってたっけ？

なんてツツコミを展開していると金髪の勝ち気そうな女の子……アリサが降りて来てなのはとフェイトが反応する。

アリサ「なのは！フェイト！」

なのは「アリサちゃん！」

フェイト「アリサ！」

シュウ（やっぱりか）

俺の予想は的中し、腕を組んで三人のやり取りを見ている。

フェイト「紹介するね。私となのは、はやての友達で、幼なじみ」

アリサ「アリサ・バニングスです。宜しく」

五人「宜しく（頼む）お願いします！」

フェイトが俺達に向き直ってアリサを紹介する。勿論すかさず挨拶をする。

はやて達はすずかの所へ行ったらしい。猫が沢山いるってはやてが言ってたなあ……

そこで、今は任務の説明を受けている。

搜索地域は海鳴市全域、反応があったのは三カ所。まあ、移動して

いたとしても捕獲される運命なのだよ。

-

そして今はサーチャーやセンサーを設置が終わり、待機場所に向かう途中だ。

スバル「あゝ、早くご飯食べたいな」

シュウ「いやいや、実際何らかの邪魔が入るもんだぞ？」

スバルが待ちきれないといった様子で口を開き、俺はニヤリと笑いながら顔を伺うように言う。

なのは「考え過ぎだよシュウ君。そんな事早々ある訳……」

なのはがそう言った時、俺から見て右側から「ひえ」っと声が聞こえてきた。

四人（いたゝ！何か歌ってるゝ！ギターの位置低っ！）

俺達の目の前に聖徳太子、もといジャ―子―悪口を言う時こう呼ぶようにしている―が待ち構えていた。

太子「あつ、シュウ、久しぶりだな。待ってたぞ？弾き語りしながら」

シュウ「弾いてなかったぞ？」

突然の阿呆の登場にポカーンとしている三人に代わり、俺がツッコ

む。

太子「実は弾けないんだよ。今日始めたばかりで」

シュウ「それなのにそんな誇らしげにぶら下げてんの？」

太子が腰を振りながら言う、俺は頭を抱えながらツツコむ。

太子「ちつ、五月蠅いなあまつたく……ギターなんか辞めてやるよ！」

四人「もう辞めた〜！」

太子が舌打ちしながら言う。とギターを叩き割ると正氣に戻った三人も一緒にツッコむ。

ティアナ「シュウ誰？この馬鹿丸出しの人？」

太子「オアマー」

ティアナが俺に聞いて来ると太子がのけ反りながら漏らす。

シュウ「前に言っていたノリノリでブランコに揺られてる大の大人だよ」

スバル「確かにそんな感じ……」

太子「それで、一体何を探してるんだ？私の木の棒？」

シュウ「んな訳ねえーだろー！てめえ一人で探せえええええ！」

太子「キリマンジャロ！」

太子のボケに俺は回し蹴りで吹き飛ばす。

シュウ「ほつといて行こうぜ」

俺は冷静に言うと三人はポカーンとしながらも俺の後に着いて行っ
た。

-

そして、再びとある人物に鉢合わせた。

シュウ「ん？おお、龍麻！」

龍麻「シュウ！」

俺の二つ前の世界で知り合い、引き入れた少年と再開した。

シュウ「久しぶりだなあおい！腕は鈍ってねえか？」

龍麻「リインフォースさんと組み手やってるから心配無いよ」

なのは「シュウ君この人は？」

二人で盛り上がっていると、なのはが遠慮がちに言った。

シュウ「ああ、コイツは俺の友人にして戦友」

龍麻「緋勇龍麻と言います。宜しく」

龍麻が挨拶すると、三人も挨拶する。

龍麻「それで、今から何処に行くんだ？」

シュウ「ああ、なのはの実家、喫茶翠屋」

龍麻「ええ！？あの翠屋！？俺その店の常連なんだよ」

行き先を告げると龍麻が翠屋の常連客であつた事が発覚する。こいつが驚いた。特になのはが。

喫茶翠屋

なのは「お母さん！ただいま〜！」

なのは母「なのは〜！お帰り〜！」

ティアナ「お母さん若っ！」

スバル「ホントだ……」

シュウ「これ姉妹でも通るんじゃないか？」

二人「同感」

ティアナが念話で話し掛けて来て、俺が率直な感想を述べると、二人で揃って同意した。

なのは父「おつ！ああ、なのは！帰ってきたな！」

なのは姉「お帰り、なのは！」

なのは「お父さん！お姉ちゃん！」

あら～お父さんも結構なイケメンじゃないっすか！？って、俺が興奮してどうするんだ？すると、奥からもう一人来た。恐らく兄貴だろう。

なのはが両親と兄と姉を紹介している。母、桃子さん。父、士郎さん。兄、恭也。姉、美由希という名前だそうだ。

なのは「この子達は私の生徒なの」

スバル「スバル・ナカジマです」

ティアナ「ティアナ・ランスターです」

なのは「それと、こっちは前に話してた同僚で友達の……」

シュウ「シュウ・ガールランドです。お見知り置きを」

なのはが二人を紹介し、俺に振ってきたので俺は左足を半歩引き、右手を腹の所まで動かしながら会釈すると、「ご、ご丁寧に……」と面食らっていた。

ティアナ「アンタもあんな挨拶するのね？」

シュウ「当たり前だ。俺はこれでも隊長だ。礼儀は心得である。普

段表に出さないだけだ」

ティアナがからかうように念話を送って来ると、至極当然といった様子で反論してやった。

なのはの母親がゆっくりしていつてくれと言っていたので、お言葉に甘えるでしょう……とした時、恭也に呼び止められた。

「なのはSIDE」

何でこんな事に？

今シュウ君とお兄ちゃんが睨みあっている。もう結果は分かりきっているけどね……

お兄ちゃんは竹刀を両手に一つずつ、シュウ君はお芝居で使う作り物の刀でも、鉄で出来てるから当たるとかなり痛いらしい。お父さん達は興味深そうに見ている。

恭也「行くぞ、この女たらし！」

お兄ちゃんがそう言いながら切り掛かると、シュウ君から「ブチッ」って何かが切れたような音がしたかと思うと、刀を掲げる。

すると晴れているのに雷が落ちて来てシュウ君に当たる——うっん。宿るの方が正しいかな？」。

シュウ君は左足、右足の順にお兄ちゃんに蹴りを入れ、左手でブローを叩き込む。

恭也「ぐっ！がっ！ぐはっ！」

シュウ「誰が女たらしだ……くたばれ！」

そつ吐き捨てて半円型に切り付ける。

恭也「バック・トウ・ザ・フューチャ〜！」

お兄ちゃんは訳分かんない断末魔をあげながら倒れる。なんか効果音が着きそうだった。「BASARAK・O・！」とか？

シュウ「つまらねえ幕引きだなあ。まっ、てめえにはお似合いだ」

シュウ君は刀をしまいながら吐き捨てる。明らかに格闘ゲームの勝利台詞に聞こえるんだけど……

スバル「やっぱりね……」

ティアナ「うんうん。流石宇宙最強と呼ばれるだけはあるわ」

五人「……ええエエエエ！？」

ティアナが頷きながら言った言葉にお父さん達が驚愕する。それはそうだよな……お兄ちゃんを瞬殺した相手が宇宙最強だもん……

だけど……

なのは「お兄ちゃん……シュウ君が女たらしってどういこと？」

お兄ちゃん……ちょっとOHANASHIしよつか？

「シュウSIDE」

恭也を完膚なきまで叩き潰した後、なのはに異変が起こった事に気づく。

なのは「お兄ちゃん……シュウ君が女たらしってどういうこと？」

顔は笑顔だが彼女の周りの空気が明らかに違う。スバルとティアナがくつついてビクビクしてるしwww

此処で騒ぎを起こす訳にはいかないので俺はなのはを説得する。

シュウ「なのは？別に俺はもうスッキリしてっから問題無いぞ？」

なのは「私はお兄ちゃんと話があるの。シュウ君はただ誰にでも優しいだけだっけ」

俺はなのはの放つ殺気にも怯まずに止めを刺す。

シュウ「大体、こんなところで騒ぎ起こしてみろ。後々めんどくさい事になるわ」

なのは「そ、それもそうか……」

なのは以外（シュウ「君」、……GJ!）

そう呟き、殺気を消すとなのは以外の全員がサムズアップをしてきた。このくらいは当然だ。

その後、フェイト達が到着し、俺達はコテージまで戻った。

13th PHASE 影 (前編) (後書き)

ティアナ「あのさあ、今回出て来た緋勇って誰？」

闇「それは何をかくそう東京魔人學園剣風帖の主人公ですね。容姿はアニメ版の奴ですけど。アニメで苺好きの設定だったから翠屋の常連にしようと踏んだ訳だ」

ティアナ「把握」

闇「後編もギャグ日キャラがちょろつと登場するので楽しみに！」

14th PHASE 影 (後編) (前書き)

今回は神話の生物が出て来ます。剣風帖をプレイした人なら分かるかも(^w^)

14th PHASE 影（後編）

俺達が戻ると、皆でバーベキューの準備をしていた。妹子やばっしよさん、曾良の姿もあった。

アリサ曰く、彼等から安い店を教えて貰ったらしく、それに同行したという。キャラが濃いからなあゝアイツ等。いつの間にか顔が広くなってるし……いい事だけだ。

さりげに調理師免許を持つてる俺も材料切ったりして手伝う。俺の包丁捌きに周りから声があがる。くっくくく……俺の美技に酔いしれるがいい……ってか？

そして準備が終わってそれぞれの自己紹介が始まる。美由紀の話で一気にしんみりした感じになる。

シュウ「俺は銀河戦士団零番隊リーダー、ツツコミ担当のシュウ・ガールランド少佐だ。訳あって機動六課に助力している。数十もの世界を渡り歩いて身につけた技能と勘、そして俺の血を活かし、尽くしていくつもりだ」

俺が地位に相応しい言葉を並べて自己紹介する。ツツコミ担当も忘れない。

そして次の奴。俺は構えを取る。

太子「どうもー！私はシュウの知り合いのグレートな聖徳太子……」

シュウ「何処がグレートじゃあアアアアアア！テメーのグレート

な所は馬鹿さ加減だけだろオオオオオオ！」

太子「エルシャダイ！」

俺は飛び蹴りを顎に喰らわせ、同時に妹子が後頭部をどつく。

まあこんな騒ぎがあつたが、皆でおしゃべりしながら楽しんでいる。リインはユリア——こっちにいる時、リインフォースはこう名乗る事にした——とじゃれあっている。初めての対面だからなあ。実際リインもユリアに会うの楽しみにしてたしな。

ちなみに、俺は美由紀、フェイト、スターズの面々と相席をしている。

美由紀「家のなのは、一人で抱え込む癖があるから、宜しくね？」

シュウ「なに、ちよいと危なっかしいところもあるが、俺が……いや、俺達がしっかりサポートするんで、泥舟、いや大舟、いやタイタニツクに乗ったつもりでいてくれ」

美由紀が苦笑いしながら言うと、俺はガハハと笑いながらボケた。

ヴィータ「タイタニツク沈んだじゃねーか」

シュウ「ヴィータ、ナイスツツコミ」

ヴィータが笑いながらツツコミんで来て、俺は両手の人差し指をヴィータに向けて言った後、皆で大笑いする。後ろから凄じ殺気がするんだけど何故だ？

なのは「私ってそんなに危なっかしいかな？」

シュウ「いつも一人で無茶してんじゃねえか。いつぶっ倒れるかハラハラしてんだからな俺？お前はもつと人を頼れ。な？」

なのは「……うん」

そう言うとなのはは分かっているといった様子で頷いた。ホントに分かってんのか？

美由紀「なのはも罪ねえ、こんないい男^{ヒト}彼氏にしちゃって」

スバル ティアナ「ええ！？」

なのは「／／／！！」

ヴィータ「かゝ、やっぱしな」

シュウ「ブハッ！ゲホッ、ゲホッ！」

美由紀の唐突な言葉に二人は驚き、ヴィータはニヤニヤしながら、なのはは顔を真っ赤にして、俺はコーヒーを飲んでいたので噎せる。うお！殺気が強くなった！

なのは「ち……違うよお姉ちゃん！私はシュウ君とは……まだそんな関係じゃ……／／／／」

シュウ「ゲホッ、ゲホッ！コーヒーが気管に入った！あつつい！」

なのはは慌てて否定するが、まさかの自爆をしつつフェードアウト

していく。当の俺は熱さに悶絶している。余計殺気が強くなった。

フェイト「なのは……私も負けないから」

フェイトが笑顔で言うが目が笑ってない。つーか一番強く感じた殺気ってフェイトの物だったのか。

スバル「やっぱりなのはさんシュウの事好きだったんだ？それにしてもあの反応……」

ティアナ「完全にはれてるわね」

二人が若干ニヤニヤしている。張っ倒してやるうか？

太子「おゝいシュウ！久しぶりにアレをやるう！アレ！」

すると太子がギター片手に手を思いつ切り振りながら言うてる。おいおい、何を始めるつもりだ？

シュウ「何のまねだ？」

太子「いや妹子がさあ、久しぶりに……をやるうって言い出してさ」

シュウ「ああ成る程ね。アイツの考えそうな事だな」

そんな訳で準備をしておく。それにしても大丈夫なのだろうか？

俺達はT・M・Revolutionのメドレーを演奏し始めた。

魔弾↓resonance↓crosswise↓INVOKE↓

W a s t e l a n d L o s t N a k e d a r m s v e s t
i g e ｝ ヴェステイジ ｝ の順である。

皆異様に盛り上がっていた。なんか催し事みたいになっちまったな
w w w w

｝ はやて S I D E ｝

自己紹介が終わった後、シュウ君はなのはちゃん達と一緒に楽しそ
うに話をしてる。あゝ妬ましいわ……

私とシグナムは料理に殆ど手をつけずになのはちゃん達を睨みつけ
てる。シグナムもシュウ君に気がある事にこの時始めて気が付いた。

^{ライブル}
恋敵は三人か……アカン、完全に出遅れてる！

ふと、リインフォース——「こっちではユリアを名乗っているって聞
いた——も若干睨んでる。って、まさかの四人！？

なのはちゃんのお姉さんが何か言ったのかシュウ君が急に噎せはじ
めた。そりゃあそうやって……だってコーヒー飲んでる最中やった
もん……

シグナム「主はやて……いずれ決着をつけなければなりませんね？」

はやて「手加減せえへんからな？シグナム？」

私達はそう言った後、何処ぞの悪者の様に笑いながら殺気を強めた。

そうしたらいきなりシュウ君が席を立ち、急にライブが始まった。
それにしても曲は全部 T・M・ばっか……。どんだけ好きなん T・M・

？

そんな考えを余所に、盛り上がった。

-

（シュウスIDE）

皆でバーベキューを楽しんだ後、俺達はスーパー銭湯へ向かった。スーパーって言うてんだから数種類の温泉があるんだろうな？

キャラがエリオに何か話し掛けているが、エリオは複雑な顔をしている。

事情を聞くと11歳までの男子は女湯でもOKと言う。それで拒んでいるのだ。

シュウ「ええ、っーことは俺だけになるじゃねえかよ。女多数に男二人だろ？すっげー肩身が狭いじゃんか？たまには男二人つても必要だと思っただが？」

俺は尤もな理由をつけてフォローする。

だが、女性陣は別に構わないと言ってる。こてんぱんにしたるか？コイツ等？

シュウ「ちっ、かくなる上は……強行突破だ！」

エリオ「はい！シュウさん！」

男二人は数秒の念話をした後、エリオの言葉を最後に背を向けた。

エリオ「いや！ホントにいいんで！皆さんは皆さんで楽しんで下さい！」

後ろから女性陣の声が聞こえるがスルーしてまっしぐらに退散した。

-

シュウ「しかし、災難だったな、エリオ」

エリオ「すみませんでした。助けて貰っちゃって」

着替え中、俺が苦笑いしながら言うと、エリオが心底ホッとしたように呟き、急にハッとした顔になる。

シュウ「どうした？」

エリオ「シュウさん……そ、その傷……」

ああ、右肩から胸にかけて伸びてる傷の事か。

シュウ「これか？この傷は俺の……」

言いかけたその時、引き戸が開いてキャロが入って来た。エリオが目茶苦茶動揺している。

どんだけませてんだエリオの奴？

気を取り直して体を流した後湯舟に浸かった。

「キャロ「わぁー、スゴイ……空が見られるんだねえ、此処のお風呂」

エリオ「そ、そうだね……」

キャロが上を見ながら言うと、エリオが照れ臭そうに言う。エリオの反応マジで可笑しいwww

エリオ「ってシュウさん！？傷、大丈夫なんですか！？」

キャロ「？」

エリオが俺の方を見て口調を強めながら心配していると、キャロが首を傾げて頭にハテナを浮かべている。ロリ好きにはどストライクだな、こりゃ。

シュウ「Ha！湯に浸かるぐらいじゃ俺は動じないって！」

俺は二人と視線を合わせる。

シュウ「あの傷はな、俺の仇敵につけられたモノだ。かなり深くまで入り込んでな、数十年経った今でも残ってる。しかも、そこが弱点になったからあの馬鹿共がガンガン傷に攻撃して来やがって、最終的に千を越える傷の集合体になっちまった……まっ、今となれば、ただの思い出話だな」

俺の話が終わると、今度はリニアールでの話になっている。

俺はもろに聞き流すが、「どっちもどっちだな」と、一言だけ呟いた。

すると、フェイトとアルフが顔を覗かせて来た。

フェイトが髪を洗ってあげようと誘っているが、エリオは口から下を湯舟に沈めてブクブク泡をたててる。

シュウ「行つてやれエリオ。自分は男だからって考えるのはもうちつと早い。だからたまには聞いてやんな？」

エリオ「え？その……はい……」

エリオが顔を赤くしながら頷いた。そして、フェイトも顔を赤くしていた。さっき視線が合ったからだ。

にしてもフェイトも十年でかなり変わったな。あん時は俺がしゃがんで喋らなきゃならんかったし、かなり大人びた。ラ。なら完全に惚れてただろう。

フェイト「シュウ……あんまりジロジロ見ないで……恥ずかしいよ……」

フェイトが更に顔を赤くしてモジモジする。コイツ俺を悩殺するつもりか？そろそろヤバイぞ？

シュウ「いや、あん時と比べて変わったな。って」

俺はそんな想いを微塵も見せずに正直に話す。

フェイト「うん……でも、貴方が好きだって気持ちも、あの時よりも、強くなってるから……」

フェイトはそう言い残し、三人を連れて出て行った。

……あれ？さっきアイツなんて言った？遠回しで好きだったよな！？

シュウ「……………マジ？」

俺は上の空に呟いた。

-

銭湯からあがった後、ロストロギアの反応があったのだが、そのロストロギアは大量のスライムだった。何処のRPG！？

本体を見つけて捕獲してしまえば偽物も消えるらしい。相手に物理攻撃は殆ど効かない……ならば！

シュウ「どけ！俺に任せろ！」

俺はそう怒鳴って右手を構えると掌が青く輝き出す。

シュウ「皆まとめて凍っちまいな！」

そう言つと強力な冷気がスライムに襲い掛かり、一体残らず凍らせた。

シュウ「これが、森羅万象を司る者の技よ……」

スバル「す、凄っ……」

ティアナ「……………」

スバルが漏らすとティアナが何やら不満そうな顔をしているが気にしないでおいた。

そして、ロストログアはキャロが練習を兼ねて封印し、成功したかに見えた。

だが……しかし、何処からかカエルの様な顔をし、目が飛びだし、鱗に被われ、水かきが生えた人型の異形の生物が姿を現した。クトウルフ神話の深きものどもである。数は二百。

スバル「ちよつと何これ!？」

シュウ「先に行け!俺はコイツ等を片付けてから行く!」

俺はそう言いつつドラゴアーツを構えて挑発する。

シュウ「かかって来いやアアアアアア!」

くフェイトSIDEく

私達は四人の話を聞いて動揺した。

突然現れた生物に襲われて、今シュウが応戦しているらしい。

シュウなら大丈夫だ。という想いの裏に、シュウは無事なのだろうか。という想いが二重になっていて、自分でもどうしたらいいのか

分からなくなってしまうている。

はやて「あっ、シユウ君からや。えっと……ハア!？」

はやてがシユウからの情報を受けとったみたいだけど、いきなり凄
い声を出す。

はやて「皆、落ち着いてきいてな? あれって……神話の生物やって
……」

シグナム「し……神話の!？」

ヴィータ「そんなのがなんだって此処にいるんだよ!？」

その内容に驚愕する三人。正直、私もそう。なんで? どうやって神
話の生き物が?

はやて「よく分からんけど、内容によると物理的に殺すしか無いっ
てあるし、しかも中には元々人だったのもいるって……」

フェイト「そんな目茶苦茶な!」

更に元々は普通の人だったのを聞いて余計動揺する。

はやて「だから、一般人を襲う可能性があるから、俺が全滅させる
……」

そうだよな。元々人だったなんて聞いたら私達は戦いにくいし、で
も、戦わなかったら被害が出る。なら——ちよつと言い方が変だけ
ど——戦争慣れしているシユウなら全力で戦える。

私達は仕方なくシュウが戻るのを待つことにした。

「シュウSIDE」

俺ははやてに数年前にメタナイトに送った深きものの資料をそのまま転送した後、俺はばったばったと一刀両断していく。

ある者は体を真つ二つに、ある者は両手両足をバラバラにされ、またある者は顔だけを真つ二つにされたりしている。

全滅させた時には俺の体は奴らの体液まみれになっていた。こりゃあ、洗い流さなきゃ駄目だな。コイツ等は魚に近い生物だから、めっちゃ生臭い。

俺はウォーターで体液を流すと、アイツ等を待たせているので時速200kmで走った。

その後物凄く心配され、物凄く怒鳴られた。

なのは「もう！シュウ君は身勝手過ぎるよ！」

フェイト「いつも他の人の事ばかり考えて！私達もシュウが心配なんだよ？」

シュウ「うるっさいなー、子供じゃあるまいしー」

二人「そういう問題じゃない！！」

シュウ「おー、怖っ」

なのはとフェイトにギャンギャン言われてもスルーする俺って、別の意味で猛者だよな？つーかはやても何か言いたそうじゃねえか？

シュウ「なんだよはやて？お前も文句言いたいn……」

そう言いかけた時、いきなり抱き着いて来た。オイイイイイイイイ！場を考えようよ！場を！

はやて「私はそんなん別に気にせんよ？無事ならそれでええ」

物凄くカッコイイ事を言っているが、俺は見てしまった。はやてがなのはとフェイトの方を見てニヤリと笑ったのを。

海鳴での戦いは終わったが、こっちの戦いはまだまだ続きそうだ。

14th PHASE 影 (後編) (後書き)

闇「めっちゃ長くなってしまった」……普通の回は三千字程度でまとめつつもりだったのに……」

セーレ「しゃーないって。クトゥルフ神話の生物の初出は此处ぐらいにしか出来なかったからな」

闇「さて、三、四話進んだ所で外伝を考えていますので宜しく願います」

15th PHASE ホテル・アグスタ（前書き）

今回はマクロスの兵器が出て来ますが、主人公のキーワードが出る
ちよつと重要な回になっています。

15th PHASE ホテル・アグスタ

出張任務から数日後、今は任務の為にヘリで移動している。

向かっているのはホテル・アグスタ。此処で古代美術品のオークションが行われる事になっており、その中にある取引許可のあるロストロギアをレリックと誤認して現れるガジェットの撃退等の警備が目的だ。

因みに、今回の事件の黒幕であるジェイル・スカリエッティ。奴がヴラトブルクと手を組んでいると言うのか？

そんな考えを断ち切り、話に耳を傾ける。なのは、はやて、フェイトは内部、他のメンバーは外部の警備だ。

キャロ「あのシャマル先生、さっきから気になってたんですけどその箱って？」

キャロが学校の授業で質問する時の如く手を挙げて聞く。

シャマル「ああ、これ。隊長さんのお仕事着」

ふーん……じゃあ何で四つ？

シュウ「で、後一つは俺の物な訳ね」

俺は苦笑いしながら漏らす。

シュウ「うーん……俺的にはフォワードの連中に着いていたんだ

が……まっ、分身すれば済む事か」

そして再び漏らす。

-

シュウ「ソッチの方はどうだ分身？」

分身「今の所異常は無い。ソチラも心配は無さそうだな」

シュウ「だな。じゃ、引き続き警備宜しくな」

分身「アイ・サー」

俺は分身と念話を交わした後、ヴァルセリオンを肩に担いで呟く。

シュウ「防衛戦は……ちょっと苦手だがなあ……」

因みに、俺はホテルの上空で待機している。

すると、今回の任務の指揮官を勤めるシャマルがガジェット？型と？型の接近を知らせ、シグナムとヴィータが出撃する。まあ、ザフィーラもいるから大方大丈夫だな。うん。

なんて考えていると、俺の前を何かが物凄いスピードで横切っていくのを感じた。

シュウ「おっとっと……何か通った……ってまた来た！」

その何かは明らかに俺を狙っている。上等だ。

俺はソレを咄嗟のバック宙で交わす。

シュウ「何じゃありゃあ？」

ヴァルセリオン「解析しましょうか？」

シュウ「頼む」

シャル「どうしたの？ 凄い音がしたけど？」

シャルが確認するように念話をかけてくる。成る程……シャルの所にも届いたって事は音速か……

シュウ「ああ、恐らく音速飛行が出来る質量兵器と見て間違いは無いな。にしても……よりによってゴーストX-9かよ……ざけんな」

俺はヴァルセリオンが特定させた機体の映像を見て毒づく。

シュウ「コイツは是が非でも破壊せにやならん。俺が壊^やる」

俺はそれだけ言い残し、ゴーストを破壊しに向かった。

くティアナSIDEく

オークション開催まであと数時間。私達は会場の外側に待機していた。

スバル「それにしても、シュウって一体どんな世界を巡ってきたんだろうね？」

ティアナ「そうね……あの人がかなり有名だから色々話を聞くけど、
実際本当がどうか信じ難いわよね」

スバル「アハハハッ……」

スバルが暇潰しにつて念話をしてくて、それに付き合っているとシ
ュウの話になる。

スバル「それに、なのはさん達に会ったのも十年前だつて言つて
るのに、シュウは外見が全くと云つていい程変わつてないみたいだし」

ティアナ「次元世界だけじゃなくて平行世界にも行けるんだから、
時間を遡つたりするのもお手の物なんですよ？」

スバル「そうかもね。前にセーレが、リーダーは時間を止める事が
出来るんだぜ！つて自慢してたし」

こんなやり取りをした後、爆音が響いた。

ティアナ「っ！スバル！今の何！？」

スバル「ええっ！？何つて言われても、爆発なんか起きてないし……
」

ティアナ「じゃあ、今の爆音は何なの？」

私達がアワアワしているとシャル先生から連絡が入る。

さっきの爆音はシュウ曰く、音速で飛ぶ事が出来る戦闘機が出した
音で、シュウが迎撃に向かったという。

私はソレを聞いてつくづくシュウは化け物だと思った。

-

「シュウスIDE」

ゴーストX-9は相変わらず凄まじいスピードで進んでいるが若干動きがカクカクしている。遠隔操作している奴はゴーストの速さについて来れていないようだ。ならば……

シュウ「旋回する瞬間を狙って撃ち込む！」

X-9は俺に気づいてレーザーを発射しつつ残像に生み出しながら離れていく。

だが、その隙を見逃す筈が無く、俺は左手首に装着させているアンカーを射出して動きを止め、そして後方のノズルに殺傷設定の魔力弾を撃ち込み、更に腕をクロスさせて水平に構えて吠える。

シュウ「閃光のサザンクロスの印、受け取れ！」

俺は奴の胴体に四ヶ所魔力弾を撃ち込み十字架を形作った後、こう呟く。

シュウ「ソイツはお前の墓標代わりだ……」

その刹那X-9は爆散した。

そして、俺が防衛ラインまで戻った後、俺の目にはある光景が写っていた。

ティアナが放った魔力弾が逸れてスバルに当たろうとしている。

シュウ「チイツ！」

俺は咄嗟にサイコネシスで弾の軌道を上に逸らし、ガジェットにぶち当てる。

シュウ「あぶねえあぶねえ。間一髪だったなあ、オイ」

ヴィータ「ティアナ！この馬鹿！無茶やったうえ味方撃ってどうすんだー！！」

カツカツカツと笑う俺に対して怒鳴るヴィータ。つかむきになつて意味が分からん。

シュウ「まあまあまあ、そんな熱くなりなさんな」

ヴィータ「うつせえ！コイツが何やったつか……」シュウ「っ！退け！」

俺がノンビリとヴィータを宥めるがギャンギャン犬みたいに喚くヴィータを何者かが背後から狙っている事に気づきヴィータを左に押しやり、二枚のカードを構える。

シュウ「スペルカード！炎符『バーニングアソード』！『バーニングカソード』！」

俺がそう宣言すると、紅と蒼の炎が一点に集中して放たれ、そこが爆発する。

シュウ「全く……此処は戦場だ。喚く暇があったら周りを見るタコ助」

ヴィータ「す……すまねえ」

シュウ「気にすんな。さくで、次行くぞ次！」

ヴィータ「……ちっ、アイツに何か言われると調子狂うな……」

俺はヴィータの呟きを聞かなかった事にして軽く笑いながらヴァルセリオンを構え直した。

結局、ブツは敵に持ち出されてしまったようだが、まだオークションは始まって無かったので結論的には半々だった。

ティアナはスバルと一緒にみたいだが、俺は何か一騒動起きそうで心配だった。

15th PHASE ホテル・アグスタ（後書き）

闇「モンハン3やり過ぎて更新止まってもうた」

シュウ「やっちゃったな……」

闇「やっちゃったよ……まあ、やりながら外伝のストーリー考え
てたからいいけど……」

シュウ「あつ、そうだった！次は外伝って言ってたよな！」

A n o t h e r P H A S E - 1 紋章の王子（前書き）

アクセス数10000突破、ありがとうございます！

今回、新たな新キャラが？

Another PHASE - 1 紋章の王子

（?SIDE）

僕は逃走している犯罪者達と、ソレを追う女の子を見つめている。
流石にあの数じゃ一人はちょっと無理があると思うな……

そう考えた僕はユックリと立ち上がり、犯罪者達の前に降り立つ。

犯罪者1「つと、何だ兄ちゃん！俺らは忙しいんだ！ソコをどいてくれ」

?「悪いね。どく気はさらさら無いよ」

犯罪者の一人が唆すけどやんわりと否定する。

犯罪者2「てめえ！そんなヒョロヒョロの体で俺達全員に……ウゴッ！」

犯罪者が言い終わる前に僕はファルシオンの柄で殴りつける。

?「もう逃げ場は無いよ。彼女が来たからね」

いくらこの人数でも腕のたつ二人相手に勝てる筈が無く、犯罪者は呆気なく御用となった。

女の子「あの、ありがとうございました」

?「気にする事はないよ。僕が好きでやったただけだから」

女の子が頭を下げてお礼を言うと僕は軽く笑った後、誤解されるといけないんで名刺を差出ながら名乗った。

マルス「僕は銀河戦士団一番隊隊長、マルス・ローウェル」

-

女の子ーギンガ・ナカジマという名前らしいーは父親にして自分が所属している部隊の隊長をしているゲンヤさんに僕を紹介した。

ゲンヤ「それにしても、お前みたいな優男が犯罪者をねえ……」

マルス「甘く見ないで下さい。僕はこれでも一国の王子だったんですから」

ギンガ「ええええ！？」

なんでそんなに驚くんだろう？ 服装で大体想像がつくよね？

ゲンヤ「銀河戦士団……って事はスバルントコに行っている奴と同じチームって事か？」

マルス「シュウの事ですね。彼と僕は親友なんです。戦う理由が似ているし、何より人がいいんで」

実は僕の国、アリティアは既に滅んでいる。どうしようか途方に暮れている時に仲間達と共にシュウに拾われ、共に戦うと決めた。その後すっかり意気投合してそのまま親友関係になった。

マルス「そうだ！ コツチに来た時に連絡してくれって言ってたっけ

……」

その事を思い出しながら通信回線を開いた。

「シュウSIDE」

アイツから連絡が来たのは午前の訓練が終わった後だった。

なのは「じゃあ、午前はこれくらいにしようか」

フォワード「ありがとうございます！」

あれから四人の動きも中々様になってきた。見てるだけでも分かる。

シュウ「ん？通信？誰だろ？」

マルス「シュウ、久しぶり！」

シュウ「マルス！マルスじゃんか！久しぶりだなあ、オイ！三年振りだよな？」

マルス「元気そうでよかった。二、三日前に着いたんで挨拶するのを思い出したからさ」

シュウ「なにも今じゃなくてもいいじゃんか？」

マルス「ほら、よく何事も早くやった方が良いつてシュウ言ってたろ？」

シュウ「確かにそう言ったけどさあ……」

俺は久しぶりの再会が嬉しくてついつい会話が弾む。

シュウ「じゃ、俺らはこれから昼飯だから、後でゆっくり話をしよう」

マルス「分かった。じゃあ、また後で」

俺達はそうやり取りした後、回線を切った。

ヴィータ「シュウ誰だ？今のナルシスト？」

シュウ「アイツはマルス。俺の親友だ。だから次ソレ言ったら体バラバラに引き裂いてやるからな？」

全員「すいまっせーん！！」

ヴィータが軽く吐き捨てながら言う俺は名前を教えた後、笑いながら付け加えたらヴィータのみならず、全員が土下座した。因みに本気だ。

その後、皆の反応が面白かった。

なのは「フェイトちゃん……」

フェイト「なのは……」

スバル「ティア……」

ティアナ「いや……来ないで……私を殺さないで……」

なのはとフェイト、スバルとティアナはそれぞれ抱き合って、ガタ震えている。

エリオ「……………」

キャラ「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ……」

エリオは恐怖の余り失神しており、キャラは泣きながら許しを請う。

ヴィータ「……………」

ヴィータはエリオ同様失神しているが泡を吹いている。

そして、どうしようも無いのが一人……

シグナム「悪霊退散！悪霊退散！悪霊退散！悪霊退散！悪霊退散！悪霊退散！悪霊退散！」

俯せに倒れて連呼しているシグナム。完全にぶっ壊れている。

俺は取り合えず蹴りで全員を正気に戻した。

「ギンガSIDE」

マルスさんはシュウって人と親しそうに話をしている。どうやらホントに親友みたい。

シュウ「じゃ、俺らはこれから昼飯だから、また後でゆっくり話をしよう」

マルス「分かった。じゃあ、また後で。……ふう、変わって無いなあ……ギンガもシユウに会ってみなよ？その日の内に打ち解ける筈だからさ」

マルスさんは回線を切ってぽつりと呟いた後、私の方を向いてこう言った。言われなくても、一回会ってみたいなあって思ってるけどどんな人なんだろう？今度スバルに聞いてみようかな？

マルス「さて、コツチに来たからには助力しないとね……僕は魔力ゼロだけど、剣術には自信がある。大丈夫ですよね？」

ゲンヤ「仕方ねえか。地上はただでさえ戦力が足りねえんだ。お前さんの様な奴がついてくれるのは助かる」

マルス「では、このマルス・ローウェル。貴公らの為、この剣を振るいましょう。命にかえても」

こうして、マルスさんは私の後輩になった。

-

AM2:00

とある街道

男「ハア……ハア……ハア……何なんだアイツ……冗談じゃねえぞ、あんなのに殺されるなんざ……っ！」

青年「……死ね」

男「ギヤアアアアアアアアアアアアアアア！！」

Another PHASE - 1 紋章の王子（後書き）

闇「イヤ、初めて番外編書いたけどめちゃくちゃ本編に関係ある……」

はやて「ところで、マルスの名前ってOVAの設定から取ったんやろ？」

闇「うん。自分もローウエルの姓でちよつとビックリしたもん。テイルズのアイツと同じ姓かよ！？みたいな？」

はやて「それと、最後のシーンってアレ……」

闇「それではまた次回！」

はやて「ってコラー！無視するなー！」

16th PHASE 願い、ふたりで（前書き）

目醒めよー

16th PHASE 願い、ふたりで

今日は午後の訓練は休みな様なので俺はとりあえず銀河戦士団アッチの仕事を終わらせる事にする。

ティアナ「スバル、私、今から一人で練習してくるから」

突然ティアナが立ち止まってこう言った。

スバル「自主練？私も付き合っよ」

エリオ「じゃあ僕も！」

キャロ「私も！」

シュウ「しゃーねえ、俺も手伝っぜ」

ティアナ「アンタ達はゆっくりしてなさい。それにスバルも。私一人でやりたいから」

俺を含む四人がそう言うが、ティアナはやっぱりと言った。

スバル「うん……」

スバルが落ち込んだように漏らすと、ティアナは再び歩き始めた。

-

くティアナSIDEく

私は一人黙々と練習している。

どんな裏技を使ったのかは知らないけれど、この機動六課は化け物じみた戦力を持っている。

隊長は全員オーバース、副隊長もニアSランク。他の隊員達も未来のエリート達ばかり。しかも、裏に銀河戦士団も着いている。

フェイトさんの秘蔵っ子であの歳でBランクを取っているエリオとレアな竜召喚士のキャロ、危なっかしくても潜在能力と可能性のかたまりで優しい家族のバックアップもあるスバル。そして何より、大戦で英雄と呼ばれているシュウとその傍らにいるセーレ……凡人は私だけしかない。だから人一倍に努力するしかない。

？「何だよこんな時間に？」

急に何処からか声が聞こえて、私は手を止める。

シュウ「いや、チラッと見たただけだ」

声の主はシュウだと分かった。でも誰と話をしているのかしら？

シュウ「コッチは、そうだな……どこぞの大名の言葉を借りれば、良い駒が揃い踏みだ。エース・オブ・エース、雷光、夜天の主とその守護騎士、そして可能性に満ちたフォワード。更に俺達が手を組めば、『奴ら』の殲滅も時間の問題よ」

シュウは携帯電話で恐らく上司と思われる人物と話していた。それにしても、『奴ら』って？

シュウ「そして、ミッドに潜伏する『奴ら』の殲滅」

『奴ら』がミッド（この街）に？じゃあ、その『奴ら』とも戦う事になるかも……？

シュウ「汝に武運を」

そう告げて電話を切った後、威圧的な口調で付け足す。

「立ち聞きとは……随分と趣味が悪いな。ティアナ」

（シュウSIDE）

俺は夕食を取り、寢床についたのだが、メタナイトにたたき起こされた。

周りに迷惑になるので俺はとりあえず林に入って受け答える。

シュウ「何だよこんな時間に」

メタナイト「すまないな。奴らの尻尾は掴んだか？」

また仕事の話かよ……この仕事バカが。

シュウ「いや、チラッと見ただけだ」

メタナイト「そうか。コチラもそうだが、協力者が手に入った。地上の陸士108部隊だ。ソチラはどうだ？」

んな事知つとるわこのナルシ野郎が。お前なんか手足縮こませて「ボクはボールダヨ」とでも言っとけタコ助。

シュウ「コツチは、そうだな……どこその大名の言葉を借りれば、
良い駒が揃い踏みだ。エース・オブ・エース、雷光、夜天の主とそ
の守護騎士、そして可能性に満ちたフォワード。更に俺達が組めば、
『奴ら』の殲滅も時間の問題よ」

俺は胸中で毒づきながらも会話を続ける。

メタナイト「そうか……我々の目的はレリックの回収」

シュウ「そして、ミッドに殲滅する『奴ら』の殲滅」

俺はメタナイトに次いで答える。

メタナイト「うむ。では……」

シュウ「メタナイト」「汝に武運を」

俺とメタナイトが同時に言って俺は電話を切った。……それで隠れ
ているつもりか？

シュウ「立ち聞きとは、随分と趣味が悪いな。ティアナ」

威圧的に言っと、ティアナが茂みから出て来た。

ティアナ「えっと……さっきの話……」

シュウ「まあ、いいか。口が堅そうなお前なら話しても良いだろう」

俺は話始めた。俺の両親は『奴ら』……ヴァラトブルクに生まれて

直ぐに殺された事、血を分けた婚約者も裏で操るスペースパイレーツ幹部の手に掛かった事、自分には神の血が流れている事等、出来るだけ簡潔に。

そして、ティアナの兄貴、ティードの死に様を目撃した事も。彼女は相当衝撃を受けていたようだった。

アイツは自分の事は二の次にして、放って置けば他の誰かが傷つくから犯人を追ってくれと言っていた。そして俺は捕まえた後、必ず戻って来ると言った。だが……

シュウ「犯人は俺が捕まえた。だが、戻ってきた時には既に手遅れだった……許されるとは思っていないよ……殴りたきゃ殴れば良い」

だが、ティアナは俺に泣きついて来た。俺は無言で彼女をしっかりと受け止めた。

-

「ティアナSIDE」

ティアナ「あれ？此処は……？」

目が覚めると、私は部屋の中にいた。——特に変わった物は無く、壁に白を基調とした胸元に剣が3つ交わるように描かれたエムブレムが着いた制服がかけられていた——私は昨日の事を思い出している。

……えっと、確か練習していたらシュウが話しているのを見つけて……それとヴァラトブルクの事とか、シュウの正体を知って……後、シュウはあの事件の時、兄さんに会った事があって……それで……

っ!?

ティアナ「／／／／／」

そこまで思い出して急に恥ずかしくなってしまった。うわ……物凄く恥ずかしい／／／

今でも時々思い出す。兄さんの葬式の時にいた黒い足首まで届く口―ブを羽織った人……終わった後も立ち尽くしている姿は何処か悲しげだった。

今なら分かる。あの人は……

シュウ「よう。目え覚めたか？」

私はシュウの声が聞こえた事で我に返る。

シュウ「手早く準備して、サッサと行くぞ」

そう言い残してシュウは行ってしまった。

私はちよつと間を置いて、机の上にある相棒を取って追いかけた。

ティアナ「待つて！お兄……シュウ！」

（シュウSIDE）

ティアナが一瞬お兄ちゃん発言しかけたのを気にせずに、俺達は朝食を取った。他の三人はティアナが俺に対して友好的な態度をとっている事に少々気になっていたが、聞いて来なかった。大体予想出来たからだろう。

それからティアナは余り感情的にならなくなった。これならあの話をして正解だったな。

そしてある日、事件が起きた。

-

とある模擬戦の日、俺とヴィータ、エリオ、キャラは例のビル郡の屋上からソレの観戦する。今はスターズの番だ。

フェイト「あつ、もう模擬戦始まっちゃってる?」

エリオ「フェイトさん」

シュウ「いや、まだ始まってねえよ」

ビルの扉が開いてフェイトが入って来た。

フェイト「私も模擬戦手伝おうかと思ったんだけど」

ヴィータ「今はスターズの番」

フェイト「本当はスターズの模擬戦も私が引き受けようとしたんだけどね」

ん? どういうこと?

ヴィータ「ああ、なのはもここところ訓練密度濃いからな。少し休ませねえと」

フェイト「なのは、部屋に戻ってからもずっとモニターに向かいっぱなしなんだよ。訓練メニュー作ったり、ビデオで皆の陣形チェックしたり」

シュウ「それに、プロの意見が聞きたいからって相談に来たぜ。アイツ……もっと人を頼れつつたのに……」

付け加えた後、舌打ち混じりに呟く。

そして、模擬戦が始まったのでソチラの方を向く。

ティアナが多数の魔力球を放つが、なんかスピードがない。まるで別の何かを狙っている様な……

すると、ウィングロードが出現し、スバルが襲い掛かる。……あれ？スバル、本物じゃね？

スバルは特攻を仕掛けるが失敗したらしく、バランスを崩しながらもウィングロードに着地する。

フェイト「ティアナが砲撃!？」

俺がそちらに顔を向けると、ティアナが砲撃態勢をとっている。だが、俺の目はごまかされない。

シュウ（フェイクシルエツトか……）

ソレを察し、俺はティアナを探す。

キャロ「アツチのティアさんは幻影!？」

エリオ「じゃあ本物は!？」

どうやらティアナはウィングロードを伝ってなのはを強襲するようだ。何考えてんだか……

そして、そこを中心に爆発が起こり、かなりの衝撃が襲う。

フェイト「なのは!」

俺は無言で爆心地を睨みつける。

爆発が納まると、レイジングハートを待機状態に戻し、なのはが左手でスバルの拳を、右手でティアナのダガーを受け止めている。

シュウ「アララ……キレてるか？アイツ？」

なのは「おかしいな……二人ともどうしちゃったのかな……頑張ってるのは分かるけど、模擬戦は、喧嘩じゃないんだよ？練習の時だけ言うこと聞いているふりで、本番でこんな危険な無茶するんなら……練習の意味……無いじゃない……」

俺はなのはの右手から血が出ている事に気づく。

なのは「ちゃんとさ、練習通りやろうよ」

スバル「あ、あの……」

なのは「私の言ってる事……私の訓練……そんなに間違ってる？」

なのはがそう言うと耐え兼ねた様にティアナはなのはから距離を取って訴える。

ティアナ「私は！もう、誰も！傷つけたく無いから！失いたく無いから！」

スバル「ティア……」

ティアナ「だから……強くなりたいんです！」

なのは「……少し、頭冷やそうか……」

そう言うと、なのははティアナに指を向けてクロスファイアーシュートの態勢に入る。

シュウ「このっ……」

俺はS・E・E・Dを発動させながらセットアップする。

シュウ「馬鹿野郎オオオ！！」

俺はお得意の神速でクロスファイアーシュートを全弾蹴りで掻き消す。

なのは「シュウ……なんのつもり？」

なのはは俺に対して無機質に言うが俺は吐き捨てる。

シュウ「さっきのお前のやり方は気に食わん。俺がお前を……喝を

入れてやらあ」

俺がそう言つと、なのははピクリと体を動かし、砲撃を放つ。だが、俺はソレを指一本で受け止める。

シュウ「風よ」

そう呟くと、鎌鼬がなのはに襲い掛かる。

なのは「シュウ君……なんでこんな事をするの？」

なのはが俺に問い掛けるが俺は無視する。生身でS・E・E・Dを発動させた際に起こる症状で、必要最低限の言葉しか喋らなくなるのだ。

シュウ「五行覚醒！青龍！朱雀！白虎！玄武！黄龍！」

そして、俺の体から青、赤、白、黒、黄の光が溢れ出る。

俺はツインブラスターフォームを展開し、砲撃魔法を放つ。

シュウ「消え去れ！デスティニーハーツ、デット・エンド・シュート！」

なのははシールドすらも張らずに砲撃に飲み込まれた。

「なのはSIDE」

私はシュウ君に喝を入れると言われてカチンときたから砲撃を放つ。でも軽く指一本で防がれてしまう。

シュウ「風よ」

シュウ君がそう言うと、バリアジャケットが次々と切り裂かれ、露出した所から血が見える。鎌鼬!?

なのは「シュウ君……なんでこんな事をするの?」

シュウ「五行覚醒!青龍!朱雀!白虎!玄武!黄龍!」

私はシュウ君に既に分かりきっているのに何故戦うのかと聞くけど、聞く耳持たずに朗々と叫ぶ。すると、体から五色の光が溢れ出す。

私は震えが止まらなかった。本気のシュウ君の前に立ち尽くす事しか出来なかった。

シュウ「消え去れ!デステイニーハーツ、デット・エンド・シュート!」

放たれた砲撃が私に迫る。後は直撃するだけというその時だった。

目醒めよ――

当たる直前に声が聞こえた。

そして私は藍色の光に飲み込まれた。

16th PHASE 願い、ふたりで（後書き）

ギンガ「ちょっとちょっとちょっと！」

闇「何？どしたのギンガ？そんなに慌てて？」

ギンガ「前書きと最後のあれって何なんですか？ふざけてるんですか？」

闇「んな訳無いって。コレについては語れません！読む楽しみがなくなる！」

マルス「諦めた方がいいよギンガ。小説ってのはそんな物だから」

ギンガ「納得いかない……」

17th PHASE 大切なこと（前書き）

今回、またもや新キャラが登場！

17th PHASE 大切なこと

「フェイトSIDE」

私達は呆然としているしかなかった。シュウがなのはに圧倒的な力を見せ付けているのを。

なのははシュウが放つ鎌鼬を何とか交わそうとしているけれど、敵は風。呆気なく切り刻まれていく。当のシュウは涼しい顔をしている。

なのは「シュウ君……なんでこんな事をするの？」

なのはの問い掛けにも全く反応せずに五色の光に包まれた後、砲撃を放とうとしている。

エリオ「フェイトさん！ヴィータ副隊長！」

キャロ「止めなくていいんですか！？」

ヴィータ「無駄だ。今のアイツには、管理局の魔導士全員が束になつてかかっても勝てねえ」

エリオとキャロが私とヴィータを促すけれど、ヴィータは力無く首を横に振りながら言う。私はただ光景を見るしか出来なかった。

シュウ「消え去れ！デステニーハーツ、デット・エンド・シュート！」

シュウの放った巨大な砲撃が当たる直前、

目醒めよー

とても無機質な声が頭に響いた。

フェイト（今の声は一体……）

目の前でビル郡全体を揺るがすような爆発と震動が襲い掛かって我に返り、私は急いでなのはがいた場所まで走った。

「シュウSIDE」

俺は直撃を確認した後、S・E・E・Dを解除してなのはの元へ向かった。加減はしたから気絶ぐらいですんでくれるといいんだが……

行ってみると気絶すらしていなかったが、その場に仰向けに倒れていた。

シュウ「おゝい、大丈夫か？死んでるか？」

なのは「勝手に殺さないでよ……」

俺が顔を伺うようにして冗談混じりに声をかけると苦笑いしながら反論してきた。

なのはを助け起こし、俺は言った。

シュウ「いいか、なのは。話さなきゃ分からねえ事もあるんだ。しかも、お前は辛い事を一人で抱え込む癖がある。それを断ち切って、

腹割って話す事も必要なんだよ。前にも人を頼れつつたよな？」

なのは「頼ってるよ。前にシュウ君にアドバイス受けたし」

なのはがブーっと口を尖んがらせて文句を言ってきた。

なのは「ひはいひはい！ひはいっへは、ひゅうふゅん！（痛い痛い！痛いってば、シュウ君！）」

シュウ「ド阿呆が！意味がちげえよ意味が！自分の仕事を誰かに分けて手伝ってもらえて意味だ！」

俺は再び怒鳴る。

ヴィータ「おゝい、そろそろ良いか？」

ニヤニヤしながらヴィータが口を開く。フェイトはなのはを睨んでいる。

シュウ「しゃーねえ、よつと」

なのは「にやにやにやにやにやにやにやにやにや！？」

俺はなのはをヒョイと抱き上げると、ひょっこり昔のなのはが顔を出した。今、俺はなのはをお姫様抱っこをしている状態である。

シュウ「ちよつ、暴れんな！落ちるって！」

フェイト「いいなあなのは……私もシュウにお姫様抱っこされたい……」

シュウ「オメーは黙ってるオオオオオオ！」

フェイト「痛っ！」

パニックになってニヤーニヤー暴れているのはを見てポツリと呟いたフェイト。そんな彼女に俺は靴を飛ばし、顔面に直撃させる。

俺はとりあえずなのはを医務室へ運び込んだ。

-

あの後、緊張が解けたのか今度はティアナがぶっ倒れてしまった。今はとにかく俺の部屋で眠っている。

なのはが何故あんな行動をとったのか気になる。本人に直接聞いた所、数年前に無茶して二度と空へ上がれなくなる恐れがあったそうだ。成る程……自分の様に無茶をしないで欲しかった訳か……

思考を終わらせた後、警報が鳴り響く。

シュウ「敵襲か……」

-

今回は空戦で、出るのはなのは、フェイト、ヴィータの三人だ。シグナムはこちらに残るようだ。

シュウ（そついえばまだアイツらから連絡が来てないな……）

俺はそんな事なんかそっちのけで悩んでいる。

なのは「あ、それからティアナ」

ティアナは肩を一瞬動かして反応する。

なのは「ティアナは出撃待機から外れところか」

まあこうなるか。俺もメタナイトに反発するが、睨んじまえば直ぐ小さくなるからなアイツ。総統すらも「ヒッ！」って言ってたし。

ヴィータ「そうだな。そうしとけ」

なのは「今夜は体調も魔力もベストじゃないんだろうし」

ティアナ「言う事を聞かない奴は……使えないって事ですか……」

ティアナよ。じゃあ俺も使えないと言いたいのかお前は？

なのは「言ってて分からない？ 当たり前的事だよ、それ（シュウ君には耳が痛い話かも……）」

ティアナ「現場での指示や命令は聞いてます！ 教導だって、ちゃんとサボらずやってます！ それ以外の場所での努力まで、教えられた通りじゃないとダメなんですか！？」

そうだティアナ。言いたい事を全てぶつける。抱え込むくらいなら、吐き出せばいい。

ティアナ「私は！ なのはさん達みたいのエリートじゃないし、スバ

ルやエリオみたいな才能も、キャロみたいなレアスキルも、シュウみたいに特別な血も無い！少しくらい無茶したって、死ぬ気でやらないきゃ強くなかなれないんじゃない？……」

なにさりげなくカミングアウトしてんだよ！？じゃなくて、ティアナが言いかけた途端、シグナムが胸倉を掴み殴り飛ばした。

フェイト キャロ「シグナム（さん）！？」

シュウ「オイイイ！？」

シグナム「心配するな。加減はした」

シュウ「この堅物が！」

それぞれの反応を示すと、シグナムは無表情で言った。負けじと毒づいたら「ぐっ……」と唸った。

シグナム「駄々をこねるだけの馬鹿はなまじ付き合ってやるから付け上がっている」

シグナムは声の調子を少し落として言った。凹んでね？アイツ凹んでね？

なんだかんだでなのは達は現場へ向かった。

あの後、シグナムに「お前にだけは言われなくなかった」と言われたのは余談である。

なのはが向かっている間、俺とシグナム、シャーリーと四人がモニターに目を向けている。

俺は対して驚かなかった。始まりが若干俺とカブってるし、俺の方が凄いい事になってるからな。

そして、例の事件の事に話に移る。成る程、ヴィータはその時に居合わせていたのか……

なのはについての話が終わった後、次は俺自らが話始めた。

俺はティアナに話した事よりも少々詳しく、映像を交えながら説明する。

シグナム（そうか…… シュウが戦うのにはこの様な理由が…… 全く、つくづく面白い男だ……）

すると、なのはから通信が入る。なんでも俺に会いたい奴がいると言っただ。俺はとりあえずソイツに会うことにした。

ソイツは俺の部隊の第二席を勤める、デルタ・ロックフィールドだった。

先の戦闘に出くわし援護した後、なのは達に事情を説明してついて来たとの事。

そんな訳で、ロックフィールド兄弟の弟、デルタが六課に合流する形となった。

17th PHASE 大切なこと（後書き）

闇「という訳で自己紹介！」

デルタ「デルタ・ロックフィールドです！宜しくお願いします！」

闇「さて、コイツを出そうかと思ったのは単なる気まぐれです」

デルタ「気まぐれの割に結構ちゃんとした設定あるんだよね……」

名前

デルタ・ロックフィールド CT：石井真

誕生日

12月4日

血液型

B型

人種

ナチュラル

年齢

16

所属

銀河戦士団零番隊第二席

階級

中尉

武器

スラッシュアックス

備考

母親を父親に殺され、その復讐に燃える兄と共に旅立った少年。
その後モンスターを狩る毎日を送り、試行錯誤の末、スラッシュア

ツクスに落ち着いた。

冷静沈着で残忍な兄とは違い、温厚で優しい性格。シュウと同じく大切なモノを守る為、日々彼の背を守っている。

闇「こんな感じだね」

デルタ「もう少ししたら兄さんも出てくるので宜しくお願いしますね」

闇「お、おう……」

18th PHASE 機動六課のある休日

あんな事があって、なんとかティアナと和解したなのは。ようやくと安心出来ると思ったが、シグナムに模擬戦を仕掛けられた。今まで散々スルーしたが、流石に無理があった。まあ、返り討ちにしたが。

今回の訓練はデルタの実力調べを兼ねた第二段階に進めるかどうかのテストだったらしい。結果的にデルタが勝ったが、あんなだけやってクリア出来ない筈が無い。

俺達は昼食を食べている最中、レジアス・ゲイス中将の演説が流れる。因みに四人はセーレ、デルタと一緒に食べている。

レジアス「魔法と技術の進歩と進化。素晴らしいものではあるが、しかし！それが故に我々を襲う危機や災害も十年前とは比べものにならぬ程に危険度を増している！兵器運用の強化は、進化する世界を守る為である！」

シュウ「口だけにならなきゃいいが……」

俺が呟くと、ヴィータが「お前は真ん前でそれを見たって言っただけだな」と同意する。

その通り。平和を守る為と言っている事は聞こえがいいが、だからといって罪も無い人々を巻き込む必要はあるのか？ いや、無い。

レジアス「首都防衛の手は未だ足りん！地上戦力においても、我々の要請が通りさえすれば、地上の犯罪も発生で20%、検挙率にお

いては35%以上の増加を初年度から見込む事が出来る！」

ヴィータ「このオッサンはまだこんな事言ってるのな」

シグナム「レジアス中將は昔から武道派だからな」

はやて「ん？でも良く最強の戦力（零番隊）が私達の所におるんやろっ？」

シュウ「地上本部には、本部、一番隊、四番隊、六番隊が着くのが条件で俺がこちら側に回ったんだよ。まあ、隊長陣は『俺ら全員より、シュウ一人の方が強い』って言ってるみたいだけど」

因みに補足すると、銀河戦士団には各番隊に名前が着いており、団内ではソッチで呼ぶことが多い。

本部はコア、零番隊はアサルト、一番隊はストライク、四はアサシン、六はソウル。といった具合だ。

シュウ「それに、ちょっと脅しも入れたって言ってたしな。『ミッドチルダ（この街）にある災厄が降り懸かるであろう』とでも言ったんじゃないか？」

俺はそう言っただけだが、俺以外は顔色が悪い。

シグナム「お前の言う事は……外れた事が無かったな……」

ヴィータ「か、か、か、考えすぎだぞシグナム？そんなのありえねーって！」

はやて「ふ、二人とも……か、顔引き攣つとるでえ？」

なのは「は、はやてちゃんだって……声震えてるよ？」

フェイト「み、皆落ち着いて……今はとりあえず……た、た、た、タイムマシンを……」

シュウ「いや先ずテメーラが落ち着けエエエエエ！」

俺のシャウトが食堂に響いた。

-

久しぶりに俺のツツコミが炸裂した後、暇を貰って俺はクラナガン
を散策する。じっくり歩いた事無かったからなあ。

こうして見ると普通の都会って感じがするな。

ぶらついていると、スバルとティアナを見つけた。

俺は指笛を吹いて注意を促す。

スバル「あつ！シュウ！」

シュウ「よく、お二人さん！」

スバルが手を振って反応を示すと俺は軽く手を挙げて応える。

そして俺はちょっとしたドヤ話で盛り上がる。四メートルを越える
鮫を釣り上げた事があるとか、オーロラを見たことがあるとか。

そうしたらティアナがこんな事を言い出した。

ティアナ「ストライカー……か……なれるかな？私達」

スバル「なれるよ！絶対に！」

シュウ「そうそう、その意気だ。そういう前向きな考えを持つのは良いことだ。お前ら二人には素質がある。特に、ティアナ」

ティアナ「うえ！？私！？」

スバルに続いて俺がこう言うと、ティアナが妙な口調で驚く。

シュウ「そう。お前は俺と同じ力もんを持っている。ソレをいかに開花させるかが問題だわな……いつ起こるか分からないからなあ、その力は……」

ティアナ「はあ……」

すまんティアナ。この力は多分レアスキルに値するだろうからコレくらいが限界なんだ……すまん。

ヴァルセリオン「ボス、キャラから通信です」

何だってんだ？

シュウ「繋げる」

ヴァルセリオン「アイ・サー」

どうやらただ事じゃなさそうだ。

キャロ「こちら、ライトニング4！緊急事態につき現場状況を報告します！」

内容は路地裏にレリックらしきケースを発見し、ケースを引っ張っていた女の子が意識不明のようだ。

シュウ「よし、ヴァルセリオン！発信もとの解析頼む！ティアナ！スバル！俺の手を握れ！瞬間移動で二人の所へ行く！」

一気に仕事モードになった俺の言われるままに手を握る二人。

シュウ「レポート！」

俺が叫んだ瞬間、その場から三人の姿が消えた。

-

シュウ「ホイ、到着」

スバル「エリオ！キャロ！」

エリオ「スバルさん！ティアさん！シュウさん！」

ティアナ「この子が……また随分ボロボロね……」

女の子は大体五、六歳ぐらいの女の子だろうか。

だが、この子を見た時に感じたあの感覚は何だったんだ？まるで、以前に会ったことがあるような……

スバル「シュウ？」

スバルが声をかけて来なければずっと考えてただろう。

シュウ「悪い、この子を見た時に妙な感覚に襲われてなあ……それ
はさておき、レリックの封印はやったんだな？」

エリオ「はい。キャロがやってくれました。ガジェットに見つかる
心配は無いと思います。ただ……」

シュウ「あと一つある訳か……よし、とりあえず女の子はヘリ
に任せて、俺らは残りのレリックの回収だ」

少し考えた後、俺は四人にこう告げ、ヘリの到着を待った。

-

俺達は地下水路を進んでいる。道中ガジェットと遭遇したが、俺が
スペカでぶっ飛ばしたので問題無かった。

なのは達もガジェットをバツバツと破壊しまくっているようだ
から問題は無い。いざなればアイツを向かわせればいい。

ついでにギンガとマルスと合流し、上々……かと思いきや一人の少
女と虫みたいな奴に遭遇する。

アレ？この女の子と会ったことあったか？初めて会った気がしない

んだが……気のせいかな？

シュウ「……オイ、このレリックはお前さん方が捜し求めてる番号じゃねえぜ？」

俺は二人組に威圧的に言う。アレ？なんでそんな事知ってるんだ俺？

だが、女の子はレリックのケースを持っているキャロに歩み寄る。

スバルが妨害しようとするが、虫がソレを阻止する。ならばとマルスが挑むが、突然視界をやられる。

俺は新たにリインのようなちっこいのが現れ、「烈火の剣精・アギト」なんて名乗っている。目立ちたがりなのか、周りに花火みたいのが発生する。

アギト「あゝ！お前あん時の！管理局の人間だったのかよ！」

アギトが俺を指差して喚き始めた。もう訳分からん……召喚士の女の子と会った事があるような感覚になるし、彼女が探しているレリックの番号が分かるし、アギトが見ず知らずの俺に対して会った事があるようなそぶりを見せる。

シュウ「ちょっと待てよ……俺は何も知らん！初対面だ！」

アギト「んなこたあどうでもいい！怪我したく無かったらサッサと渡せ！」

結構慈悲深いんだなアイツ。だが、そう言われて、「はいそうですかと」渡す訳が無い。

なのは達の方が苦戦しているみたいだから、ついでにアイツにテレパシーで出撃命令を出しておく。

シュウ「ふん……力付くで来い！」

俺はそうやってついノリでヴァルセリオンとレリックをぶつける。実はこのレリックに龍の紋様が刻まれている事に気が付いたのだ。つまり、あの女の子では無く、俺が求めていたレリックだったのだ。

♪ N a k e d a r m s

ヴァルセリオン「『解放の鍵』装填確認。全リミッターを解除します」

シュウ「いいだろう……目醒めよ！クロス・ヴァルセリオン！」

ヴァルセリオン「新規名称、クロス・ヴァルセリオン承認。エボリューション！」

すると俺の体から光が放たれ、バリアジャケットの形が変わっていく。その姿はウィング（W）ゼロ（Z）カスタム（C）そのものだ。さらに、ヴァルセリオンも形がWZCのバスターライフルに変わっている。

俺はWZCと化してしまった。

マルス（なんで？）

シュウ「先ずは貴様だ、虫野郎が……」

俺は睨みを利かせて砲撃を放つ。虫は俺の覇気に怯み、なす術無く砲撃に飲み込まれる。

シュウ「まんまバスターライフルだ……」ふん……手応えが無いなあ……」

俺は両腕をグルンと一回転させながら毒づいた。

-

「はやてSIDE」

私はフリースヴェルグを何発も撃ってガジェットを掃討している。

なんとか全部当たってるけど……流石に数が多いわ……

ふと、私の視界に黒い点がある事に気づく。それがドンドン大きくなっている。って、近づいて来とる？近づいとるよね！？

点の正体は赤い体を持つ竜だった。竜は頭がちょうど私の上半身ぐらいの大きさで、卵のような形をした尻尾。さらに頭、胴体、翼、尾に白銀の甲冑が着けられている。

竜はガジェットの編隊に三連続で火球を叩き込む。ガジェットは完全に竜に気を取られてる。私はここぞとばかりにフリースヴェルグを放つ。射程内にいた竜は上昇して逃げる。結構頭いいみたいやねあの竜。

ホント……シュウ君は何でもありやなあ……

18th PHASE 機動六課のある休日（後書き）

作者の独り言

遂に出してしまった……遂にリオレウスを出してしまった……まあ、以前から出そうかと思ってたから、問題無いか。

さて、次はいよいよアイツが出るなあ……しっかり活躍させねえと。

19th PHASE 反逆者

俺は虫野郎をバスターライフルで攻撃した後、二人を睨みつける。

アギト「ガリユー！？テメエ！」

成る程、あの虫はガリユーというのか……敵ながらいいい名前じゃねえか。

シュウ「それより、自分達の心配したほうがいいんじゃないのか？
そら、チエックだ」

俺はニヤリと笑いながら忠告する。なぜなら、彼女達の周りには大量のナイフが囲むように配置されていたのだから。

アギト「っちい！こんな鉄屑、ぶち壊し……」シュウ「滅！」

アギトが馬鹿にしたように言うが、舌の乾かぬ内に俺は陰陽師さながらに彼女達を指差すと、ナイフが一斉に爆発する。

シュウ「チエックメイト。貴様らの負けだ」

実に呆気ない勝負だった。

そして、現在少女に尋問をしている所だが、全く表情が読めないな
コイツ……

少女「逮捕はいいけど……」

少女「大事なへりは、放っておいて良いの……？」

シュウ「クッククッククック……クハハハハハハハハハ

アギト「何笑ってんだよ！」

シュウ「からすめ。俺が何の策も講じていないと思うたか。笑止！」

突如放たれた砲撃がへりに向かっているが、その砲撃が真つ二つになつた。

シュウハナイスだ。ガンマ

ガンマ「ふん。この程度、俺の大鎌の前には紙切れにすぎない」

俺は砲撃を斬った張本人、デルタの兄、ガンマ・ロックフィードにテレパシーを送るが、至極当然といった様子で返される。変わってねえな……

シュウ「……よし、撃つた張本人もセーレが発見したようだな。これで逃げ場は無い。年貢の納め時だぜ」

俺はセーレから送られて来たテレパシーを受け取り、ついカッコ良

く言ってしまった。ヴァイトブルクもいたようだが、関係性は無いそうだ。

さて、どうするか……と思っていたら、俺の後ろに大鎌が飛んできた。

すると急にガンマが地面に手を伸ばし、アスファルトから出ている指をむんずとつかんで一本釣りさながらに引き上げると、空色の髪の少女が出て来た。

ガンマ「俺から逃げられると思うな……」

空髪「ちよつ、まだ追ってたの！？ ストーカー！？」

シュウ「んな訳ねえーだろ」

ヴィータ「シュウ、何だコイツは？」

シュウ「コイツはデルタの兄、ガンマ。職業、殺し屋」

ヴィータ「そらしょーがねえな……ってオイ！」

ヴィータがガンマの方を見て言うと、俺が放った職業に驚く。

シュウ「ガンマ。コイツは俺が保護する。だから殺すな。」

ガンマ「ああ……」

冷徹なガンマも、俺には頭が上がらないのだ。

ん？なんか少女痩せてるような……なんかちょっと疲れ気味みたいだな。

てな訳で、この少女……セインは銀河戦士団が保護する事になった。

俺はセインから話を聞いたが、あちらも苦労しているようだった。

彼女は戦闘機人であり、違法と知りながらスカリエッティは戦闘機人を創った。だが、今までは普通の生活をしていたとの事。だが、とあるきっかけでこうなってしまったと言う。

因みに、あの召喚士の女の子、ルーテシアとアギト、更に別行動をしていた。ゼストという男性も一時、銀河戦士団コチラの所属となった。

また、セインはその戦闘機人の中で数少ないまともな性格なのだと言う。大体こんな感じの内容だった。

てな訳で、機動六課と銀河戦士団＋4対スカリエッティ一味対ヴァラトブルクの三つ巴の戦いが始まるうとしていたのだった。

19th PHASE 反逆者（後書き）

闇「なんか色々面倒臭い事になってきた……イヤイヤイヤイヤ！気を取り直して自己紹介お願いします！」

ガンマ「ガンマ・ロックフィールドだ……」

名前

ガンマ・ロックフィールド CT：中村悠一

誕生日

12月4日

血液型

B型

人種

ナチュラル

年齢

16

所属

銀河戦士団四番隊副隊長

階級

少尉

武器

大鎌

備考

父親に殺された母親の仇を討つために旅立ったデルタの双子の兄。寡黙で口が堅いクールガイである。

父親を殺した際、自分には才能がある事に気づき、殺し屋になる。それを評価され、隠密・暗殺を手掛ける四番隊の副隊長となる。階級が弟より下だが本人は気にしていない。

20th PHASE 唐突の白（前書き）

今回、主人公の真実が明らかに……

俺は軽く溜め息を着いた。どうやら冷気は都市部から流れているようだ。

するとそこへ偵察に行っていたセーレから通信が入る。クラナガンにベリオロス二体が出現したらしい。さらにシーゴースもいるとかめんどくせー。

俺は露払いの為に先攻する。なのは達の姿も見えなし、何とかなさ。

俺は獲物のドラゴアーツを構えながらクラナガンへ急行した。

-

ヴィータ「ま……マジかよ……」

市街地は極寒の地と化している。十体程のシーゴースが練り歩いており、たまに氷塊を吐き出している。

フェイト「一体……」

フェイトがそう呟いている間に何処からか咆哮が聞こえる。

その主はビルの屋上にいた。真っ白い体に両脚に着いた翼。そして巨大な牙、氷牙竜、ベリオロスだ。しかももう一体もいる。

スバル「な、何あれ!？」

シュウ「奴は氷牙竜、ベリオロス。永久凍土の世界に君臨する迅速

の飛竜だ！」

俺がそう言うなり横っ飛びしながら突進してくるベリオロス。

シグナム「シュウ、何か奴の弱点は無いのか？」

シュウ「ある。奴は尻尾と翼に生えているスパイク状の鱗で滑るのを防いでいる。故に翼を破壊してしまえばコッチの物。そして奴は火と気絶に弱い」

シグナム「分かった。それだけあれば十分だ」

てなわけで俺達は翼を集中的に攻撃する。素早い動きに苦戦していたが、コッチにはソレが二人いるので問題無かった。

そして遂に左翼を破壊。続いて右翼も破壊。あからさまに動きが鈍くなった。

シュウ「さて、じゃあ仕上げと行くか」

炎気を剣に宿して衝撃波を放つ。

シュウ「これでよしと、何とか全滅出来たか……」

俺はそこらじゅうに転がっている十数体の亡きがらを回収して引き上げて行った。

-

あの後、ミッドチルダ全域の氷や雪は二、三日で溶け、再び一時の

平穩が訪れた。

しかし、奴らも本格的に動き始めたか。こりゃあノンビリしちやいられねえな……等と考えていると、俺の目にある光景が映った。

森の中、恐らく木に登っているであろう人物は下の方を見ている。下には女の子がウロウロしている。俺はその女の子に見覚えがあった。

シュウ「ルーテシア？」

？「どうした？道に迷ったのか？」

俺が視点として見ているのは男だと分かった。ルーテシアは警戒しながらも軽く頷いている。

俺は一瞬で悟った。俺と間違える人物なんて一人しかない。

ディリア・クロード。キラ・ヤマトに次ぐ二代目スーパーコーディネイター。俺は彼のクローンなのだ。見間違えるのも仕方が無い。

これは、俺の前世の記憶だった。

20th PHASE 唐突の白（後書き）

闇「スマン。色々あって更新が遅れてしもうた」

シユウ「しゃーねえって、検定勉強とかで慌ただしかったからな！。
それに、お前凄いやいペースだからなあ……」

闇「ですよーwwww」

Another PHASE - 2 伝説の戦士の訓練術

それは、ある一言から始まった。

なのは「そういえば、シュウ君はどんな訓練をさせてるの？」

こう言われた時、俺はちょっと焦った。銀河戦士団は基本自主練で、模擬戦も団員同士が声を掛け合ってチーム戦で、しかもその時の道具は芝居等で使う道具。隊長がその訓練に付き合つというような事は百回に一回程度しかない。しかも訓練をする必要がない部隊もある。

シュウ「えつと……銀河戦士団は基本自主練だから、殆どそういう光景は見たこと無いなあ……」

なのは「ええ！？そうなの!？」

だよなあ……訓練を自分の都合や気分に合わせてるなんて、衝撃を受けるよなあ……

なんて考えていると、突然なのはがこんな事言いやがった。

なのは「じゃあ、次の訓練はシュウ君に任せちゃおっかな」

シュウ「……………ハアアアアア!？」

-

シュウ「……………」という訳で、今回の訓練は俺が勤める事になった」

ヤバイ……あいつらちゃんとして来れるのか……？若干不安なんだが？

まずは軽く体を動かした後、スバルがでっかいコンテナに気づいた。

スバル「ねえ、アレ何？」

シュウ「ああ、アレにはお前らの相手が入ってる」

俺が真顔で言うと、四人が急にざわつき始めた。

シュウ「大丈夫だって。加減するように言ってるから。それじゃあ……出て来いや！」

俺がそう言うとなのはとフェイトが盛大に吹き出した。

コンテナがぶっ壊れ、中から赤い飛竜、リオレウスが姿を現す。

ティアナ「ちよっ、アレの相手をするの！？」

シュウ「アイツを転ばせたらお前らの勝ちだ。じゃ、頑張れよー」

俺はノンビリとそう言い残してビルの上に立つ。

シュウ（全く……見た目だけであんだけ動揺するなんてなあ……四人いるんだから連携とって足を集中攻撃すれば普通に転ぶのによお……）

そっ、この目的はどんな巨大な敵にも怯まずに立ち向かう胆力を

鍛えるのが本当の目的。それを悟ったからか、なのは達は何も言わなかった。

そして、ティアナの放った魔力弾が足に命中し、リオレウスが地面に叩き落とされる。

シュウ「やりやがった。まっ、これぐらいは普通だよな。それにしてもあいつらも成長したなあ……以前と比べて動きが随分良くなつて来ている」

俺はそんな事を呟きながら四人に声をかける。

シュウ「よし、お疲れさん。そうじゃあ次行くぞ！次はラギアだ！」

-

そして午前の訓練は終わり、四人は相当疲れていた。

スバル「あゝ……あの竜の攻撃はきつかったゝ……」

ティアナ「あの鱗って結構硬いのわね……」

俺達はその会話を聞いている。

シグナム「シュウ、午後はお前と一戦交えたいのだから？」

シュウ「上等だ。いつでもきやがれ！」

すると、聞き捨てならぬとフェイトが反乱してきた。

フエイト「駄目っ！今日は私と！」

シグナム「何を言うか！お前は先日も手合わせしただらう！？」

フエイト「でもシユウとは何度もやってたでしょう！？今やった方が丁度数が……」シユウ「うっさいわあああああああ！」

耐え兼ねた俺はフエイトとシグナムの頭を掴み、ぶつけた。

シユウ「何なんだお前ら？いつもこんな事で言い争いをしてんのかよ！？馬鹿馬鹿しいわ！」

アギト「アイツっていつもああなのか？」

セーレ「たまにな。だが、あの人を怒らせると怖いぜえ？敵だったら死亡率100%だからな。味方でも半殺しは必至だな」

アギト「恐えー！」

シユウ「そこー、聞こえてんぞー」

俺はすっかり意気投合しているセーレとアギトにツッコミを入れる。

六課は今日も平和である。

21th PHASE 命の理由

今、俺はシグナムとなのはの付き添いで聖王教会付属施設の病院に向かっている。理由は以前保護した女の子の様子見だ。

俺はいい機会だから聖王教会の連中の顔でも見に行こうかと思ったからである。

それにしても何であん時ベリオロスが出て来たんだ？スペースパイレーツが捕獲でもしたのか？見事な洗脳ぶりだったし。

そして何よりも、女の子を見た時のあの感覚……一体どんな理由があるんだ？うーん……

シャツハ「騎士シグナム。聖王教会シャツハ・ヌエラです！」

試行錯誤していると突然通信が入り、俺は我に帰る。あらかた、女の子が逃げ出したんだろ。当然だ、知らない土地に知らない人々……あの歳なら不安になるか、歳の割によっぽど肝が据わっている奴かの二つだ。あつ、後者は俺の事な。結構遠出してたしなあ……今となれば懐かしい思い出だ。

やべっ、話が逸れた。

とりあえずまず行ってみよう。話はそれからだ。

-

聖王教会に着くと早々に俺は波動を使い女の子の位置を特定する。

なのは「シュウ君、何処にいるか分かる？」

俺の行動を悟っていたのかなのはが問う。

シュウ「ああ、コツチだ」

シャツハ「凄いですね、彼は」

シュウ「まあ、確かにそうかもな。この世界に波動なんて代物なんざに触れる機会はゼロだからな」

俺は移動しながら波動について説明しておく。

俺の言う波動とは、あらゆる物体が発する気のような物。熟練者ともなれば、数十km先の波動をも感知でき、その波動の発信源が人物ならばどんな感情を持っているか等も知ることが出来る。

波動の話をしながら暇を潰していたら、目の前の草村から兎の人形を抱いた金髪の女の子が出て来る。その女の子は赤と緑のオッドアイだった。

シュウ（また……あの感覚だ……）

俺は再びあの感覚に襲われる。だが、それも直ぐに押さえ込んだ。シャツハがバリアジャケットとデバイスを展開して構えているのだ。

女の子は兎の人形を取り落とし、目尻に涙を溜めながら尻餅を着く。

俺は呆気にとられているシャツハの後頭部をヘルクラッシュシュフィン

ガー（セーレ命名のアイアンクロー）をぶち込む。

シャツハ「へ……？ いただだだだだ！ 割れる割れる割れる〜！」

二人（うわっ！ 出たよアイアンクロー！）

ヘルクラツシュフィンガーを喰らって悶絶しているシャツハを見てなのはとシグナムが苦笑いしている。女の子はきょとしてしている。

シュウ「あのなあ、そんな警戒心剥き出しじゃあガキは絶対に懐かん。何処だか分からん場所で、心を開ける人もいなんじゃ尚更だ。まずは自分達が敵では無いと示し、安心させるのが最善なんだ。分かったか？ このど阿呆シスター？」

シャツハ「申し訳無いです……」

こう念話で説明すると、なのはが何やら頷いている。あらかた、流石は俺だとも考えているんだろうな。

シュウ「ゴメンな。シャツハ（アホ）がアホな事やって」

俺は人形を拾い、砂埃を払いながら言う。

そして、俺は手頃な葉を拝借して天体観測を一通り奏でる。

シュウ「よつと、俺はシュウ・ガーランドだ。君はなんて名前？」

俺は女の子と目線を合わせて問い掛ける。

女の子「……ヴィヴィオ」

シュウ「ヴィヴィオね。うん、すっかり覚えたぞ」

そう呟いて女の子……ヴィヴィオの頭を撫でると、気持ち良さそうに目を細めている。あれ？結構早く効果が出たな？

シュウ「だが、俺だけってのはちょっとあれだな……なのは、頼む」
なのは「分かった」

なのはは今では結構な母親っぽい外見だし、男の俺よりかは大丈夫かと思っただった。

ふと俺は今日この時間はアイツのデバイスの調整と機能をチェックしなければならなかったのを思い出す。

シュウ「あつ、そろそろお暇させてもらおうかね。」

俺はそう呟きながら彼女達に背を向ける。当然、アレをしながら。

-

シュウ「よつ、調子はどうだ？」

俺はカプセルの中のデバイスと睨めっこしているピンク玉の相棒に声をかける。

カービー「うん、後は最終調整だけ。その土地に行くにはその土地の文化に対応しないといけないからね。『複写』の方は問題無く機能出来るみたい」

シュウ「そうか。それなら問題は無いな」

どうやら来ただけ無駄だったようだ。そして俺は隊舎へ引き返し、はやてから地上部隊の臨時視察があるという話を耳にする。

シュウ「はいはい。だから派手な動きは自重しろってか？」

はやて「うん。ただでさえツツコミ所満載の部隊やる？だからシュウ君に注意せなあかんと思ったんやけどね」

フェイト「地上本部の視察はかなり厳しいって聞いているから」

シュウ「まっ、わざわざ人手が足りないあちらさん方にも戦力を渡してっから、そこまで厳しくはしないと思うが……」

げんなりと言うと二人も確かにと言って苦笑いする。

シュウ「そうだ、なのはもうそろそろ戻って来てんじゃないか？」

そう言いながらモニターを開くといきなり子供の泣き声が聞こえて来た。これは……ヴィヴィオか？

すっかり懷かれているのか、ヴィヴィオがなのはにしがみついて泣きじゃくっている。

俺達はとりあえずなのはの部屋へ向かった。

なのはの部屋に着くと、オロオロしているのはと、完全に空気状態になっているフォワード四人がいた。そういえばアイツ連れてたっけ……？

シウ「出てこい、レックス」

俺はダークボールを頭上へ投げるとその中から飛び出した生命体が俺の肩に現れる。

レックス「ピカ？」

レックスは見た事の無い景色に若干戸惑っているようだが直ぐに本調子に戻り、ヴィヴィオの所に駆け込む。

レックス「ピカ？ピカピカ、ピカピカチュウ」

皆は突然のレックス登場によりそちらの方を注目している。

しばらくするとぱーっと笑い出すヴィヴィオ。レックスの耳とか頬とかを触り出す。これならばあらかた大丈夫だろう。

なのは「ヴィヴィオ、ちょっとお出かけしてくるだけだから」

ヴィヴィオ「うん」

完全にレックスに夢中になってるなヴィヴィオ。まさかここまで効くとは思わなかった。

さて、そろそろやるべき事やっておかんな。でもやること大量にあるんだよなあ……エアライドマシンや武装の整備とかリオレウ

ス等の食料確保とか未来予測とか精神統一とかな。とりあえず一つつつやって行こう。

……普通に疲れた。そういえば疲れたって本気で思ったのって久しぶりじゃないか？

なんて事を考えながら寝ようって考えていると何やら通信が入る。相手は……クロノか？

シュウ「勘弁してくれよ。コッチは整備とか狩りとかで猛烈に疲れてるんだよ」

クロノ「すまない。だが緊急な事だ。直ぐに聖王教会まで来てくれ」

シュウ「しゃーなーなー。十秒でそっちに行く」

俺はそれだけ言い残して通信を切った。よし、テレポート使つか。

-

シュウ「で、何なんだその話ってのは。どうせ俺自身についてだろうが」

言い返さないととなると凶星か。

シュウ「なら、本題に入る前に宿星について説明しておかなければならんな。人が生まれながらにある運命を現した物、そいつが宿星だ。よく何とかの星の下に生まれたとか言うが、恐らくその起源じゃないかと俺は考えていたり」

はやて「じゃあ、私が夜天の書の主になったのも……」

シュウ「宿星によるものと言っても間違いではないかもな」

さて、場が少し和んだのに悪いがシリアスな話をさせてもらおうしよう。

シュウ「そして、俺は永世守護。世界の平和を保つ宿星の下に生まれた。そのためには人外の力が必要だった。それが四神だ」

四神の事はなのは、フェイト、はやての三人は何が四神かは知っているし、恐らくユーノの調査で大体の事は分かっているはずなので触れ……

カリム「四神？」

…… なきゃならんのかい！すると、なのはが説明しだした。地球の思想だからな五行説は。何と無く耳にしたりする事もあるだろう。

そして俺はなのはよりも細かく、モニターを使用しながら付け加えていく。そして日本にはかつて全ての物に神が存在するという思考、いわゆる八百万の神々の事にも少しだけ触れた。

シュウ「まあ、だまに神を数人呼び出す事も出来たりするが、たまに呼び出した神同士が喧嘩する事も少なくは無い」

クロノ「クツクツ……人間臭いな」

シュウ「時に人間以上にな」

こう言ったら六人が一斉に吹き出し、代表してクロノが発言して若干同意する。すっかり目が冴えちまった。

シュウ「さて、そろそろマジで本題に入るとするか。俺は遺伝子調整を受けて生まれた人間だ」

そして俺は話始める。俺の故郷、C・E・では俺のように遺伝子調整で生まれた人間、コーディネイターとなのは達のように自然のまに生まれた人間、ナチュラルとの戦争が起こった事、コーディネイター技術によって親は希望する外観や能力を携えた子供を手に入られるようになったが百パーセントではなかった事、ある科学者が幾度の失敗を重ねて自分の息子を完全なるコーディネイター第一号として誕生させ、さらにその息子が俺の親友である事など。出来る限り簡潔に。

カリム「そうですか……そのような事が」

クロノ「馬鹿げている」

話が終わるとカリムがポツリと呟き、クロノの歯を食いしばる。

シュウ「いや、そうでも無いさ。その技術が無かったら俺は存在しなかったし、こうして出会う事もなかっただろうしな」

シャツハ「それもそうですね」

だが俺はプラス思考でこう言い、シャツハも微笑みながら同意する。

うーん……いちいちややこしくなるから一応この事についても触れておくか。

そう考えた後、俺は再び口を開いた。

21th PHASE 命の理由（後書き）

クロノ「なんだこの中途半端な終わり方は！」

闇「うつさいな……ドラマとかでもこういう事やってるだろうに」

クロノ「はぁ……」

闇「でもさぁ、シュウのあの事実知ってどう思った？」

クロノ「驚かない筈が無いだろう！？なんせシュウがk」闇「ハッ、クロノがネタバレしかけたのでこの辺で！」

ヴィヴィオが六課で暮らすようになってから数日後、俺やなのは以外の人にも話すようになった。

それと今日また合流してきた奴が一人、ご存知の通りカービィである。

現在カービィは十歳ぐらいの子供の姿に変身している。

髪と上着はピンク色で星のついた髪飾り、そして空色のハーフパンツをはいており見慣れていなければ男か女か区別がつかない姿だ。ちなみにこの姿ではフォルス・アルバートと名乗っている。

「シュウも考えたねー。嘘を意味するフォルスを名前にするなんてさ」って言っていたんでこの名前が定着してしまったのだ。

ついでに説明するとカービィのコピー能力はレアスキル『複写』として現れている。

複写は彼が見た能力や技を自分の双剣型インテリジェントデバイス、ヴァルターに登録して何度でもどんな時でも使用出来き、はたまたデバイスの形すらもコピーする。というものだ。

フォルス「ねえ、フォワードの四人と僕で模擬戦するって」

シュウ「そうか。見せてやれ、お前の能力を！」

フォルス「オツケー！」

俺はその一部始終を見守る事にした。

フォルス「ダリヤアアアアア！」

フォルスはヴァルターを順手と逆手に構えてスバルに突っ込み攻め入ろうとする。

スバルはシールドとリボルバーナックルで防ぎ、フォルスの横からティアナの弾が襲い掛かる。

フォルス「無駄だよ！」

そう呟いたフォルスは左足で魔力弾を相殺させたのはいいがソチラに気を取られていた為にスバルに押し込まれてしまった。

スバル「隙有り！」

フォルス「っ！ヴァルター！」

ヴァルター「エヴォルト」

フォルスがそう叫ぶと右のヴァルターがリボルバーナックルに変形し、スバルの拳を受け止める。

スバル「へ？」

なのは「変形した！？」

ヴィータ「おい、何したんだアイツ？」

シュウ「アレがフォルス有能力だ。奴が見た能力や技、デバイスをヴァルターに記録して自由自在に操る事が出来る」

フォルスに自分と同じデバイスを使用させて戦う事でその時のフォルスの動きを記録し参考にする事で更に高いレベルに成長させる。その為にフォルスを合流させたのだ。

フォルスはカートリッジをロードしてナツクルに魔力を集める。するとナツクルがほのかに銀色の光を放つ。これがフォルスの魔力光である。

フォルス「ドウオオリヤアアア！」

魔力で強化させたナツクルで突撃するがウィングロードで退避するスバル。

フォルス「逃がすか！」

フォルスも銀色のウィングロードでスバルの進路に割り込み、スバルを動揺させる事に成功するが、双方からエリオとティアナが迫る。

フォルス「スクリューリボルバーシュート！」

だがフォルスはそれを上回る速さでトルネイドで強化したりボルバーシュートを放つ。

そして最終的に……

シュウ「やっぱり勝ったなフォルス」

フォルス「イヤイヤ、フェイクシルエツトはちょっとやばかったな
……結構センスあるんじゃないの？」

銀河戦士団の連中には高く評価されているが、本人が自分は凡人だ
って思い込んでるんだよなあ……もっと強気でいてもいいのに
さ。

その後四人はセカンドフォームの練習をしている。ちなみに俺は……

フォルス「ねえ、そろそろ解いていい？」

シュウ「そうだな。休み休みじゃねえと体に負担かかるしな」

フェイト「え？シュウ何言ってるの？」

シュウ「まあ見れば分かる」

そう言った途端フォルスから銀色の光が放たれ、フォルスの姿が消
える。

なのは フェイト「ええ………!？」

ヴィータ「マジかよ!？」

シグナム「ほう………」

光が消えたのと同時に四人はそれぞれの反応を示した。

無理もない。さっきの人間が20cm程の大きさのピンク色の一頭

身になっていたのだから。一頭身が本来の姿なんだがな。

カービィ「えっとじゃあ改めて自己紹介……フォルス・アルバートのホントの姿、カービィです。正体隠しててすいません」

三人「可愛いから許す！」

シグナム シュウ 「ええ……」

何で可愛いからって理由で許すのこの人達。確かに可愛いけどさあ……。

その後四人はセカンドフォームの練習を行っている。カービィはその間隊長陣のデバイスや魔法をヴァルターに保存している。

なのは「自分のデバイスをそのままコピーさるのって、なんか変な感じ」

カービィ「コピーは僕の神寿司……じゃなかった、神髄だもん」

シュウ「今だにその性格は治って無いのね。自重せいゆうたろうが。何だよ神寿司って。文字でないと使えんなボケ使っな」

カービィ「どうもすいませんでした」

シュウ「謝ってねえじゃん」

なのはがポツリと呟きカービィが軽くボケたんで、それを冷静にツッコむ。

そして朝練が終わり、着替える為に一度隊舎に戻る。

スバル「セカンドモードも大分馴染んできたかなあ」

キャラ「そうですねえ」

唐突にスバルが話を切り出し、キャラが同意する。

スバル「変化の少ない私やキャラはともかく、ティアとエリオは大変そうだしねえ……？」

シュウ「ん……俺には良く分かんわ？俺がダメなの水だけだし」

エリオ「ええ！？シュウさん水ダメなんですか！？」

シュウ「ああ、ガキの頃百メートルの高さからプールに突き落とされたんだぜ？ガキだったからトラウマになってさあ、アレ以来水はダメになったな。克服しようにも、顔つけた瞬間気絶してたからもう諦めてんの」

俺が自分で爆笑しながら言うと、四人はポカーンとしていた。

そして更に俺を不快にさせる知らせが舞い込んで来る。

シュウ「はあ……めんどくせえ……マジめんどくせえ……MAXめんどくせえ……」

エリオ「どうしたんですかシュウさん？顔色が悪いですよ？」

力無く呟くとエリオが心配するように声をかけてくる。

シュウ「もうすぐ嵐が来ると知って体がダルくなっただよ……あゝ、やだやだ……」

俺は死んだ魚のような目をしながら言った。あいつら十番隊は良く言えば賑やか、悪く言えば嵐のような奴らなのだ。

シュウ「あゝ！ヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダヤダ……」

スバル「ウワァー！シ、シュウが壊れた！」

ティアナ（途中ヤマダって言わなかったか？）

-

落ち着いてとりあえず今は事務仕事。スバルが四苦八苦しながらモニターに打ち込んでいるのがよく見える。

ティアナ「はい、終わり」

スバル「早っ……」

ティアナは真面目だからこつこの得意なんだよな？俺はティアナの数分前に終わっているが。

一人分は17g程度、お湯の温度は82 前後、これが美味しいコーヒーのいれ方だ。

呑気に飲んでいるとティアナがはやてに呼ばれたようだ。

スバルがティアナにしがみついて助けを求めている、ティアナが引っぱがそうとしている。

シュウ「やれやれ……」

その時外から凄くデカイ声が聞こえた。

?1「又オオオオオオ！みいいいなあぎいいるうううううううう！」

?2「旦那あ静かにして！皆仕事中だから！」

シュウ「……………」

俺は無言で頭を抱えた。何やってんだあの二人……マジでぶっ飛ばす……

-

妙な騒動がおきた後、なのはがヴィヴィオに話があるらしく、俺も暇だったんで立ち会う事にした。

その内容はなのはがヴィヴィオの保護責任者になることなのだが……

ヴィヴィオ「……？」

よく分かっていなかった。

なのは「ほら、やっぱりよく分からない」

スバル「ええと……なんて言えば分かるのかな……」

なのはが予想通りといったように反応する。

スバル「あつ！そうだ！なのはさんがヴィヴィオのママ代わりって事！」

シュウ「ほう……スバルにしてはよくやった方か」

スバル「それって褒めてるの？」

俺がソファに座って足を組みながら言うと、スバルは苦笑いをしながら返してきた。

ヴィヴィオ「ママ……？」

スバル「あつ……いや……」

なのは「いいよ、ママでも。ヴィヴィオの本当のママが見つかるまで、なのはさんがヴィヴィオのママ代わり。ヴィヴィオはそれでいい？」

ヴィヴィオの言葉に困惑するスバルだが、なのはは肯定し、ヴィヴィオと目線を合わせながら言う。

しばらくしてなのはの言葉を理解したのか、なのはに抱き着いて来た。

よかったよかった。とりあえずなんとか……

ヴィヴィオ「……パパ？」

……てなかった。

シュウ「いや、違うよ。俺はなのは……じゃなくてママの友達だから」

なのは「恋人同士なのに……」↑ボソッ

シュウ「今なんか誤解を招きそうな事呟かなかったか？」

なのはがボソッとリアル過ぎる事を漏らした気がしたので半笑いでツッコむ。

ヴィヴィオ「……お兄ちゃん？」

シュウ「ん？なんだ？ヴィヴィオ」

ヴィヴィオ「えへへ……」

俺が笑って答えると、ヴィヴィオも笑った。

シュウ「たはは……やっぱ、俺も懐かれてる？」

俺はなのはに念話を飛ばすと、なのはは肯定の意を示す為に微笑み返した。

あれ？なんか忘れてる様な……

シュウ「!!」

俺は声にならない悲鳴をあげ、再び頭を抱えた。やべえ……あの馬鹿共を忘れてた……

幸村「たのもー！某は真d……」佐助「旦那あ、此処違うからね？あつ、すいませ〜ん直ぐ退きますんで」

シュウ「お前ら……馬鹿だああああ!!」

なのは達三人はBASARAメンバーと顔合わせをした。名前を知った時は酷く驚いた様子だったが、平行世界の住人だと説明してなんとか落ち着いていた。

その後、幸村が俺のアイアンクローの餌食になったのは余談である。

闇「ハイ、という訳で第n……」

ドカ！バキ！グシャ！ベキ！

闇「ちょっ……しゃーないって！幻想入り動画創ってたら熱が入っちゃっただって！」

ティアナ「何それ？そんな理由で今までほったらかしにしてた訳？」

闇「後悔はしていないが公開はしている。つーかなり長い間放置された小説もあるし、更新してるだけでもまだマシだろ！？」

………

闇「……どうやら俺の勝ちのようだな」

俺は数日間訓練に付き合っているのだが、今日は珍しく隊長陣が全員揃っている。というのも……

なのは「さて、今日の朝練の前に一つ連絡事項です。陸士108部隊のギンガ・ナカジマ陸曹とマルス・ローウェル二等陸士が、今日からしばらく六課へ出向となります」

ギンガ「はい。108部隊ギンガ・ナカジマ陸曹です」

マルス「同じく、108部隊マルス・ローウェル二等陸士です」

二人「宜しくお願いします」

フォワード「宜しくお願いします！」

なのはがギンガとマルスを紹介すると、一歩出て敬礼しながら挨拶すると、四人も挨拶する。

フェイト「それからもう一人」

マリエル「どうも」

もう一人をフェイトが紹介する。マリエル・アテンザ……俺も以前何度か会った事があるし、ヴァルセリオンの開発にも協力してくれた。

シグナム「地上での御用事があるとの事で、しばらく六課に滞在し

ていただく事になった」

シャーリー「デバイス整備を見てくださるようなので」

マリエル「気軽に声を掛けてね？」

シグナムが腕を組みながら説明し、シャーリーが続き、最後にマリエルが明るく挨拶する。

ヴィータ「おーし、じゃあ紹介が済んだ所で……」

ヴィータがアイゼンを担ぎながら言う……

幸村「シュウ殿オオオオオオオオオ！」

マルス「アレをやるのか……」

シュウ「恒例だもんな……」

赤いライダースジャケットを着た茶髪の男性——幸村——が凄い勢いで走って来る。俺とマルスはまただよ。と半ば呆れ気味に呟く。

シュウ「幸村アアアアアアアア！」

俺は幸村同様に叫びながら顔をぶん殴り、100m位まで吹っ飛ばした。

マルス「なんで毎回コレをやるうとするんだらう幸村……」

マルスが溜め息混じりに愚痴をこぼした。

-
俺はセインに古武道を教えている。彼女もそれなりの魔力を持っているので型さえ叩き込んでしまえば後はそれに魔力を流し込んだりすればいい。良く言えば効率のいい、悪く言えば安上がりな方法だ。今はスバルとギンガが模擬戦をやっているようだが気にしない。それとこの前知った事なのだが、俺のバリアジャケットのマントは一部の着脱が可能らしい。それで俺は新技を編み出した。いつ使うかは気分次第だが。

ギンガが勝ったようだがギリギリの勝利といった所だった。

なのは「シュウ君ちょっとコツチ来てくれない？」

……？何の用だ？

なのは「シュウ君、ちょっとギンガと模擬戦やってみない？」

シュウ「上等」

という訳で俺はバリアジャケットを展開し通常形態のヴァルセリオンを構える。

第二形態のウィングゼロカスタムは圧倒的な力を持つのでいざという時にしか使えない。いわば切り札の一つになった訳だ。さてと、無駄話はこれぐらいにして現実に戻るとしよう。

ギンガは左腕のリボルバーナックルを構えて俺に向かってくる。俺は涼しい顔でナックルを手の甲で受け止めてバックステップで避け、

左足で回し蹴りを放つ。

ギンガは何とか障壁を張ってダメージは少ないようだが俺は休む暇を与えずに瞬動で一氣に懷に飛び込んで氣を纏った掌を突き出す。

シュウ「破っ！」

コイツは練氣法を用いた初歩的な攻撃だが、この世界には無い技術なので衝撃を受けているギンガ。

シュウ「真霸光拳！」

更に氣の弾を連続で放つ。

何とか反応して紙一重で躲わすが、その隙に上空へ移動してスペルカードを構える。

シュウ「氷符『ブリザードランス』！」

唱えた直後に数多の氷槍がギンガを取り囲む。本来なら何本かが直撃する筈。つまり、俺の勝ちという訳だ。

シュウ「まっ、こんなもんだろ」

俺は軽く呟きながら伸びをする。

エリオ「シ、シュウさん、さっきのって……？」

エリオが唐突にスペルカードを指差して問い掛ける。

俺は話をする。多少の改変はしてるがな。

ある平行世界には、人と妖怪と神等が共存する世界がある事。このスペルカードは、種族を越えた問題を解決する為の決闘道具だが、下手なことが無ければ死なない事。

決闘の方法は自分の持っているスペカを全て攻略されるか、体力が尽きたら負け。そして、負けたらおとなしく引き下がる。という精神的な決闘であるという事。

俺は要望にお応えして、自分の持っているスペカを披露した。宣言をするたびに感嘆の声が挙がる。

次にフォワード+ギンガ対隊長陣の模擬戦をやっているが俺はパスした。マルスと剣を交えていたからな。模擬戦の最中、なのはとフエイトが異様にハッスルしていた。その事を二人に話したら、「ハッスルする、略してハッする。な〜んてね♪」なんて吐かしたのでため息を着いた後耳元で「馬鹿が」と曾良の真似をしてやった。

二人「馬鹿って言われた……」

二人が若干落ち込んでいたが気にしないでおいた。

シュウ「それじゃあ、改めて自己紹介しとくか。銀河戦士団零番隊隊長、シュウ・ガールランド少佐だ。宜しくな」

ギンガ「はっ、はい！宜しくお願いします！」

俺がギンガに挨拶すると、光栄ですといった様子で返してきた。

シュウ「ハハハハ……歳近いんだし、別に普通に話しかけて来ていいよ。俺、堅苦しいの嫌いだから」

俺はそう言って笑い飛ばした。

ヴィヴィオ「ママ〜!」

なのは「ヴィヴィオ!」

フォワード四人とギンガがクールダウンしていると、ヴィヴィオがトテトテと走ってきた。

フェイト「危ないよ〜? 転ばないでね?」

ヴィヴィオ「うん!」

シュウ「オイッ、バカやめろ……」

ヴィヴィオ「ふあ」

全「あ……」

やっぱこけた。フェイトがフラグ立てるからだよ。

シュウ「全く……大丈夫か? ヴィヴィオ?」

俺はヴィヴィオを抱き上げて声をかける。

ヴィヴィオ「うん……」

声の調子からすると、怪我は無いようだ。

シュウ「そっか」

ヴィヴィオ「えへへ……」

ヴィヴィオの頭を撫でながら言うと、笑いかけてきた。その光景と空気はまさに親子そのものと言っていいだろう。

ちなみに、俺は面倒見がよかったのと、子供が好きなのが理由で子守を積極的にやった経験がある。

-

さて、移動してココは食堂。ヴィヴィオはオムライスをぱくついて上機嫌である。

席はフォワード四人とギンガ、八神家、フェイト＋なのは＋ヴィヴィオといった感じだ。俺はフォワード達と同じ席。座ると同時になのはとフェイトに睨まれた。しょうがねえなあ、次はお前らの所に座るわい。夕食まで待て。

ティアナ「しっかしまあ、子供って泣いたり笑ったり切り替えが早いわよねえ」

ティアナがオムライスを食べているヴィヴィオを見て笑いながら呟く。

ギンガ「スバルのちっちゃい頃もあんなだったわよねえ」

スバル 「うえ！？ちょ、ギン姉、恥ずかしいよ！」

ギンガがしみじみと思い出しながら言うと、スバルが慌てている。

シャマル 「リインちゃんも」

リイン 「ふえゝ！？リインは始めっから割と大人でしたあ！」

よく言うわ。

シグナム 「嘘をつけ」

ヴィータ 「体はともかく、中身は赤ん坊だったじゃんか」

そんなリインをシグナムが一刀両断し、ヴィータがからかうように言う。

リイン 「むー……はやてちゃん！違いますよねえ！？」

はやて 「んゝ……どうやったかなあ？」

リインがはやてに助けを得ようとするが、微笑みながらスルーした。

そして、次に口を開いた奴によって空気が変わる事となる。

ヴァルセリオン「というより、そんな事を言っている時点で既に子供ですけどね」

全員「……………」

シュウ「け……結構バツサリ言うのなお前さん……」

しばらくその場は妙な空気に包まれたのであった。

24th PHASE その日、機動六課（前書き）

怒りが頂点に達した時、英雄の内に眠る闇が目醒める……

24th PHASE その日、機動六課

夜10時頃……俺達はロビーに集まって整列している。内容は勿論、明日の14時に開会される公開意見陳述会についてのミーティングだ。

はやて 「なのは隊長とヴィータ副隊長。リイン曹長とシユウ三佐とフォワード四名はこれから出発。ナイトシフトで警護開始」

フェイト 「皆、ちゃんと仮眠とった？」

はやてとフェイトの言葉に出発組が返事をする。

残りの奴らは早朝に中央入りする事になっている。

そんでもって出発組と待機組がヘリポートで待機している。

シユウ （大丈夫かあいつら？強いのは認めるが、何か待機中に問題起こさないだろうか？）

俺がそんな事を考えてヘリに乗り込む。

最後になのはが乗り込もうとしたが、俺はヴィヴィオとアイナがヘリポートに来ているのに気付き声をあげる。大方、なのはの見送りでもしたかったんだろう。

そんな事考えているとなのはと視線が合うあれ？もしかして、「なのはと俺」の見送りに来たって事か？

俺はマジでかと呟きながらヘリから降りたはやてとシグナムがえらくニヤニヤしていたから俺の予想通りだったのだろうか？

シュウ 「大丈夫だよヴィヴィオ。明日の夜には戻って来るからさ、周りがちと五月蠅いかもしれんが、ちゃんと戻って来るから」

ヴィヴィオ 「本当？」

シュウ 「ああ、必ず」

俺はそう言って頭を撫でると、ヴィヴィオが不安そうに聞き返すと、頷きながら答える。

そしてヘリは出発した。

-

スバル 「それにしても、ヴィヴィオ、本当に懐いちゃってますね」

ティアナ 「全く」

スバルが笑いながら話を切り出すと、ティアナが同意する。

ヴィータ 「お前も結構懐かれてるよな」

シュウ 「うつせえバーロー。昔っから知り合いに面倒見がいいって言われたんだよ」

ヴィータがニヤニヤしながら念話を使って来たので、低い声で反論

した。

なのは 「受け入れてくれる家庭探しはまだまだ続けるよ。いい受け入れ先が見つかって、ヴィヴィオがそこに行く事を納得してくれれば」

エリオ 「納得しない気が……」

シュウ 「確定的だ」

なのは 「うええ!？」

なのはがまだ諦めていないような感じで言うが、エリオが腕を組みながら言うのに俺が続き、なのはは妙な声をあげる。

スバル ティアナ 「うん、うん」

二人も腕を組んで同意する。

なのは 「うつ……そりゃあ、ずっと一緒にいられたら嬉しいけど、本当にいい受け入れ先が見つかったら、ちゃんと説得するよ? いい子だもん……幸せになって欲しいから……」

シュウ 「まつ、遅かれ早かれ、その時はその時だ。なら、それまでしっかり守ってやるのが筋ってもんだ。そうだろう?。」

なのは 「うん」

スバル 「だよね」

エリオ キヤロ 「ハイ！」

数的不利に立ったなのはが本音を漏らすと、俺が無理矢理結論に述べると、四人が口々に同意した。

深夜1時頃、俺達は現地入りした。ミッドに降り立った時に見たデカイ建物は地上本部だったようだ。

俺はメタナイトと久しぶりに面会をして懐かしみ、つつい会話が発弾でしまった。

因みに、俺となのはは内部警備だが、デバイスは持ち込めないそうなので、エリオにヴァルセリオンを預け、俺は本部へ歩みを進めた。いざとなれば……ドラゴアーツでぶった切ってやる……

-

シュウ 「開始から4時間ちょいか……だが、油断はならねえな」

俺はあちこちろついているが、何にも分からん。となると、外部からの急襲……これしか考えられねえ……

シュウ 「つーか本当に狙って来るのか？なんか疑問n……！！」

俺はそう独り言を言っていると、空気の流れが変わるのに気づく。その刹那、あちこちで爆発が起きる。遂におっぱじめやがったか……！！

俺はガジェット共が開けた穴から外へ飛び出す。

シュウ 「邪魔だ！」

飛び蹴りでAMFをたやすく突き破り、俺はメタナイトにテレパシ―を送る。

シュウ 「メタナイト！発動許可を！」

しばらくして俺はドラゴーツを呼び出して構えると同時に背中から翼を展開させて、急行する。

シュウ 「我が瞬速の剣技、貴様に逃げ場はない！」

俺は圧倒的速さでガジェット共を真つ二つにしていく。

シュウ 「邪魔だ邪魔だ邪魔だ邪魔だ邪魔だ邪魔だ邪魔だあああああああああああ！！！！」

俺は完全にスイッチが入り、咆哮をあげる

飛んでいる最中、下界に四人が見えたので、一先ず降りる。

シュウ 「エリオ！」

エリオ 「シュウさん！？」

俺の背に翼があるため四人は相当驚いているようだが、話は後だ。

スバル 「シュウ……羽根……」

シュウ 「話は後だ！ヴァルセリオンを」

俺が冷静に言い放つと、エリオがポケットからヴァルセリオンを取り出してそれを受け取る。

シュウ 「まだだ！一機足りとも通さねえ！」

俺はそう叫びながら戦場へ戻った。

↓

俺の目の前には今だ数十機のガジェットがいる。まあ、この数なら一分足らずで殲滅出来るかな。

ゆるーくぶった切りまくと、俺の視界に戦闘機人二人とヴァラトブルクが抗戦していた。敵同時が抗戦しているならば、疲弊している所を叩くのが常道だが、俺の狙いはあくまでもヴァラトブルク。ガジェットやレリックはその次に過ぎない。だから……

シュウ 「はいよー！退け退け退け退け退け！こつちだポンコツ共！！」

俺がそう叫びながら奴らの上空を通過すると、機械兵の動きが止まり、全機が俺に向かって来る。

シュウ 「斬！」

俺がドラゴアーツを横に薙ぎ払うと、機械兵は全滅した。

シュウ 「さて……後は……」

すると、メタナイトから通信が入る。隊舎に戦闘機人が襲撃してきたらしい。だが、俺は冷静であり、どこぞの新世界の王の物真似をして吐き捨てる。

シュウ 「くつくつくつ……計画通り」

「セーレSIDE」
リーダーの予想通りだ。やはり隊舎の方も狙って来たな……先ずは上々だ。

俺は現在光学迷彩を施したマントを羽織り、目の前の同士（戦闘機人）を睨みつけている。

ザファイラが飛び掛かろうとしているが、赤い刃の双剣を持ったロングヘアーの女性が迎撃して来る。シャマルも負傷しているようだ。

ツンツン「さよなら……」

ツンツン髪の奴が二人に掌を向けて、緑色の魔力光が収束される。

セーレ「時間だ……行くぜガンマ」

ガンマ「了解……」

俺とガンマは短くやり取りをした後に二人の前に突っ込み、射撃魔法をW蹴りで粉碎する。

四人には急に射撃魔法が止まったので驚いた顔をしている。

セーレ「漆黒襲滅、セーレ・ヴェルナンド……」

ガンマ「冷酷死神、ガンマ・ロック・フィールド……」

二人『推して参る!!』

そしてそれぞれ二つ名を言いつつ光学迷彩マントを投げ捨て獲物を構える。

ツンツン「まだ生き残りがいたか……IS、レイストーム」

セーレ「IS発動、影の宴！」
シャドウ・ザ・バンケット

ツンツン頭の奴の砲撃と俺の操る影が激突するが、俺の影はそこま
で脆くねえ、すぐに消滅させる。

デイド「戦闘機人!？」

セーレ「ざまあねえな。それと、後ろを見なくていいのか？」

俺がそういうのと同時にガンマがデイドに斬りかかる。

セーレ「さてと、お前さんの相手はこの俺だ。どっからでもかかっ
てきやがれ!」

ツンツン「やけに自信满满だね……たかがその程度のISで僕に勝
てるんでも?」

セーレ「なら、体を動かしてみな?」

ツンツン「!？」

まんまと俺の作戦に引っかかったツンツン。話している間に自分の影を？ぎ止められたってえのに、呑気な野郎だ。……いや、嬢ちゃんか。

セーレ「降伏しろ。アンタらに勝ち目はない。リーダーに目をつけられたのが運のつきだったんだよ」

ツンツン「くっ……」

俺がそう忠告すると、不本意そうな顔をしているツンツン。ガンマもデイドを地面に伏せさせ、首元に鎌を近づけている。

何はともあれ、奴らを保護して結果オーライと思っていたが、ヴィオっていう女の子と、ギンガって子が連れ去られたらしい

セーレ「リーダー……大丈夫か……？」

俺はリーダーを心配した。こういう事に関して敏感だし……心配だなあ……

「シュウSIDE」

俺の前にはさっきの二人の戦闘機人がある

シュウ「勘違いするな。我等銀河戦士団の目的は奴らの掃討、貴様等など路傍の石に過ぎねえ……それに」

俺はふう……と溜め息を着いた後、付け足す。

シュウ 「囲まれているしな」

俺がそういつて一発虚空に放つと「グオオオオオオ！」と咆哮が聞こえ、スペースパイレーツの一体が下降して行った。それと同時に全員が光学迷彩を解除し、一斉に奇声をあげた。

長身の女 「な、何だコイツラは!？」

シュウ 「スペースパイレーツ。宇宙の支配を目論むろくでもない奴らさ」

長身の方が驚いていると、俺は冷静に言い放つ。

シュウ 「邪魔するなアアアア！」

俺は息を一気に吸い込んで一喝する。

すると奴らは一斉射撃の態勢に入る。

シュウ 「……馬鹿共が」

ダダダダダダダダダダダダダッ!

雨のような銃弾が俺を襲う……が、

シュウ 「リフレクター!」

俺は全包围にリフレクターを設置し弾丸を全て弾き返し、全滅させ

た。こらそこ！「酷え……」とか「血も涙もねえ」とか言うな！

一掃した後、二人がいない事に気づく。しまったあ！あのゴタゴタの際に逃げ出したかあ！

更に嫌な知らせが舞い込む。ギンガが連れ去られたという。だが…

シュウ「……風魔」

俺はビルの屋上に着地して、あいつの名を呼ぶとギンガをお姫様抱っこした風魔が羽根を撒き散らしながら現れる。

全ては俺の計画通り……と言いたい所だが、一つだけ例外があった。

それはヴィヴィオが連れ去られた事、まさかヴィヴィオも狙いだっ
たとは……迂闊だった……

シュウ「……ちっ」

俺はこんな時も冷静だった。盗られたら取り返せばいい。呆れる程
簡単だ。

俺は取り敢えずギンガをドルダーザの自分の部屋へ運び込んだ。

さて……後は戦場に残る奴らを傷み付けてやらんなあ……？

私は成す術も無く、スカリエッティの演説を聞いている。

スカリエッティ「ミッドチルダ地上の管理局員の諸君、気に入ってくれたかい？細やかながらコレは私からのプレゼントだ。治安維持だのロストロギア規制だのといった名目のもとに圧迫され、正しい技術の進化を促進したいにも関わらず、罪に問われた稀代の技術者達……今日のプレゼントはその恨みの一撃とでも思ってくれたまえ」

何が正しい技術の進化や。シュウ君達もそういう事やってるって聞いたけど、悪い事するような人には思えん。命を作るって神様みたいなこの出来るのはシュウ君等で十分過ぎる。

スカリエッティ「しかし私もまた人間を、命を愛する者だ、無駄な血は流さない努力はしたよ。可能な限り無血に人道的に。忌むべき敵を一方的に制圧する事の出来る技術……それは十分に証明できたと思う。今日はここまでにしておくでしょう。この素晴らしき力と技術が必要ならば、いつでも私宛てに依頼をくれたまえ。格別の条件でお譲りする」

私はそれが齒がゆくて両手を固く握りしめた。一見するといひ話に聞こえるけど、それよりも敬意を評するべき行動をしている人が傍にいる私には只の綺麗事にしか聞こえない。

スカリエツティ「シュウ・ガーランド君、コレを聞いているかね？
幾ら君が足掻こうとも君にはどうする事も出来ない。精々無駄な足
掻きが続けたまえ。クッククッククック……ハハハハハハハハハ
ハハ！ーアハッハッハッハッハッハッハッハ！」

253

……？何やる……この強大な反応は……？

そう思った矢先にモニターが切り替わり、巨大な化け物が映し出される。それはガジェットを徹底的に破壊し続けている。

カリム「あ、あれは！？」

ずっと居たから分かる。顔といい、持っている武器といいあれは完全に……

はやて「シュウ……君？」

25th PHASE 翼、ふたたび

ドルダーザ、シュウの部屋

俺は眠っているギンガを横目に堅く両方を握り締めていた。

あの傷……戦闘機人で無かったら死んでいただろう。ジェイル・ス
カリエッティ……奴は万死に値する！！俺を怒らせたのだ……瀕死
では済まさない……！

ギンガ 「うつ……」

唐突にギンガが呻き声を出したので、目を向ける。

シュウ 「気が付いたか、ギンガ」

ギンガ 「シュウ？なんで私……」

俺がホッとしたように言うと、ギンガが体を起こして問い掛ける。

シュウ 「ああ、予め風魔がギンガの分身をこしらえていてさ、連
れ去る寸前に入れ換えて助け出したんだ。それで、俺が治療をした
んだ。得意だからな、機械系統」

傍らに座り事情を説明していくと、ギンガの顔に明るさが戻り始め
抱き着いて来た。ちよっ……当たってる！何か柔らかいモノが当た
ってる！

暫くすると、ギンガはハッとした様に離れ、顔を赤くした。俺も若

干戸惑っている。

ギンガ 「ゴ、ゴメン……急に抱き着いたりして……／＼／＼」

シュウ 「お……おっ……」

俺は昂揚した気持ちを静めながら応える。

ギンガ 「でも……なんで……」

シュウ 「約束したからな」

〈回想〉

それはギンガが六課に出向して三日目の日だった。

スバル 「そういえばシュウって何か格闘術を習ってるの？」

シュウ 「うん、俺は機神拳って奴を習得してるんだ」

機神拳とは、覇気と呼ばれる生命エネルギーを使用して戦う格闘術である。因みに修羅王直伝である。

シュウ 「何なら教えてやろうか？機神拳の練気術と組み合わせれば、確実に強くなれる筈だ」

俺がそう言っと、ナカジマ姉妹は大喜びで教えてくれと言ってきた。

〈回想終了〉

そう、まだ二人には完全に教えていない。

二人は先週ようやくスバルは機神猛撃拳、ギンガは機神轟撃拳をマスターしたばかりである。まだ奥義を使えてはいないのだ。

シュウ 「まだ安静にしていた方が良い。スバルには俺から話すよ」
俺がそう言つと、ギンガは頷き返した。

-

「ギンガSIDE」
目が覚めると、私は知らない部屋にいた。うゝん……やっぱり戦闘機人を三人同時に相手をするのは無茶だったかなあ……

シュウ 「気が付いたか、ギンガ」

唐突に聞こえた声の方を見ると、机に片手をかけた姿勢でシュウが笑っていた。

ギンガ 「シュウ？なんで私……」

シュウ 「ああ、予め風魔がギンガの分身をこしらえていてさ、連れ去る寸前に入れ換えて助け出したんだ。それで、俺が治療をしたんだ。得意だからな、機械系統」

私が疑問を投げ掛けると、事情を説明し始めるシュウ。そうか……やっぱり宇宙最強は格が違った！！

私は反射的にシュウに抱き着いていた。

ギンガ 「ゴ、ゴメン……急に抱き着いたりして…… / / / /」

シュウ 「お……おう……」

私は自分がした事に恥ずかしがりながら言つと、頬を人差し指で掻きながら反応するシュウ。ちよつと可愛いかも……

ギンガ 「でも……なんで……」

シュウ 「約束したからな」

私はシュウの言葉にハツとする。数週間前から私とスバルはシュウから機神拳を習い始めている。その約束を完遂する為に……

シュウ 「まだ安静にしていた方が良い。スバルには俺から話すよ」

シュウはそう言つて部屋を出て行つた。

-

↓シュウSIDE↓

俺はスバルの様子を見る為に聖王医療院にいる。確かこの部屋だよな。

部屋に入ると、ティアナがいた。

シュウ 「ありゃ？お邪魔しちゃったかな？」

スバル 「シュウ！」

シュウ 「ハハハッ……こりや直ぐに立ち直りそうだな」

ティアナ 「アンタも気楽ねえ……スバルもアンタと同じ様な立場になったのに」

俺が笑いながら言うと、ティアナが呆れた様に言ってきたので俺はニヤリとしながら付け足した。

シュウ 「ギンガを救出……と言ったら？」

すると、二人は目を丸くした。

スバル 「本当？」

シュウ 「何なら通信するか？無事だったら出る筈だが？」

俺がそう言うなり、スバルはギンガに連絡しようとする。モニターにギンガが映った時の喜びようと来たら……だが、

シュウ 「だが、まさかヴィヴィオまでもが目的だったとは……ちっ、不覚だ……」

俺は低く呟き、舌打ちをした。そういえばフェイトに何か頼まれてたっけ？

シュウ 「スマン、用事があつたのを思い出した。帰るわ」

俺はそれだけ告げると空間転移で移動した。

-

俺は途中でフェイトと合流し、ゲンヤと対面する。

今は俺とゲンヤ、なのは、シグナム、ヴィータ、フェイト、更にモニター越しにクロノとカリムが向かい合っている。

因みに、他の連中は復旧作業の方へ行っている。

ゲンヤ三佐は戦闘機人について話始めた。殆ど俺の世界の奴と変わらなのでスルーしているが。

ゲンヤ 「まあ、調整されるって点で言えば、ソコの坊主の言うコ―ディネイターとはあまり変わらんがな」

シュウ 「そうだな」

ゲンヤ三佐が唐突に俺を例にあげて来たので相槌を打つ。

そして、話はナカジマ姉妹の事へと移る。

奥さんが戦闘機人事件を追っていた最中、実験体である二人を見つけ、髪の色や顔立ちも自分に似ているという事から連れ帰ったと言う。

シュウ 「話した方が良いかな？」

フェイト 「うん……その方がいいと思う」

俺はフェイトとそつやり取りをした後、切り出す空気を探る。

ゲンヤ 「まあ、今でも地道に捜査はしているし、告発もあるかもしれないねえしな」

…… 此処だ！

シュウ 「そういえば……」

俺がこう呟くと事情を知らない三人が反応を示す。

シュウ 「以前、俺のオリジナルが恐らく……三佐の奥さんと思われる方と他二人と共に捜査をしているという内容の記憶を見たのですが……」

先ずこう切り出して話し始める。 恐らく、戦闘機人に襲撃されたのではないか。という俺なりの結論を付け足して。

シュウ 「まあ、何はともあれ今は目の前に事件に集中するのが無難かと」

俺がそう言って話題を変えると、フェイトが切り出し、会議を始めた。

-

俺はゲンヤにギンガの無事を知らせた後――やっぱり最強の戦士はやる事が違うなと言っていた――、自分の部屋へ戻り光の腕輪を装着した。次の戦闘で重要だと思ったからだ。

ジェイル・スカリエッティ…… 必ず取っ捕まえてやらあ！

その時、ドルダーザに狂喜的な笑い声が轟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0749s/>

魔法少女リリカルなのは～伝説の戦士と魔導師達～

2011年11月11日16時06分発行